

平成 28 年（2016 年）熊本地震

# 熊本地震における建築物被害の 原因分析を行う委員会 報告書（案）

1. 委員会設置の目的・経緯
2. 地震及び地震動の特徴
3. 被害状況・被害要因等の分析
4. 調査結果を踏まえた総括

平成 28 年 9 月

# 目次

## 1. 委員会設置の目的・経緯

1.1 委員会の目的	1-1
1.2 委員会の構成	1-1
1.3 開催日程	1-2

## 2. 地震及び地震動の特徴

2.1 地震の概要と特徴	2-1
2.1.1 地震諸元	2-1
2.1.2 震度分布	2-1
2.2 前震および本震の地震動特性	2-2
2.3 被害集中域の地盤	2-13
2.4 まとめ	2-17

## 3. 被害状況・被害要因等の分析

3.1 調査方針	3.1-1
3.2 益城町中心部における悉皆調査	3.2-1
3.2.1 調査の概要と方法	3.2-1
3.2.2 調査結果	3.2-1
3.2.3 まとめ	3.2-8
3.3 木造建築物の被害の特徴と要因	3.3-1
3.3.1 調査の概要・範囲等	3.3-1
3.3.2 被害調査の結果及び要因の分析	3.3-1
3.3.3 益城町中心部において倒壊した木造建築物の被害要因の分析	3.3-5
3.3.4 まとめ	3.3-10
3.4 鉄骨造建築物の被害の特徴と要因	3.4-1
3.4.1 調査の概要・範囲等	3.4-1
3.4.2 被害調査の結果及び要因の分析	3.4-1
3.4.3 まとめ	3.4-7
3.5 鉄筋コンクリート造等建築物の被害の特徴と要因	3.5-1
3.5.1 調査の概要・範囲等	3.5-1
3.5.2 調査結果の概要と被害の特徴	3.5-1
3.5.3 1981年以降に設計された建築物の被害要因分析	3.5-3
3.5.4 まとめ	3.5-5
3.6 基礎・地盤の被害の特徴と要因	3.6-1
3.6.1 調査の概要・範囲等	3.6-1
3.6.2 益城町の調査（通り悉皆調査）	3.6-1
3.6.3 熊本市南区の液状化被害調査	3.6-7

3.6.4	まとめ	3.6-10
3.7	免震建築物の被害の特徴と要因	3.7-1
3.7.1	調査の概要・範囲等	3.7-1
3.7.2	被害調査の結果及び要因の分析	3.7-1
3.7.3	まとめ	3.7-7
3.8	非構造部材の被害の特徴と要因	3.8-1
3.8.1	調査の概要・範囲等	3.8-1
3.8.2	被害調査の結果及び要因の分析	3.8-1
3.8.3	まとめ	3.8-6
4.	調査結果を踏まえた総括	
4.1	建築物の倒壊・崩壊の防止について	4-1
4.1.1	木造	4-1
4.1.2	鉄骨造・鉄筋コンクリート造等	4-2
4.1.3	免震建築物	4-2
4.1.4	非構造部材	4-2
4.2	建築物の被災後の機能継続について	4-2
4.3	その他の課題	4-3
4.3.1	原因分析に至らなかったものの対応	4-3
4.3.2	今後新たに報告があった場合の対応	4-3

## 謝辞

# 1. 委員会設置の目的・経緯

## 1.1 委員会の目的

平成 28 年 4 月 14 日 21 時 26 分に熊本県熊本地方の深さ約 10km でマグニチュード(M)6.5 の地震が発生し、上益城郡益城町で最大震度 7 を記録した。さらに、約 28 時間後の 4 月 16 日 01 時 25 分に同地方の深さ約 10km で M7.3 の地震が発生し、上益城郡益城町で再度震度 7 を、また、阿蘇郡西原村でも震度 7 を記録した。震度 6 弱を上回る大きな地震は 7 回観測された。これらの地震により、熊本県を中心に数多くの建築物に倒壊などの被害をもたらした。気象庁は、熊本県を中心とする一連の地震活動を「平成 28 年(2016 年)熊本地震」と命名した。

8 月 31 日現在、人的被害は死者 98 名、負傷者 2,422 名、住家被害は全壊 8,169 棟、半壊 29,294 棟、一部損壊 136,607 棟)、非住家被害は公共建物 311 棟、その他 2,605 棟となっている(総務省消防庁災害対策本部公表資料「熊本県熊本地方を震源とする地震(第 75 報)」より)。

本委員会は、国土技術政策総合研究所(以下「国総研」という)及び国立研究開発法人建築研究所(以下「建研」という)が実施してきた、建築物被害の現地調査(表 1.1-1 現地調査に基づく被害状況報告等(国総研・建研等による調査概要))の結果に加えて、一般社団法人日本建築学会(以下「建築学会」という)等が実施している調査内容(表 1.1-2 現地調査に基づく被害状況報告等(建築学会等による調査概要))を幅広く収集・整理<sup>※</sup>するとともに、調査結果や関連データ等により、専門的・実務的知見を活かして、建築物被害の原因分析を行うことを目的としている。

本委員会は建築構造の専門家、建築設計や建築審査の実務者を委員とし、国総研に設置されている「建築構造基準委員会」(委員長:久保哲夫 東京大学名誉教授)と建研に設置されている「建築研究所熊本地震建築物被害調査検討委員会」(委員長:塩原 等 東京大学教授)の合同開催の形で開催した。

国土交通省は、本委員会による分析のとりまとめを踏まえ、建築基準のあり方を含め、建築物の耐震性の確保・向上方策について検討することとしている。

※ 主な調査としては、木造建築物では、日本建築学会の益城町における悉皆調査とそれらの建築物を対象とした国土交通省住宅局における建設年代調査、鉄骨造建築物等では、文部科学省における学校施設等の被害状況の情報を踏まえた現地調査が挙げられる。

## 1.2 委員会の構成

### ◎建築構造基準委員会

委員長	久保 哲夫	東京大学 名誉教授
副委員長	平石 久廣	明治大学理工学部建築学科 教授
	丑場 英温	(一社)日本建設業連合会設計委員会 構造設計部会長
	遠藤 正幸	(一社)日本建築士事務所協会連合会 副会長
	大熊 久理子	日本建築行政会議 構造部会長
	奥田 泰雄	国立研究開発法人建築研究所 構造研究グループ長
	金岡 宏幸	日本建築行政会議 構造計算適合性判定部会長

	河合 直人	工学院大学建築学部建築学科	教授
	北村 春幸	東京理科大学理工学部建築学科	教授
	田中 仁史	京都大学	名誉教授
5	棚野 博之	国立研究開発法人建築研究所	材料研究グループ長
	中井 正一	千葉大学	名誉教授
	中島 正愛	京都大学防災研究所	教授
	中埜 良昭	東京大学生産技術研究所	教授
	梶田 佳寛	宇都宮大学	名誉教授
	緑川 光正	北海道大学	名誉教授
10	森高 英夫	(一社)日本建築構造技術者協会	会長
	安村 基	静岡大学学術院農学領域	教授

◎建築研究所熊本地震建築物被害調査検討委員会

	委員長	塩原 等	東京大学大学院工学系研究科建築学専攻	教授
15	副委員長	飯場 正紀	北海道大学大学院工学研究院	教授
		五十田 博	京都大学生存圏研究所	教授
		楠 浩一	東京大学地震研究所災害科学系研究部門	准教授
		清家 剛	東京大学大学院新領域創成科学研究科	准教授
		福山 洋	国土交通省国土技術政策総合研究所	住宅研究部長
20		山田 哲	東京工業大学科学技術創生研究院未来産業技術研究所	教授

1.3 開催日程

	第1回	平成28年5月26日
	第2回	平成28年6月30日
25	第3回	平成28年9月12日

表 1.1-1 現地調査に基づく被害状況報告等（国総研・建研による調査概要）  
（平成 28 年 9 月 9 日現在）

国土交通省住宅局の要請を踏まえて実施した国総研・建研の合同調査一覧

項目	派遣期間	調査地域	目的	備考
第一次調査 (2名)	4/15 -4/17	熊本市、益城町、南阿蘇村、 西原村、山都町	基本的情報収集、追加的調査の必要性検討な どのための初動調査	速報 公開済
第二次調査 (4名)	4/16 -4/19	【木造】熊本市、益城町、 南阿蘇村	木造住宅の倒壊等の被害が多いとの情報があ った地域の被害状況を調査	速報 公開済
		【RC造等】熊本市、益城町、 宇土市、宇城市	RC造・SRC造建築物の被害情報があった地域 の被害状況を調査	
第三次調査 (3名)	4/19 -4/21	熊本市、益城町、西原村	多数の建築物被害が発生している地域の S 造 建築物、非構造部材及び設備の被害状況調査	速報 公開済
第四次調査 (2名)	4/22 -4/24	熊本市、益城町	益城町における地盤・基礎に着目した建築物 の被害状況調査。熊本市南区における液状化 の状況調査	速報 公開済
第五次調査 (3名)	4/26 -4/28	熊本市、益城町、大津町、 御船町	建築物の火災被害（設備を含む）について、 消防当局、火災現場周辺住民からのヒアリン グ及び現地調査	速報 公開済
第六次調査 (4名)	4/26 -4/28	益城町、南阿蘇村	一部地域において比較的築年数の浅い木造住 宅の被害状況を悉皆的に調査	
第七次調査 (2名)	4/28 -4/29	熊本市、益城町、宇土市	新耐震基準による RC 建築物の被害状況調査	
第八次調査 (3名)	4/28 -4/29	益城町	益城町の一部地域における S 造建築物の被害 状況と、そのうち倒壊・大破している建築物 の被害状況詳細調査	速報 公開済
第九次調査 (3名)	4/29 -4/30	熊本市、阿蘇市、山鹿市、 菊池郡	免震建築物の被害状況調査	速報 公開済
第十次調査 (4名)	5/19 -5/20	益城町	益城町の一部地域における木造建築物及び基 礎・地盤を中心とした調査	
第十一次調査 (2名)	5/23 -5/25	熊本市、益城町	ホール等の特定天井を中心とした 非構造部材の被害状況調査	速報 公開済
第十二次調査 (4名)	6/6 -6/8	熊本市	新耐震基準適用の RC 造建築物の被害状況調査	
第十三次調査 (6名)	6/8 -6/10	熊本市、宇城市、山都町	体育館の被害状況調査	速報 公開済
第十四次調査 (2名)	8/3 -8/5	熊本市、大津町、菊陽町、 合志市	自治体体育館等の特定天井を中心とした非構 造部材の被害状況調査	

※国総研・建研では上記のほか、合同で自主調査や補足的な調査を実施している。

表 1.1-2 現地調査に基づく被害状況報告等 建築学会等による調査概要(平成 28 年 9 月 9 日現在)

No	調査実施者・報告者 (敬称略)	区分 (主対象)	調査等の内容	調査対象地域	調査日 (公開日)	情報源 (URL)
1	多田元英・桑原進(大阪大学)ら	S造	S造建物を中心とした調査(速報。写真とコメント)	熊本市, 益城町, 宇土市, 宇城市, 西原村, 嘉島町, 城南町	5/21-22	AIJ①
2	永野正行(東京理科大学)・肥田剛典(東京大学)ら	木造	南阿蘇村の被害状況報告(写真のみ)	南阿蘇村	5/2	AIJ①
3	西山峰広・谷昌典(京都大学)ら	RC造	PC造建築物, 耐震補強済 RC造建築物, RC造雑壁に被害を受けた集合住宅等調査(写真とコメント)	熊本市, 菊陽町, 嘉島町, 宇土市, 宇城市	5/14-15	AIJ①
4	川瀬博(京都大学)ら	地震動	スペクトル分離で求めた震源特性とサイト特性の分析結果と考察		(5/14)	AIJ①
5	神野達夫(九州大学)ら	建物全般	本震前後の被害状況の比較(写真のみ)	益城町	4/15, 23-25	AIJ①
6	曾田五月也(早稲田大学)・宮津裕次(広島大学)ら	建物全般	被害状況調査(写真とコメント)	益城町, 阿蘇市, 南阿蘇村, 西原村	5/3-5	AIJ①
7	瀬尾和大(東京工業大学名誉教授)	建物全般、地震動等	印象記、被害状況(写真とコメント)、過去の震災との比較、地震動分析等	阿蘇市, 南阿蘇村, 益城町, 熊本市ほか	5/5-6	AIJ①
8	斉藤大樹(豊橋技術科学大学)ら	建物全般、避難所	被害状況報告、避難所の状況報告(写真とコメント)、ヒアリング記録	大津町, 南阿蘇村, 西原村, 益城町, 合志市, 熊本市, 宇土市, 御船町	5/5-8	AIJ①
9	河野進教授(東京工業大学)ら	RC造	RC造建物の被害状況の把握(写真とコメント)	M町, K市, O町, N村, U市	5/1-3	AIJ①
10	川瀬博教授(京都大学)ら	地震動	被害状況報告(写真とコメント)、微動観測と地震観測データの分析とそれに基づく考察	益城町, 西原村	4/29-5/1	AIJ①
11	京都大学建築保全再生学講座	地震動、建物全般	地震記録分析、墓石転倒状況調査、微動計測結果、被害状況報告(写真とコメント)	阿蘇市, 西原村, 益城町, 熊本市	4/29-30	AIJ①
12	富岡義人・田端千夏子・川口淳・水木千春(三重大学)	建物全般	被害調査(写真と被害状況分析)	熊本市	4/24-5/2	AIJ①
13	壁谷澤寿海(東京大学)ら	RC造	耐震補強建物の被害状況(写真と被害状況分析)	熊本市, 益城町, 宇土市	4/25	AIJ①
14	田端千夏子・富岡義人(三重大学)	木造	木造の被害状況調査(写真とコメント)	益城町	4/23, 25	AIJ①
15	楠浩一(東京大学)ら	RC造	RC造建物等の被害状況(写真、被害状況分析、簡易耐震診断等)	益城町, 熊本市, 宇土市	4/23-24	AIJ①
16	真田靖士(大阪大学)ら	RC造	RC壁式構造の被害状況(写真、被害状況分析)	益城町, 宇土市	4/24	AIJ①
17	筑波大学境研究室	地震動	地震動記録とその特性の分析、観測点付近の被害状況等	大津町, 西原村, 合志市, 益城町, 熊本市, 天草市, 宇土市, 宇城市	(4/19)	AIJ①
18	富岡義人・川口淳(三重大学)ら	建物全般	被害状況報告(写真とコメント)、ヒアリング記録	西原村	4/26	AIJ①
19	広島工業大学荒木秀夫研究室	RC造	RC造建物等の被害状況(写真とコメント)	熊本市, 益城町, 八代市	4/23-24	AIJ①

No	調査実施者・報告者 (敬称略)	区分 (主対象)	調査等の内容	調査対象地域	調査日 (公開日)	情報源 (URL)
20	田尻清太郎 (東京大学) ら	RC 造	RC 造建物等の被害状況 (写真とコメント)	熊本市, 益城町, 八代市	4/16-17	AIJ①
21	京都大学建築保全再生学講座	地震動	地震記録分析、観測点の状況・被害状況 (写真)、墓石転倒状況調査	益城町, 熊本市, 八代市, 宇土市, 大津町, 菊池市, 山鹿市, 八女市	4/16-17	AIJ①
22	佐藤利昭 (九州大学)	建物全般	本震前の益城町の被害状況 (写真とコメント)	益城町	4/15	AIJ①
23	高山峯夫 (福岡大学)		建築学会の取り組み、地震記録、被害状況、今後の課題等		(5/14)	AIJ②
24	神野達夫・重藤迪子 (九州大学)	地震動	地震記録とその分析、余震観測等の説明		(5/14)	AIJ②
25	菊池健児 (大分大学)・黒木正幸 (崇城大学)	建物全般	益城町の本震前後の状況、益城町の悉皆調査の概要、大分県内の被害状況	益城町 (悉皆調査) 由布市, 別府市 (大分県内)	5/3-8 (悉皆調査) 4/25-30, 5/6 (大分県内)	AIJ②
26	五十田博 (京都大学)	木造	木質構造災害 WG による調査概要と被害状況分析			AIJ②
27	田中 圭 (大分大学)	木造	木質構造建物、文化財等の被害状況 (写真とコメント)	熊本市, 阿蘇市, 益城町, 南阿蘇村		AIJ②
28	花井伸明 (九州産業大学)・向井智久 (建築研究所)・田尻清太郎 (東京大学)	RC 造	RC 造建物の被害状況 (写真とコメント)	熊本市, 益城町, 大津町, 宇土市, 八代市, 人吉市, 御船町	4/16-5/8	AIJ②
29	松尾真太郎 (九州大学)	S 造	S 造建物の被害状況 (写真とコメント)	益城町, 熊本市等	5/7 他	AIJ②
30	清家 剛 (東京大学)	非構造	木造・ガラス・その他の非構造部材の被害状況 (写真とコメント、分析)、学校建築の非構造部材の被害状況 (写真とコメント、分析)	熊本市, 宇城市, 宇土市, 八代市, 由布市, 大分市, 別府市		AIJ②
31	神戸大学向井洋一准教授ら (建築学会近畿支部木造部会)	木造	木造建築物の被害調査の結果の概要	益城町, 西原村ほか	5/21-23	AIJ 災害委 ML
32	長尾毅 (神戸大学)	地震動	被害状況 (写真)、地震記録分析、常時微動測定・アレイ観測結果とそれに関する考察	益城町, 御船町, 阿蘇市	4/15-18	神戸大 HP
33	秦吉弥 (大阪大学)・後藤浩之 (京都大学) ら	地震動	主要観測点付近の地震記録分析・被害状況 (写真とコメント)、益城町等における臨時地震観測結果	益城町ほか	4/15-16 (臨時観測)	土木学会 HP、発表論文
34	東京工業大学山中研究室ほか	地震動	余震観測点付近の被害状況、余震観測結果	益城町ほか	4/16- (余震観測)	東工大 HP
35	宇根寛 (日本活断層学会)、加藤照之 (日本地震学会)、		熊本地震に関する各学会の活動状況等			SCJ①
36	東畑郁生ら (地盤工学会)、熊木洋太 (日本地理学会)		地震に関する情報に関する各学会の活動状況等			SCJ①



No	調査実施者・報告者 (敬称略)	区分 (主対象)	調査等の内容	調査対象地域	調査日 (公開日)	情報源 (URL)
37	三谷泰浩(地理情報システム学会)、本田利器(土木学会)、高山峯夫(日本建築学会)、楠浩一(日本地震工学会)、鈴木尚登ら(農業農村工学会)		被災状況と対策に関する各学会の活動状況等			SCJ①
38	釜井俊孝(日本応用地質学会) 福岡浩ら(日本地すべり学会)、山下伸太郎(砂防学会)		土砂災害・風水害と対策に関する各学会の活動状況等			SCJ①
39	山本あい子(災害看護学会)、森野一真(集団災害医学会)		避難・救助・救援に関する各学会の活動状況等			SCJ①
40	山本佳世子(計画行政学会)、中林一樹(災害復興学会)、吉岡敏明ら(廃棄物資源循環学会)		復旧・復興に関する各学会の活動状況等			SCJ①
41	日本建築学会学校建物被災度判定 WG	RC 造、S 造	文部科学省からの委託による文教施設調査	熊本県、大分県	5-6 月	文科省
42	日本建築学会近畿支部木造部会	木造	伝統木造建築物の詳細調査・外観悉皆調査	益城町、西原村	5/21-23	AIJ①
43	高山峯夫(福岡大学)		建築学会の取り組み、地震記録、被害状況等			AIJ③
44	神野達夫(九州大学)	地震動	地震記録とその分析等の説明			AIJ③
45	田中 圭(大分大学)	木造	木質構造建物、文化財等の被害状況(写真とコメント)	熊本市、南阿蘇村ほか		AIJ③
46	花井伸明(九州産業大学)	RC 造	RC 造建物の被害状況(写真とコメント)	熊本市ほか		AIJ③
47	田尻清太郎(東京大学)	RC 造	RC 造学校建物の被害状況(写真とコメント)	熊本市、益城町		AIJ③
48	松尾真太郎(九州大学)、伊山 潤(東京大学)	S 造	S 造建物の被害状況(写真とコメント)	熊本市ほか	5-6 月(文教施設)	AIJ③
49	井上朝雄(九州大学)	非構造	非構造部材の被害状況(写真とコメント)	熊本市ほか		AIJ③
50	太記祐一(福岡大学)	木造等	歴史的建造物の被害状況(写真とコメント)	熊本市ほか	5-7 月	AIJ③
51	菊池健児(大分大学)	建物全般	益城町の悉皆調査の概要と集計結果等	益城町	5/3-8	AIJ③
52	竹村恵二(日本第四紀学会)、大橋聖和ら(日本地質学会)、清水洋(日本地震学会)、鈴木康弘(日本活断層学会)		熊本地震に関する各学会の活動状況等			SCJ②
53	岩田知孝(日本地震学会)、青山雅史(日本地理学会)、黒木貴一(日本応用地質学会)		地震に関する情報に関する各学会の活動状況等			SCJ②
54	高橋良和(土木学会)、高山峯夫(日本建築学会)、椋木俊文(地盤工学会)、鈴木尚登(農業農村工学会)、島岡隆行(廃棄物資源学会)		被災状況と対策に関する各学会の活動状況等			SCJ②
55	石川芳治(砂防学会)、中村真也(日本地すべり学会)、寶馨(日本自然災害学会)		土砂災害・風水害と対策に関する各学会の活動状況等			SCJ②
56	佐藤久禎(日本集団災害医学会)、山本あい子ら(日本災害看護学会)、山本あい子(日本看護系学会協議会)、目黒公郎(日本地震工学会)		避難・救助・救援に関する各学会の活動状況等			SCJ②

No	調査実施者・報告者 (敬称略)	区分 (主対象)	調査等の内容	調査対象地域	調査日 (公開日)	情報源 (URL)
57	大矢根淳(日本災害復興学会)、山本佳世子(日本計画行政学会)、池邊このみ(日本造園学会)、松本直司(こども環境学会)、岡田知弘(日本地域経済学会)		復旧・復興に関する各学会の活動状況等			SCJ②

AIJ①：日本建築学会災害委平成28年(2016年)熊本地震サイト

AIJ③：日本建築学会「2016年熊本地震災害調査報告会」(H28.8.24)

SCJ②：日本学術会議・防災学術連携体 熊本地震三ヶ月報告会(H28.7.16)

AIJ②：日本建築学会「2016年熊本地震」地震被害調査速報会

SCJ①：日本学術会議・防災学術連携体 熊本地震・緊急報告会(H28.5.2)

## 2. 地震及び地震動の特徴

### 2.1 地震の概要と特徴

平成 28 年（2016 年）熊本地震の特徴としては、内陸の活断層の活動に因ること、地表に地震断層が出現したこと、誘発された地震を含めた余震の活動域が九州をほぼ横断する長さを持つこと、極めて強い揺れ（震度 7）が観測されたこと、また震源の近くでは強い揺れに何度も襲われた地区があること、が挙げられる。

#### 2.1.1 地震諸元

平成 28 年（2016 年）熊本地震とは、4 月 14 日 21 時 26 分以降に発生した熊本県を中心とする一連の地震活動を指す<sup>2.1-1)</sup>。7 月 12 日 10 時現在、震度 1 以上を観測する地震が 1879 回発生している。震度 5 弱以上の地震は 19 回（震度 7：2 回、震度 6 強：2 回、震度 6 弱：3 回、震度 5 強：4 回、震度 5 弱：8 回）である。震度 6 弱以上を観測した地震の諸元を表 2.1-1 に示す。最大規模は 4 月 16 日 1 時 25 分に発生した地震のマグニチュード（M）7.3 である。

表 2.1-1 震度 6 弱以上を観測した地震の諸元<sup>2.1-1)、2.1-2)</sup>

(7 月 12 日 10 時現在、M は気象庁マグニチュード)

発生時刻	震央	深さ	M	最大震度
4 月 14 日 21 時 26 分	熊本県熊本地方 (32° 44.5' N 130° 48.5' E)	11km	6.5	7
4 月 14 日 22 時 07 分	熊本県熊本地方 (32° 46.5' N 130° 50.9' E)	8km	5.8	6 弱
4 月 15 日 00 時 03 分	熊本県熊本地方 (32° 42.0' N 130° 46.6' E)	7km	6.4	6 強
4 月 16 日 01 時 25 分	熊本県熊本地方 (32° 45.2' N 130° 45.7' E)	12km	7.3	7
4 月 16 日 01 時 45 分	熊本県熊本地方 (32° 51.7' N 130° 53.9' E)	11km	5.9	6 弱
4 月 16 日 03 時 55 分	熊本県阿蘇地方 (33° 01.5' N 131° 11.4' E)	11km	5.8	6 強
4 月 16 日 09 時 48 分	熊本県熊本地方 (32° 50.8' N 130° 50.1' E)	16km	5.4	6 弱

#### 2.1.2 震度分布

4 月 14 日 21 時 26 分に発生した前震および 4 月 16 日 01 時 25 分に発生した本震により最大震度 7 が観測された。加えて最大震度 6 強の地震が 2 回（4 月 15 日 00 時 03 分および 4 月 16 日 09 時 48 分）、6 弱の地震が 3 回観測された（4 月 14 日 22 時 07 分、4 月 16 日 01 時 45 分、および 4 月 16 日 09 時 48 分）<sup>2.1-3)</sup>。前震と本震の震源断層が比較的近かった為、益城町および周辺地区では、何度も強い揺れに襲われた。益城町宮園にある自治体震度計では、前震および本震で震度 7 が観測された。

図 2.1-1 に前震と本震の震度分布図を示す<sup>2.1-4)</sup>。前震に際しては、益城町宮園でのみ震度 7 が記録されており、震度 6 強は無く、震度 6 弱が熊本市、玉名市、宇城市、西原村で観測された。本震に際しては、震度 7 が益城町宮園、西原村で観測された。震度 6 強が南阿蘇村、菊池市、宇土市、大津町、嘉島町、宇城市、合志市、熊本市、震度 6 弱は南阿蘇村、阿蘇市、八代市、玉名市、菊池市、大津町、菊陽町、御船町、熊本市、宇城市、山都町、氷川町、合志市、和水町、上天草市で観測された。

益城町・西原村・南阿蘇村河陽地区は震源断層のほぼ直上に位置することもあり、地表での地震動の振幅が非常に大きく、震度 6 強～7 が観測された。一方、震源断層から少し離れた熊本市、宇城市および周辺地域では、平野部の地盤で地震波が大きく増幅されることにより、地表での地震動の振幅が大きくなり、震度 6 強が観測された。

- 5 なお、本震は九州に限らず西日本全域で広範に観測され、特に平野部では近隣の山間部より顕著に大きな震度が観測された。また、大阪平野と濃尾平野で震度 3 が、さらに遠方の関東平野でも震度 2 が観測された。

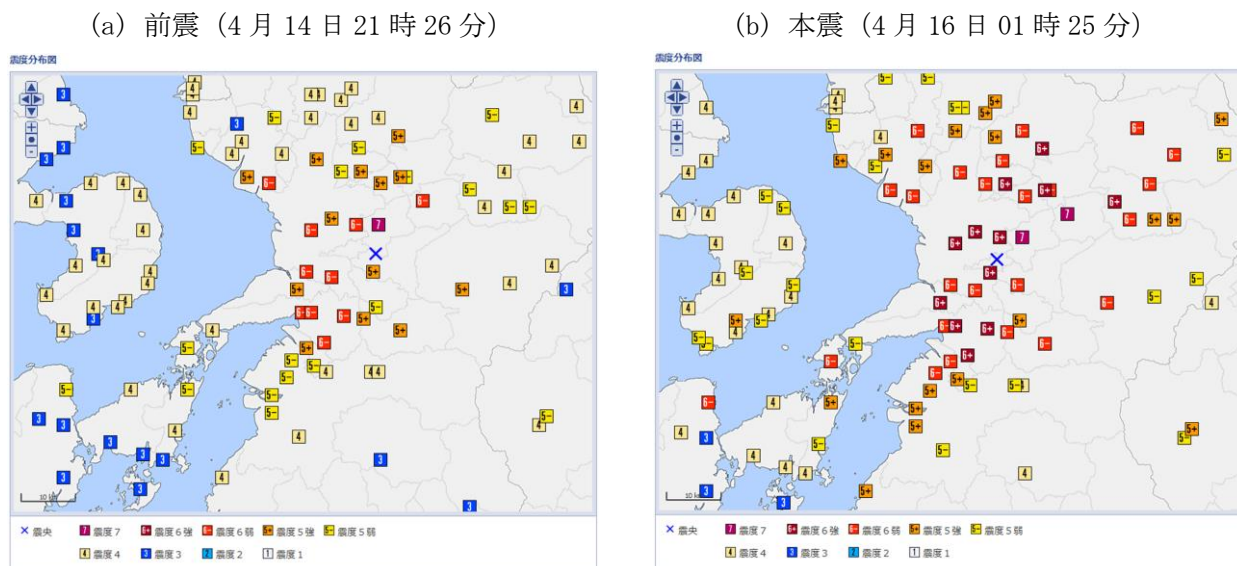


図2.1-1 平成28年熊本地震の震度分布：(a)前震（4月14日21時26分）、(b)本震（4月16日01時25分）  
（気象庁 震度情報データベース<sup>2.1-4</sup> より）

10

## 参考文献（2.1節）

- 2.1-1) 気象庁 報道発表資料「平成28年（2016年）熊本地震」について（第41報）、平成28年7月、平成28年8月閲覧  
<http://www.jma.go.jp/jma/press/1607/12a/kaisetsu201607121030.pdf>
- 15 2.1-2) 平成28年4月 地震・火山月報（防災編）、平成28年8月閲覧  
<http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/gaikyo/monthly/201604/201604monthly.pdf>
- 2.1-3) 気象庁 報道発表資料「平成28年（2016年）熊本地震」について（第33報）、平成28年4月、平成28年8月閲覧  
<http://www.jma.go.jp/jma/press/1604/27a/kaisetsu201604271530.pdf>
- 20 2.1-4) 気象庁 震度情報データベース、平成28年7月閲覧  
<http://www.data.jma.go.jp/svd/eqdb/data/shindo/index.php>

## 2.2 前震および本震の地震動特性

平成28年（2016年）熊本地震では、気象庁の震度計、防災科学技術研究所のK-NETやKiK-netの強震計、及び熊本県等の震度情報ネットワークの震度計で多くの強震観測記録が得られ公開されている。表2.2-1に、K-NET、KiK-net<sup>2.2-1</sup>、気象庁、熊本県及び大分県の震度計で観測された本震の強震記録<sup>2.2-2</sup>のうち、地表で震度5強（計測震度5.0）以上が観測された地点を示す。また、これらの観測地点位置を図2.2-1及び図2.2-2<sup>2.2-3</sup>に示す。図2.2-1から、震源近傍を中心にPGA（最大加速度）が500cm/s<sup>2</sup>

を上回る記録が得られたことが分かる。

図 2.2-3 および図 2.2-4 に、木造建築物の被害が甚大であった益城町（益城町宮園[益城町役場]、KiK-net 益城）と、本震で震度 7 が観測された西原村（西原村小森[西原村役場]）における前震および本震の観測記録（加速度波形、擬似速度応答スペクトル[5%]）を示す。加速度波形を見ると、前震、本震ともに主要動の継続時間は 10 秒程度となっており、1995 年兵庫県南部地震や 2004 年新潟県中越地震などの過去の内陸地殻内地震と同様に比較的短い。擬似速度応答スペクトルを見ると、益城町宮園および KiK-net 益城では周期 1 秒付近で大きな値となっている。また、西原村小森の記録は本震時に周期 0.7 秒と 3 秒付近の成分が卓越していることがわかる。また、周期 0.5 秒以下では、前震と本震でおおむね同等のレベルとなっている。

図 2.2-5 に過去地震の記録との擬似速度応答スペクトルの比較を示す。益城町宮園で観測された本震の記録は、周期 0.6 秒～1.8 秒付近において 1995 年兵庫県南部地震で観測された JR 鷹取の記録を超えていることがわかる。ただし、益城町役場の観測記録は庁舎 1 階で得られたものであるため、地盤と建物の動的相互作用の影響が含まれている可能性がある。すなわち、当該地点の観測記録には入力損失効果や上部構造の応答の影響も含まれていること等が考えられるため、周辺の地震動（地表）とは異なっている可能性があることに留意されたい。

秦らは 2016 年 4 月 14 日の前震の発生後に益城町において臨時観測を行っており、被害集中域を含む 3 地点で本震の観測記録を得ている<sup>2.2-4)</sup>。図 2.2-6 に観測点位置図を、図 2.2-7 に公開されている観測記録を示す。波形および応答スペクトルより、全 3 地点において EW 方向の周期 0.9 秒付近の成分が卓越していることがわかる。数 100m の観測点位置の違いにもかかわらず、加速度波形および擬似速度応答スペクトルの振幅には違いが見られ、TMP3 サイトが他の 2 地点に比べて大きい。なお、これら 3 地点での計測震度はそれぞれ 6.6 (TMP1)、6.7 (TMP2)、6.9 (TMP3) である。図 2.2-8 に、図 2.2-5 と同様に過去地震の記録との擬似速度応答スペクトルの比較を示す。周期 0.5 秒～1.2 秒付近において 1995 年兵庫県南部地震で観測された JR 鷹取の記録および 2004 年新潟県中越地震で観測された川口町の記録を超えていることがわかる。前述のとおり、数 100m の観測点位置の違いにもかかわらず、TMP1～3 の振幅の大小には差があり、特に TMP3 サイトの EW 方向では周期 0.9 秒付近に非常に大きなピーク（約 850cm/s）が見られ、当該地域の木造建築物の被害分布に影響を及ぼした可能性が示唆される。

図 2.2-9～10 に、被害を受けた宇土市の鉄筋コンクリート造や熊本市内の免震建築物の建設地点に近い本震記録として、K-NET 宇土（宇土市浦田町）と K-NET 熊本（熊本市東区佐土原 3）の観測記録（加速度波形<sup>2.2-1)</sup>、擬似速度応答スペクトル[5%]）を示す。擬似速度応答スペクトルには、平 12 建告第 1461 号で規定される工学的基盤における加速度スペクトルに平 12 建告第 1457 号で定まる第 2 種地盤による加速度の増幅率を乗じて得られる第 2 種地盤地表におけるスペクトル（以下、「第 2 種告示スペクトル」という。）も併せて示す。なお、地震地域係数 Z（熊本市等 0.9、宇土市等 0.8）を乗じた数値も示した。表 2.2-1 に示す最大加速度、最大速度や図 2.2-9～10 に示す擬似速度応答スペクトルを見ると、震度 7 が観測された益城町役場や西原村役場の記録や JR 鷹取の記録よりは小さいものの、周期帯によっては第 2 種告示スペクトルの値を上回っていることがわかる。

## 参考文献（2.2 節）

- 2.2-1) 国立研究開発法人防災科学技術研究所 強震観測網(K-NET, KiK-net)、平成 28 年 8 月閲覧 (<http://www.kyoshin.bosai.go.jp/>)
- 2.2-2) 気象庁 強震波形（熊本県熊本地方の地震）、平成 28 年 8 月閲覧 ([http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/kyoshin/jishin/1604160125\\_kumamoto/index.h](http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/kyoshin/jishin/1604160125_kumamoto/index.h))

tml)

- 2.2-3) 国土交通省国土地理院ウェブ地図、平成 28 年 8 月閲覧(<http://maps.gsi.go.jp/>)
- 2.2-4) Hata. Y., H. Goto, and M. Yoshimi, Preliminary Analysis of Strong Ground Motions in the Heavily Damaged Zone in Mashiki Town, Kumamoto, Japan, during the Mainshock of the 2016 Kumamoto Earthquake ( $M_w$  7.0) Observed by a Dense Seismic Array, Seismo. Res. Lett., Vol. 87, No. 5, 2016
- 5
- 2.2-5) 山田真澄、大邑潤三、後藤浩之、2016 年熊本地震における前震と本震の益城町の建物被害、日本地球惑星科学連合 2016 年大会、MIS34-P82、2016

表 2.2-1 本震時に地表で震度 5 強（計測震度 5.0）以上が観測された強震記録一覧

記号	観測地点	距離 (km)	計測 震度	最大加速度 (cm/s <sup>2</sup> )			最大速度 (cm/s)		
				NS	EW	UD	NS	EW	UD
93050	嘉島町上島	1.9	6.2	565	597	474	88.8	61.2	14.7
KMM006	K-NET 熊本	4.7	6.0	828	617	534	66.4	90.7	32.6
93021	熊本南区域城南町	6.0	5.9	681	522	803	55.8	59.3	15.3
93049	御船町御船	6.1	5.7	466	441	354	44.9	43.7	16.5
93012	熊本中央区大江	6.3	6.0	627	478	403	57.8	56.2	22.4
93051	益城町宮園	6.6	6.7	776	825	669	94.1	177.0	51.5
KMMH16	KiK-net 益城	7.3	6.4	652	1156	873	85.5	129.1	48.8
47819	熊本西区春日	7.9	6.0	606	552	405	71.0	41.4	15.5
93022	熊本南区富合町	8.8	5.9	427	412	591	97.8	61.3	16.8
KMM008	K-NET 宇土	12.1	6.2	651	771	422	65.5	83.8	13.2
93052	甲佐町豊内	12.7	5.2	475	551	434	30.1	22.2	11.9
93025	宇城市豊野町	13.1	6.1	573	575	725	85.3	52.7	28.1
KMMH14	KiK-net 豊野	13.2	5.7	457	402	539	60.6	42.1	24.4
93026	熊本美里町馬場	13.3	5.9	402	527	355	51.7	48.6	13.6
93044	菊陽町久保田	13.4	5.8	824	498	566	54.9	69.2	40.8
42511	宇城市松橋町	13.8	6.0	493	343	314	76.7	51.1	16.5
93045	合志市竹迫	14.6	6.2	399	691	307	74.1	87.1	31.6
93047	合志市御代志	14.8	5.6	401	572	468	39.9	52.9	22.1
93020	宇城市不知火町	14.9	5.9	539	442	517	66.4	37.8	12.6
93048	西原村小森	16.0	6.6	742	770	531	113.7	239.0	128.7
93096	大津町大津	17.0	6.1	1380	1740	595	77.9	70.6	52.6
KMM005	K-NET 大津	17.4	5.7	525	482	397	55.5	55.4	51.2
93040	熊本北区植木町	17.5	5.8	672	878	530	38.3	41.9	14.0
KMM011	K-NET 砥用	18.0	5.6	598	603	255	28.8	29.0	8.5
93046	菊池市泗水町	18.5	5.7	485	339	182	50.8	42.2	19.1
93024	宇城市小川町	19.0	6.0	390	369	233	77.8	46.7	12.8
93030	玉名市天水町	19.7	5.8	308	202	137	62.0	41.9	10.6
93057	氷川町島地	21.0	5.7	301	313	206	49.4	43.6	9.2
93031	玉東町木葉	21.8	5.4	236	237	177	27.0	19.2	6.5
KMM009	K-NET 矢部	22.3	5.7	777	640	187	32.3	26.7	12.4
93042	菊池市旭志	22.9	6.4	799	857	536	127.2	84.9	35.6
93029	玉名市横島町	23.3	5.6	231	197	104	52.5	27.7	5.8
93058	氷川町宮原	23.5	5.2	205	152	232	20.3	19.1	17.1
93041	菊池市七城町	23.7	5.2	197	204	129	38.1	43.1	10.9
93056	八代市鏡町	23.9	5.5	354	285	354	47.6	30.0	9.1
93039	山鹿市鹿央町	25.2	5.1	220	178	234	26.4	19.1	10.3
93011	南阿蘇村河陽	25.3	6.2	1112	955	654	130.1	119.2	56.7
93017	菊池市隈府	25.3	5.7	415	294	302	56.0	37.4	18.4
93010	南阿蘇村河陰	26.5	5.7	920	558	361	60.9	54.6	39.5
93038	山鹿市鹿本町	27.2	5.1	204	194	211	22.9	24.2	9.4
KMMH03	KiK-net 菊池	28.0	6.1	787	227	403	80.4	20.9	15.3
KMM003	K-NET 玉名	28.3	5.0	177	217	69	18.8	17.4	4.0
93032	和水町江田	28.5	5.7	264	509	136	22.2	37.0	6.7
KMM012	K-NET 八代	31.1	5.2	198	165	130	27.0	20.6	8.2
93009	南阿蘇村吉田	31.1	5.4	418	412	186	69.7	43.6	28.1
KMMH09	KiK-net 泉	32.2	5.0	241	200	109	12.8	13.5	6.7
47821	南阿蘇村中松	32.4	5.9	794	607	653	53.8	65.7	44.5

表 2.2-1 本震時に地表で震度 5 強（計測震度 5.0）以上が観測された強震記録一覧（続き）

記号	観測地点	距離 (km)	計測 震度	最大加速度 (cm/s <sup>2</sup> )			最大速度 (cm/s)		
				NS	EW	UD	NS	EW	UD
41509	八代市平山新町	34.1	5.1	172	176	83	20.7	25.5	7.5
93035	長洲町長洲	34.5	5.1	163	110	54	21.7	17.7	5.0
KMM007	K-NET 高森	34.7	5.3	279	420	302	33.0	42.4	22.4
93002	阿蘇市内牧	35.7	5.8	512	165	318	94.3	50.6	23.9
42514	上天草市大矢野町	36.1	5.5	262	334	122	24.0	24.2	8.5
KMM004	K-NET 一の宮	39.0	5.5	261	347	269	72.9	79.7	21.3
93083	上天草市松島町	40.5	5.1	199	214	125	13.3	17.6	4.5
93003	南小国町赤馬場	47.8	5.4	286	313	122	39.0	48.6	14.7
KMM013	K-NET 田浦	49.2	5.0	155	138	73	19.2	13.4	6.9
95019	椎葉村下福良	49.3	5.0	256	217	101	13.5	11.7	5.4
KMMH02	KiK-net 小国	49.7	5.5	303	660	286	35.8	37.5	14.5
KMM001	K-NET 小国	49.9	5.1	164	220	92	35.3	31.8	14.0
93005	産山村山鹿	50.3	5.4	241	362	91	32.1	30.6	10.7
94054	日田市前津江町	52.5	5.0	170	230	117	13.6	19.4	8.8
94049	竹田市荻町	53.9	5.0	195	180	89	27.0	28.5	14.6
42512	芦北町芦北	56.4	5.0	139	125	41	19.3	18.0	2.9
93091	天草市五和町	60.1	5.5	282	219	62	27.4	23.4	3.9
41505	久留米市津福本町	66.1	5.0	126	167	66	12.4	20.6	5.0
91026	神崎市千代田	67.8	5.4	183	154	62	30.9	27.8	7.6
94051	竹田市直入町	68.4	5.1	157	149	111	25.7	22.6	11.9
91035	上峰町坊所	69.9	5.3	167	202	47	18.6	28.7	3.6
95014	宮崎美郷町田代	71.5	5.0	227	284	49	12.9	13.0	4.6
91022	佐賀市久保田	71.8	5.0	108	111	32	19.2	18.9	3.7
KMMH11	KiK-net 九重	72.4	5.5	560	519	272	22.2	19.5	7.5
91046	白石町有明	73.6	5.0	113	88	33	25.4	22.1	5.0
94040	豊後大野市清川町	74.2	5.0	200	142	101	20.3	13.2	11.3
OIT009	K-NET 湯布院	78.0	6.0	528	719	475	52.4	81.1	11.4
94048	由布市湯布院町川上	79.3	5.8	479	369	466	58.6	37.7	20.2
41510	別府市鶴見	90.4	5.5	831	806	861	42.3	17.1	12.0



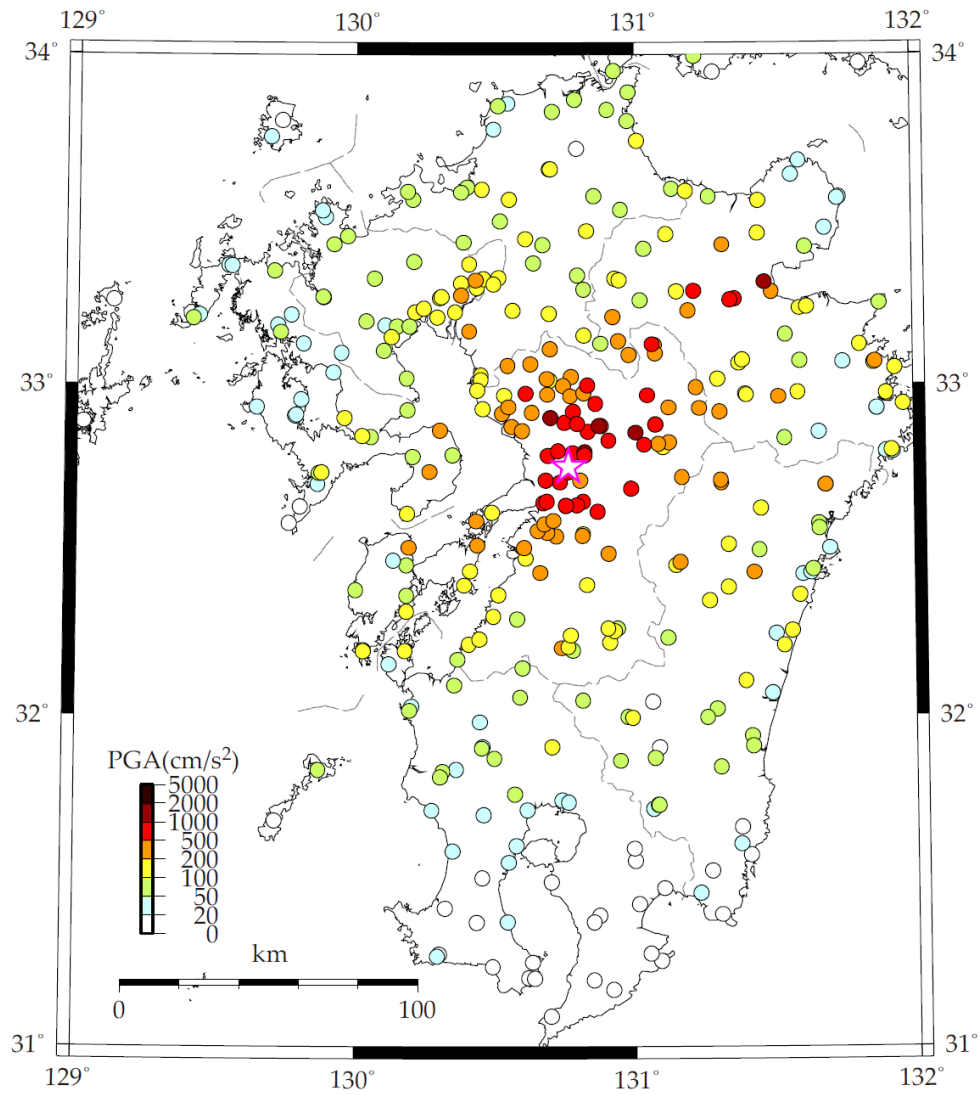
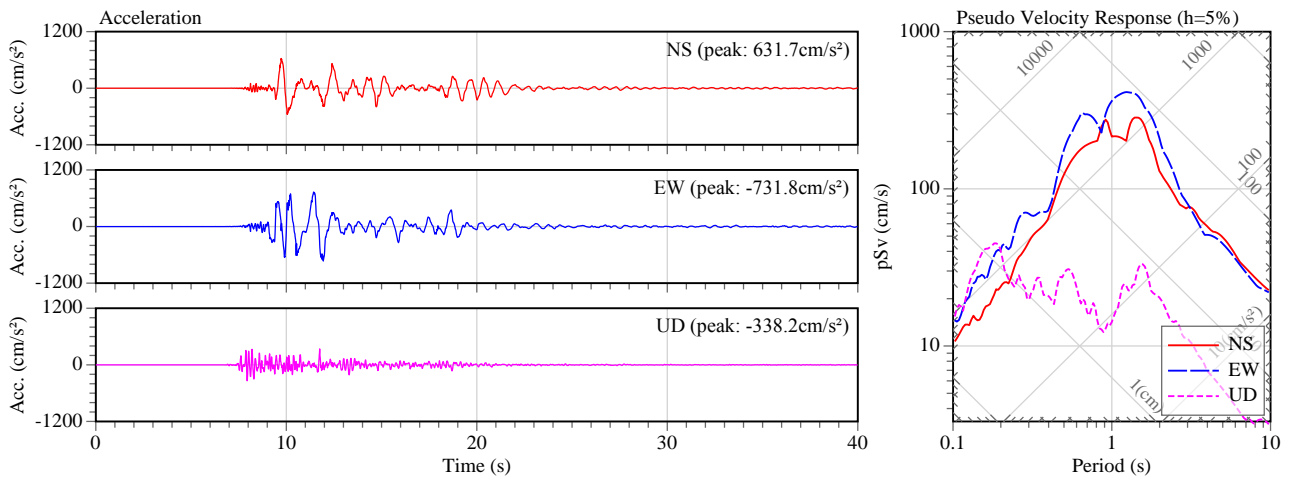


図 2.2-1 強震観測地点の最大加速度分布

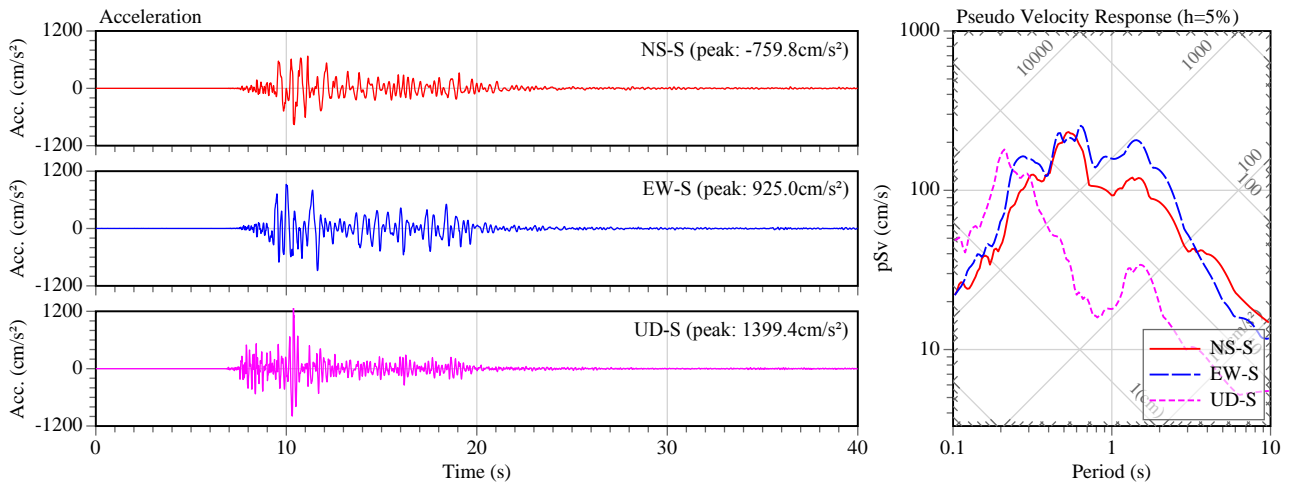


図 2.2-2 震源近傍の強震観測地点 (国土地理院ウェブ地図 2.2-3) を利用)



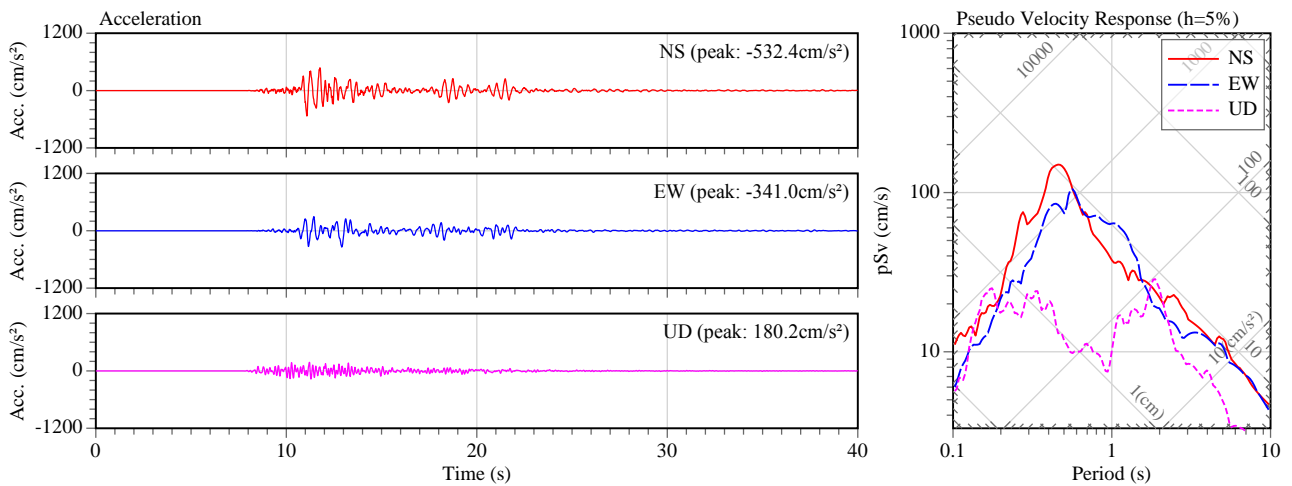
2016/04/14 21:26:30 at 93051: 益城町宮園, Intensity: 6.6

i) 益城町宮園 (益城町役場(93051)、地震計位置: 庁舎1階)



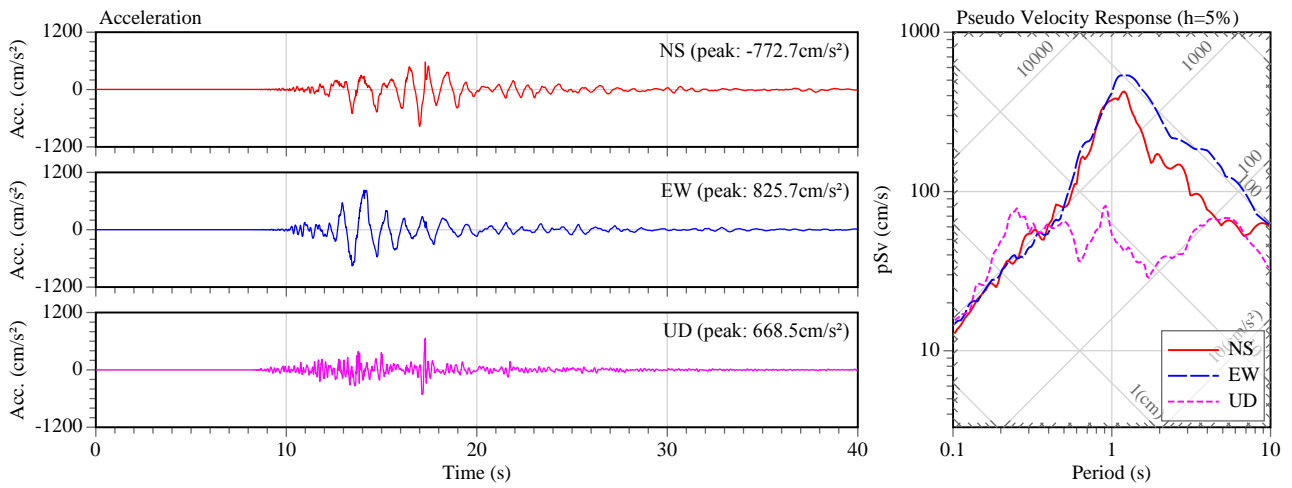
2016/04/14 21:26:30 at KMMH16: KiK-net station, Intensity: 6.4

5 ii) KiK-net 益城 (KMMH16、地震計位置: 地表)

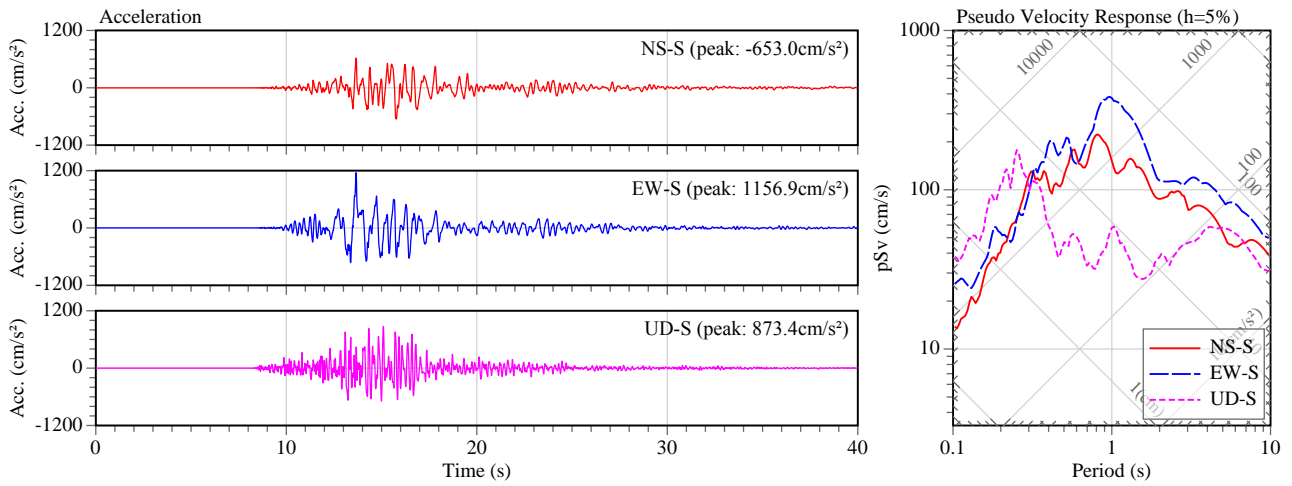


2016/04/14 21:26:30 at 93048: 西原村小森, Intensity: 5.7

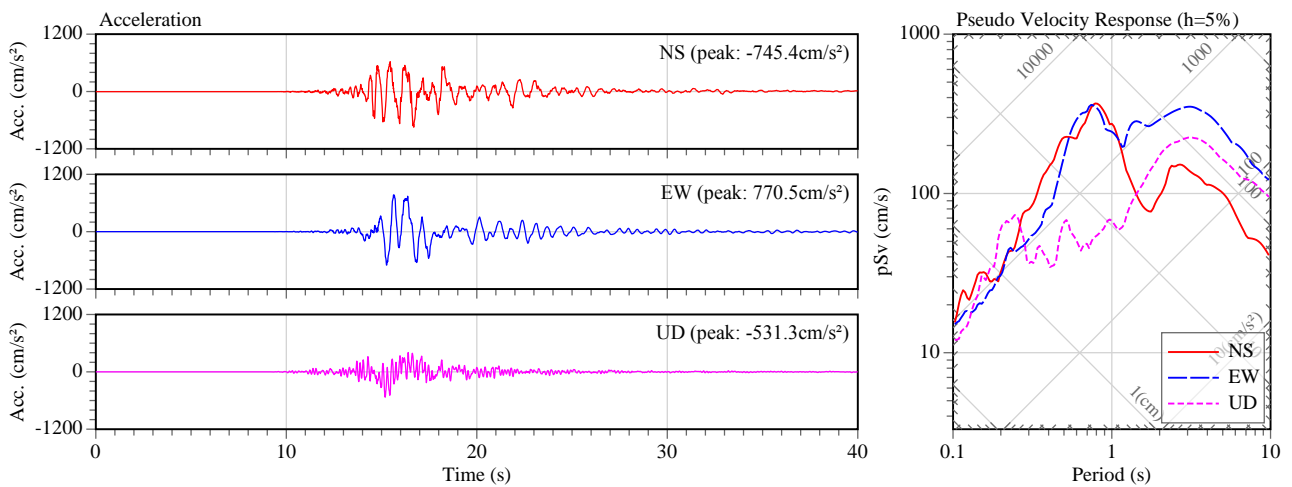
iii) 西原村小森 (西原村役場(93048)、地震計位置: 地表)



i) 益城町宮園 (益城町役場(93051)、地震計位置: 庁舎1階)



5 ii) KiK-net 益城 (KMMH16、地震計位置: 地表)



iii) 西原村小森 (西原村役場(93048)、地震計位置: 地表)

10 図 2.2-4 熊本地震の本震 (4月16日) の観測記録例

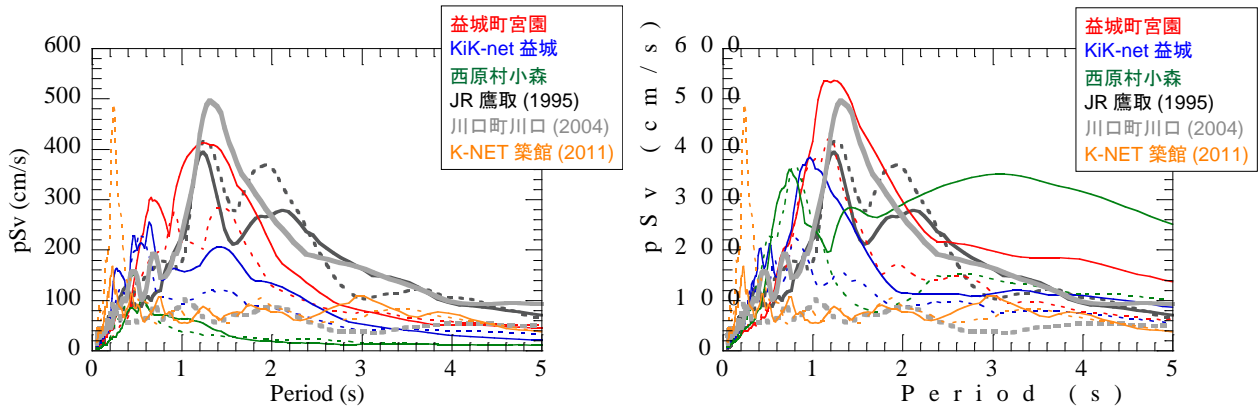


図 2.2-5 擬似速度応答スペクトルの比較  
(左：前震、右：本震、破線はNS方向、実線はEW方向を表す)

5

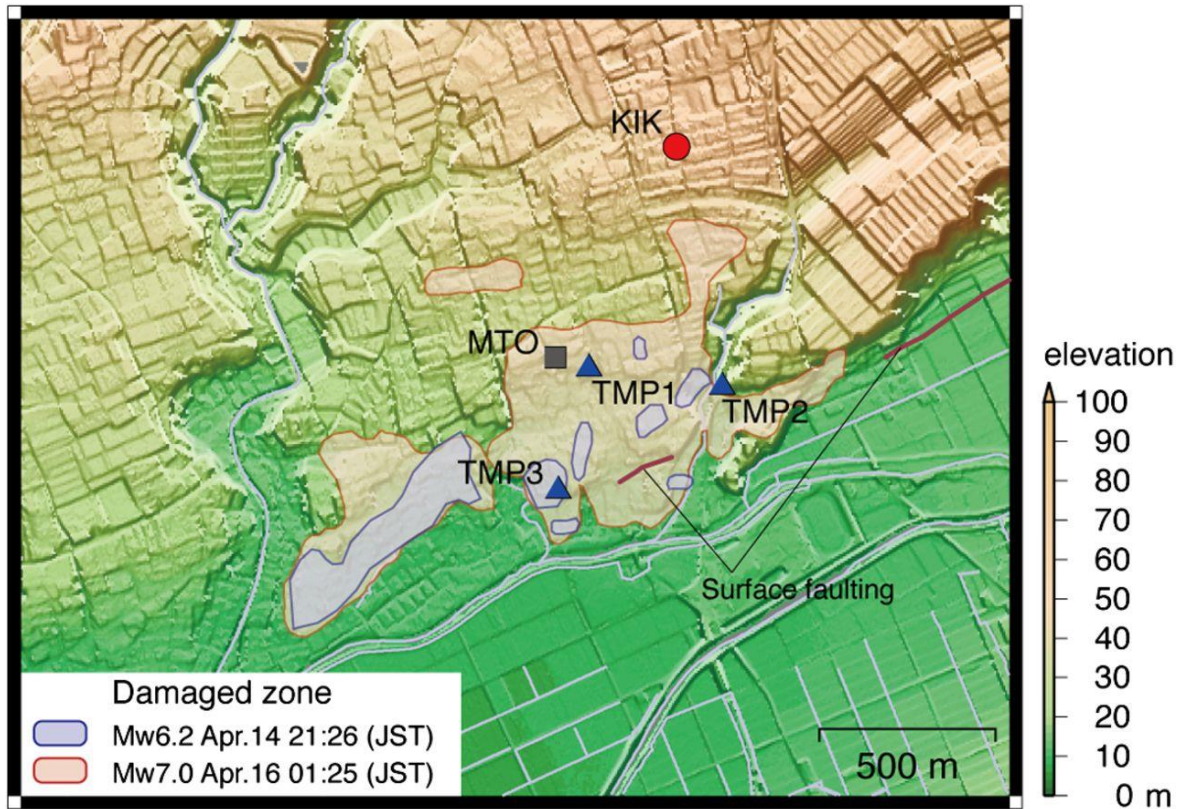
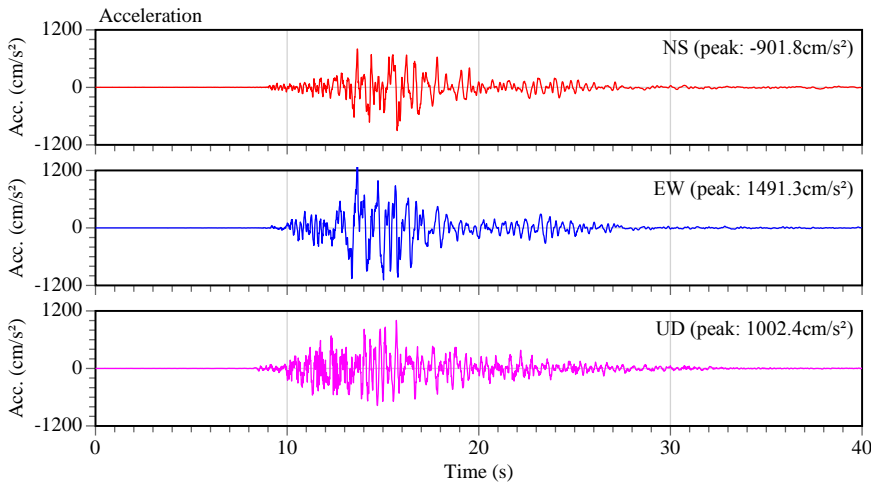


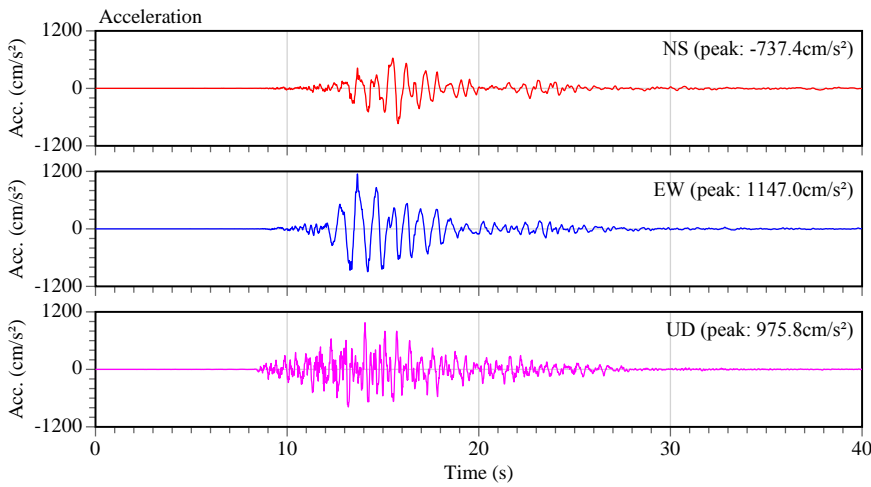
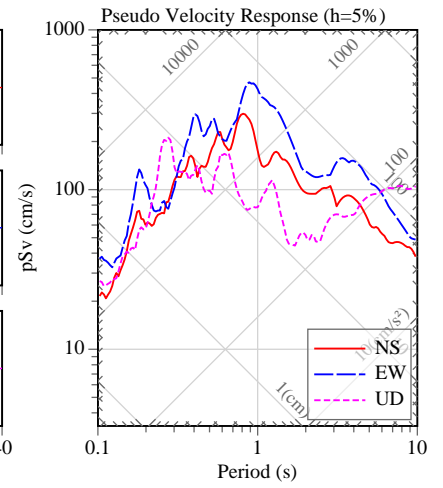
図 2.2-6 秦ほかによる益城町における本震の観測点位置図<sup>2.2-4)</sup>  
(図中の KIK は KiK-net 益城、MTO は益城町役場を表す。Damaged Zone は山田ほか<sup>2.2-5)</sup>による。)

10



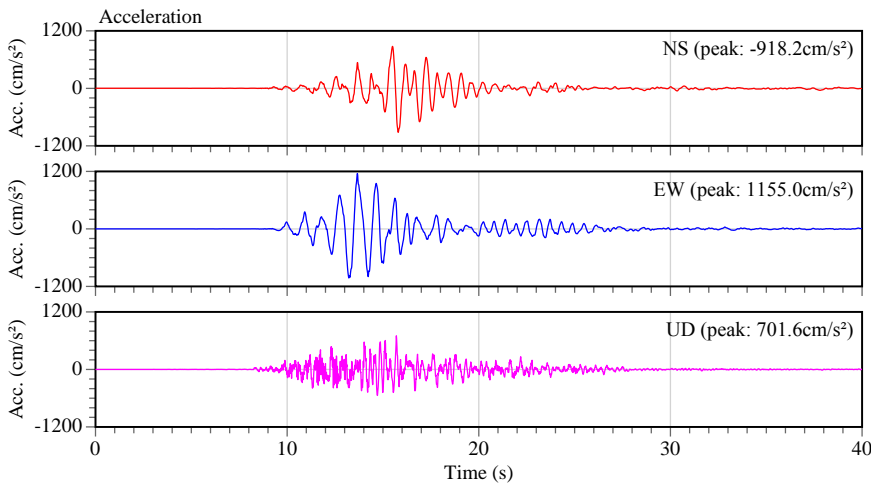
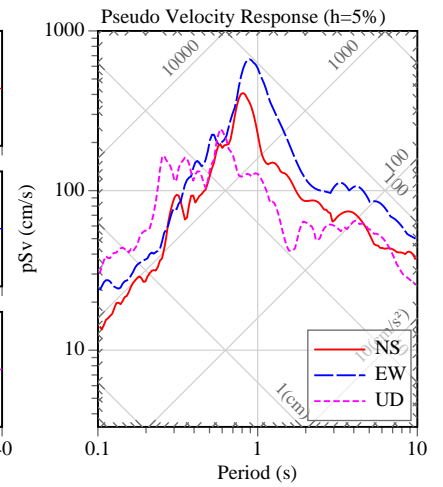
2016/04/16 01:25:00 at TMP1: , Intensity: 6.6

i) TMP1 サイト



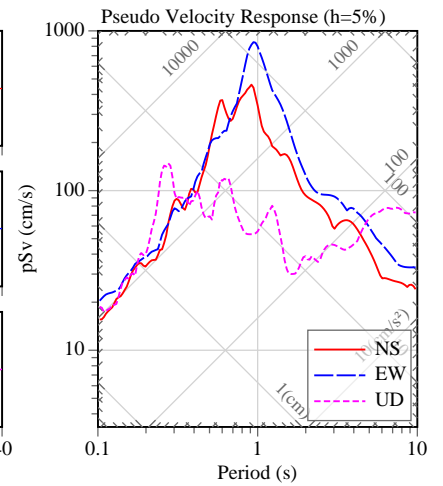
2016/04/16 01:25:00 at TMP2: , Intensity: 6.7

ii) TMP2 サイト



2016/04/16 01:25:00 at TMP3: , Intensity: 6.9

iii) TMP3 サイト



5

図 2.2-7 秦ほかによる益城町の3地点における本震(4月16日)の観測記録 2.2-4)

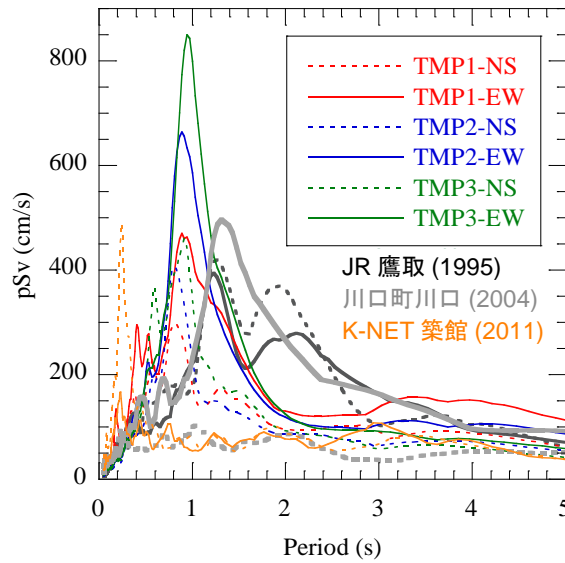
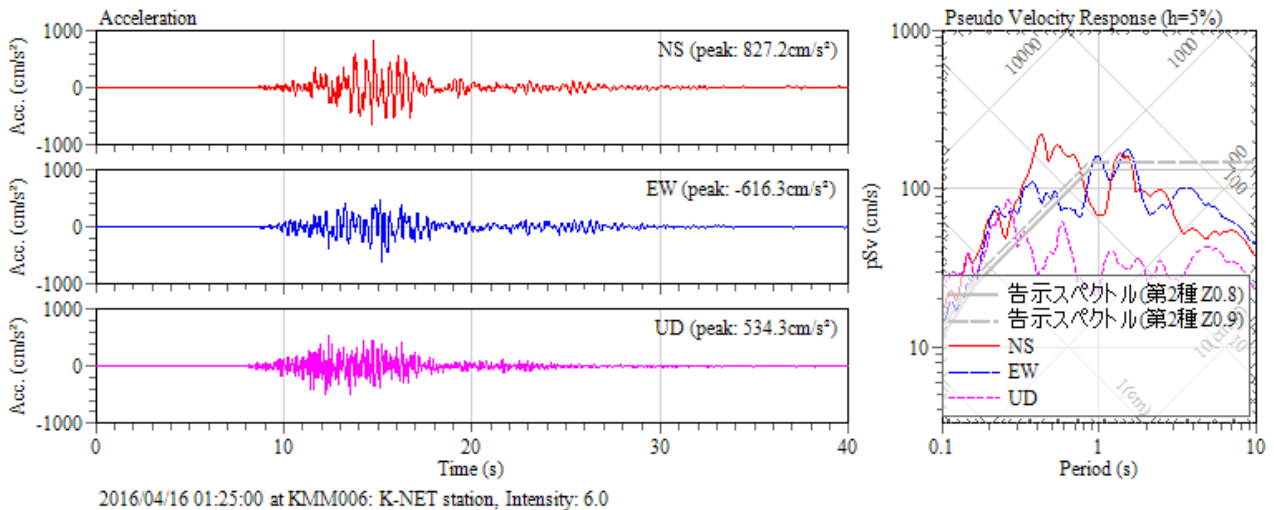


図 2.2-8 秦ほかによる本震の観測記録<sup>2, 2-1)</sup>と過去地震の擬似速度応答スペクトルの比較  
(破線は NS 方向、実線は EW 方向を表す)



5 図 2.2-9 K-NET 熊本 (熊本市東区佐土原 3) における熊本地震の本震 (4 月 16 日) の観測記録

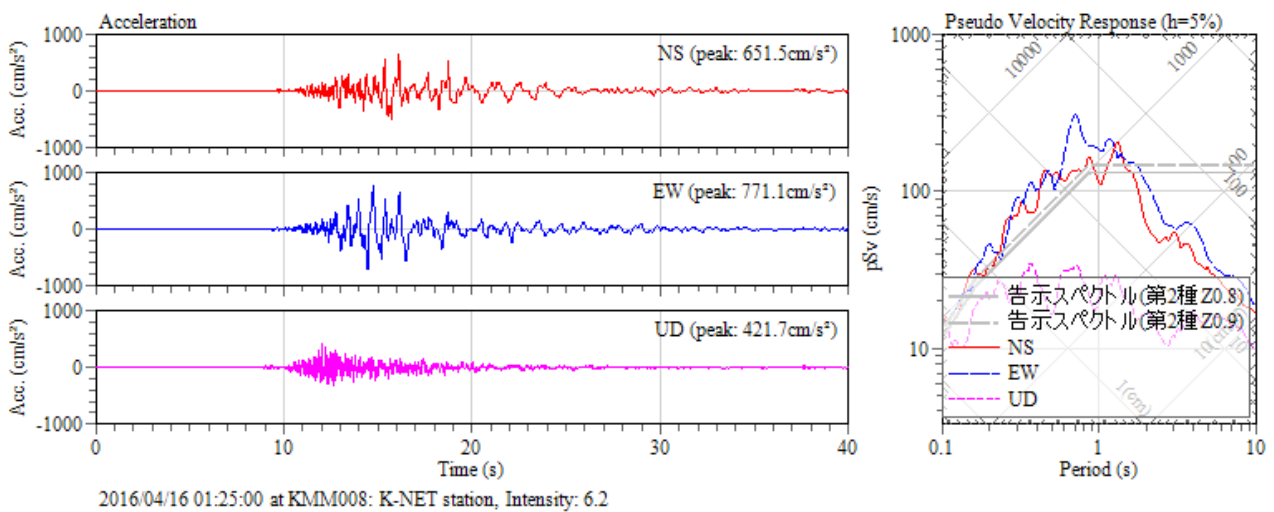


図 2.2-10 K-NET 宇土 (宇土市浦田町) における熊本地震の本震 (4 月 16 日) の観測記録

### 2.3 被害集中域の地盤

図 2.3-1 は、益城町の 1901 年、1926 年、1965 年、1999 年国土地理院地形図である。被害集中域は、古く（100 年以上前）より住家がある市街地と概ね対応する一方で、被害の小さかった秋津川沿いの地域は水田として利用されていたことがわかる。被害集中域は、文献により名称は異なるが、図 2.3-3 では託麻段丘の形成年代に相当する凡例 170<sup>2.3-2</sup>、国土調査昭和 57 年 7 月 10 日指定土地分類基本調査図表層地質図（御船）<sup>2.3-3</sup>では保田窪段丘の形成年代に相当する「段丘堆積物-3」、同地形分類図（御船）<sup>2.3-4</sup>では「段丘面 4」、の区域にはほぼ一致している。



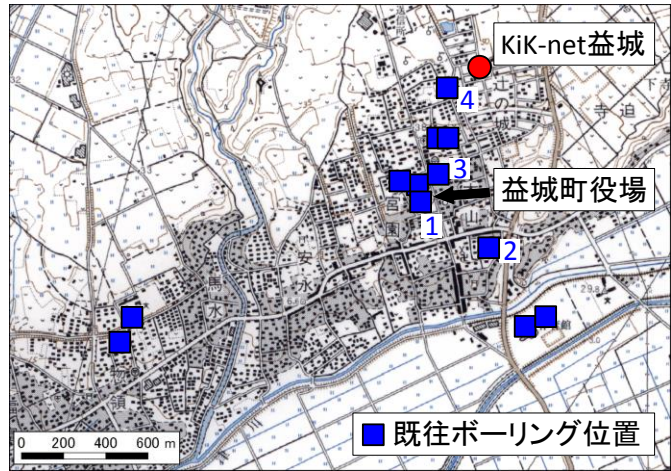
1901 年地形図



1926 年地形図



1965 年地形図

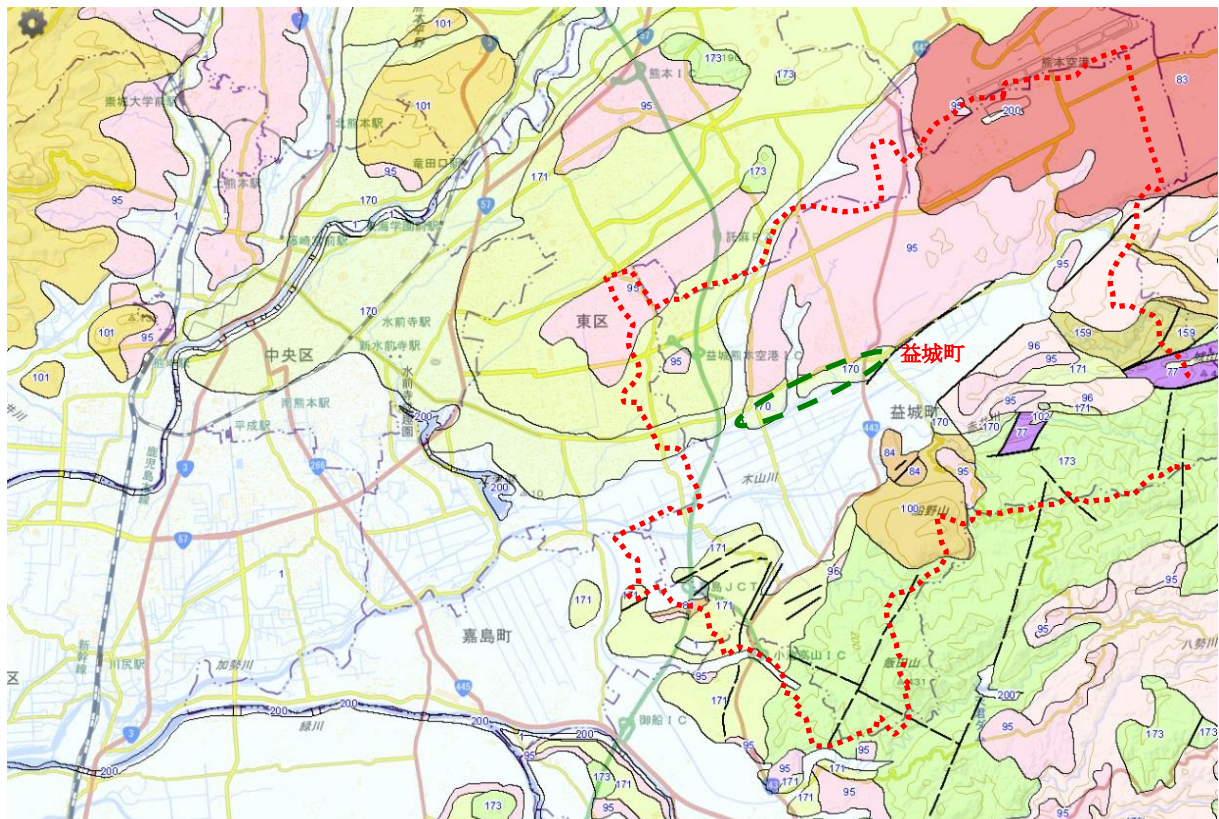


1999 年地形図

図 2.3-1 国土地理院の地形図<sup>2.3-1</sup>に基づく益城町の変遷  
(国土地理院発行の 2.5 万分の 1 地形図を使用)

10

15



- 凡例 1：約1万8000年前～現在までに形成された最も新しい時代の地層  
 83：約15万年前～現在に噴火した火山の岩石(デイサイト・流紋岩類)  
 95：約15万年前～現在に爆発的噴火により高速で流れ下った軽石や火山灰(火砕流)  
 170：川沿いの低地に分布している約7万年前～1万8000年前に形成された段丘層  
 171：川沿いのやや高い所に分布している約15万年前～7万年前に形成された段丘層  
 173：約1億年前～6500万年前に川や湖で形成された地層
- 益城町  
被害集中域

図 2.3-2 熊本市、益城町、西原村の表層地質 (文献 2.3-2 に加筆)

図 2.3-1 の 1999 年地形図には、益城町役場所有のボーリング調査地点を重ねて示している。図より、被害集中域や秋津川沿いにはボーリングデータがないことがわかる。また、地盤調査の内容としては、土質柱状図、標準貫入試験 ( $N$ 値) のほか、室内試験 (土質の物理試験) が 2~3 件含まれていたが、地盤の震動特性の検討に必要な PS 検層および土質の動的試験 (動的変形試験や液状化試験) は含まれていなかった。図 2.3-3~図 2.3-6 に示す標準貫入試験結果 ( $N$ 値) に基づいた推定断面をみると、被害集中域の地盤は深さ 30m 程度で  $N$ 値 30 程度であることが多く、工学的基盤と考えられる  $N$ 値 50 以上の値の層の深さが判明していない。地震動評価のためには、上述の PS 検層および動的試験に加えて、 $N$ 値 50 以上が現れる深さまでの地盤調査を実施する必要がある。

10

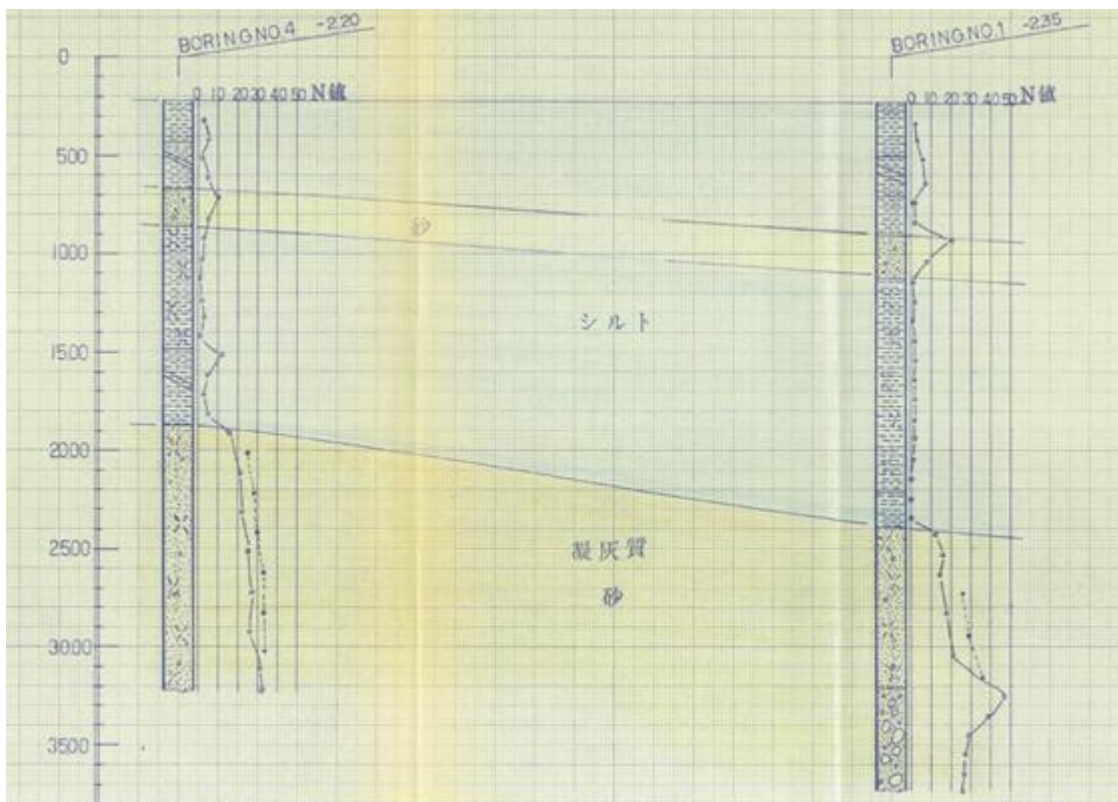
### 参考文献 (2.3 節)

- 2.3-1) 国土交通省国土地理院、地図・空中写真閲覧サービス、2.5万地形図健軍、平成28年8月閲覧 (<http://mapps.gsi.go.jp/history.html#11=32.7950278,130.8101667&z=9&target=t25000&figureNameId=126-4-3>)
- 15 2.3-2) 国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター (編) (2015) 20万分の1日本シームレス地質図 2015年5月29日版. 産業技術総合研究所地質調査総合センター、平成28年8月閲覧 (<https://gbank.gsj.jp/seamless/cesium/index.html#>)
- 2.3-3) 国土交通省国土政策局、5万分の1都道府県土地分類基本調査(御船)表層地質図、平成28年



8月閲覧 (<http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/data/G/4306G.jpg>)

2.3-4) 国土交通省国土政策局、5万分の1都道府県土地分類基本調査(御船)地形分類図、平成28年8月閲覧 (<http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/data/L/4306L.jpg>)



5

図 2.3-3 地盤調査報告書 No.1 (益城町役場) の推定断面図

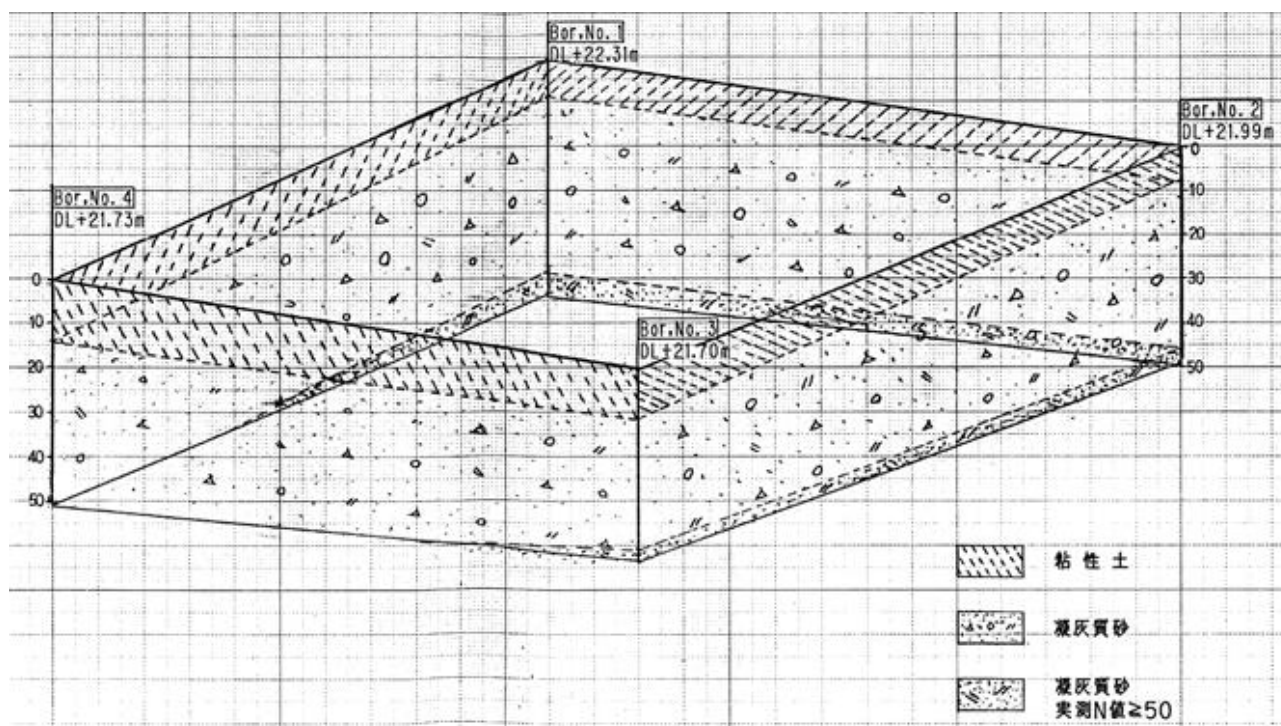


図 2.3-4 地盤調査報告書 No.2 の推定断面図

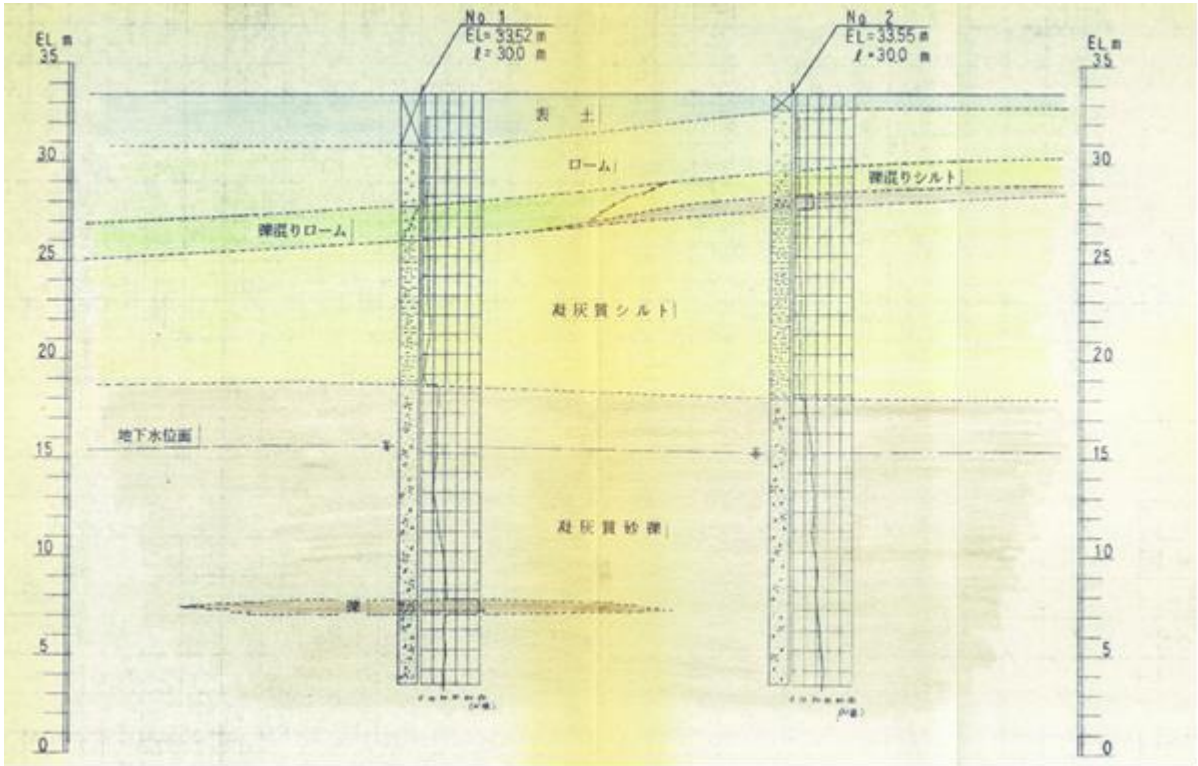


図 2.3-5 地盤調査報告書 No. 3 の推定断面図

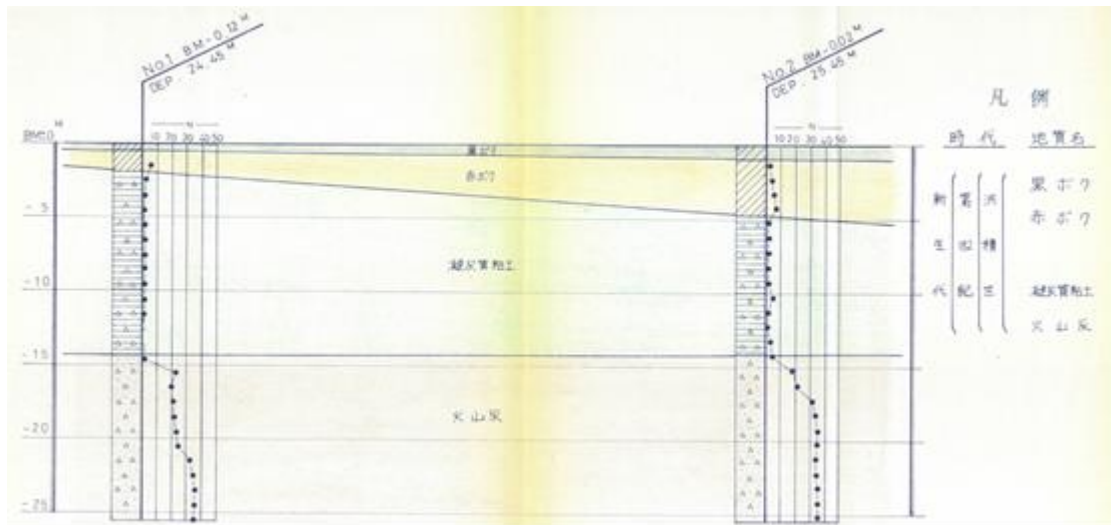


図 2.3-6 地盤調査報告書 No. 4 の推定断面図

## 2.4 まとめ

地震及び地震動の特徴を、以下にまとめる。

平成 28 年（2016 年）熊本地震の特徴は、内陸の活断層の活動に因ること、震源の近くでは強い揺れに何度も襲われた地区があること（最大震度 7 が複数回あるいは複数地点で観測された）、地表に地震断層が出現したこと、誘発された地震を含めた余震の活動域が九州をほぼ横断する長さを持つこと、が挙げられる。

気象庁の震度計、防災科学技術研究所の K-NET や KiK-net の強震計、及び熊本県等の震度情報ネットワークの震度計で多くの強震観測記録が得られ公開されている。震度 7 が観測された益城町および西原村で得られた地震動は、擬似速度応答スペクトル（減衰定数 5%）において過去地震（JR 鷹取（1995）、川口町川口（2004））と比較した場合、周期 1～2 秒の範囲で、前震については過去地震と同程度かそれ以下であったが、本震については過去地震を超える記録が観測されている。また、鉄筋コンクリート造建築物や免震建築物の被害が確認された地点に近い宇土市浦田町および熊本市東区の本震記録も、周期帯によっては第 2 種告示スペクトルを上回っていた。

秦らにより観測された益城町における本震の記録では、全 3 地点において EW 方向の周期 0.9 秒付近の成分が卓越し、擬似速度応答スペクトルを過去地震（JR 鷹取（1995）、川口町川口（2004））と比較した場合、周期 0.5～1 秒程度の範囲で過去地震を上回っていた。数 100m の観測点位置の違いにもかかわらず、3 地点での擬似速度応答スペクトルの振幅には違いが見られ、被害集中域である TMP3 サイトが他の 2 地点に比べて大きいことから、地震動の差違が当該地域の木造建築物の被害分布に影響を及ぼした可能性が示唆される。

益城町の木造建築物の被害集中域は、古くより住家がある市街地とおおむね対応し、文献により名称は異なるが段丘にほぼ一致していた。また当該地域では複数のボーリング調査が実施されているが、地震動評価のためには必要な PS 検層、動的試験及び  $N$  値 50 以上が現れる深さまでの地盤調査を追加で実施する必要がある。

## 3. 被害状況・被害要因等の分析

### 3.1 調査方針

5 本報告の第2章「地震及び地震動の特徴」を踏まえ、本委員会として以下のような考えに基づき被害調査と要因分析を行った。

- 10 ・ 益城町及びその周辺地域においては、加速度記録に基づく応答スペクトル等が建築基準法で設計の際に用いるレベルを上回っている部分があるなど、極めて大きな地震動が作用し、その影響により、多数かつ甚大な建築物被害が生じた。そこで、被害調査と分析にあたっては、益城町及びその周辺地域に着目して検討を進めることとした。
- 15 ・ ただし、益城町及びその周辺地域には規模の大きな鉄骨造や鉄筋コンクリート造・鉄骨鉄筋コンクリート造の建築物はそれほど多くはない。そこでこれらの構造については、震度6弱や6強など一定の強さの地震動を受けた熊本市内などの地域における調査結果も対象として被害要因の分析を行った。このとき被害の程度についても、倒壊・崩壊に近い被害を生じたものとして、被災度区分判定における大破にまで対象を広げて検討を行うこととした。なお、大破には靱性に期待した設計の結果そうなるものがあるが、本調査ではこのような設計の意図通りの被害は対象とせず、設計の想定とは異なる破壊形式等により大破となった事例のみを検討対象とした。
- 20 ・ 今回の熊本地震の特徴として、2回の最大震度7となる地震を含め、被災地域に繰り返し大きな地震動が作用した点が指摘されているが、構造安全性の観点からは、個々の地震が何度来襲したかの議論に先立って、余震を含めた一連の地震動（地震活動）全体を対象に検討することが重要である。そこで、ある一定の期間に発生した地震を全体で一回のイベントと捉え、その結果としての被害状況について、被害要因等の分析を行うこととした。

25

なお、本章で報告された内容を踏まえ、今回の熊本地震における建築物の地震被害について、委員会終了時点での「総括」を第4章としてまとめている。ここでは、今後必要となる検討項目についても示した。

## 3.2 益城町中心部における悉皆調査

### 3.2.1 調査の概要と方法

今回の地震で建築物の被害が大きかった益城町中心部において建築物の建築年代別の被害状況を整理し、各年代の耐震基準による建築物の被害の全体傾向の把握を目的として、発災直後（5月3日～8日）に日本建築学会により実施された益城町中心部における建築物の被害状況の悉皆調査の情報と、建築確認台帳や航空写真等の情報を用い、構造別・建築時期別の建築物被害状況の整理を行った。なお、被害状況等の調査結果<sup>3.2-1)</sup>は8月20日時点のデータを元にしており、日本建築学会において現在精査中であり、ここに示す数値は暫定的なものである。

10

### 3.2.2 調査結果

#### (1) 被害分布

日本建築学会九州支部熊本地震災害調査委員会（委員長：高山峯夫 福岡大学教授）では、強震記録が得られている益城町役場周辺、KiK-net 益城周辺、及び県道 28 号の南側の秋津川までのエリア（益城町大字安永、大字宮園、大字木山、大字辻の城）の概ね全ての建築物の 2,652 棟で調査がされている。これらのうち、用途が倉庫、神社等のものを除いた 2,340 棟について集計を行った。日本建築学会悉皆調査にて判断されている Damage Grade<sup>3.2-2), 3.2-3)</sup>を参考に、表 3.2-1 の通り、建築物の被害レベルを設定した。

20

表 3.2-1 悉皆調査の Damage Grade と建築物の被害レベルの関係

建築物の被害レベル	悉皆調査の Damage Grade
無被害	D0
軽微・小破・中破	D1/D2/D3
大破	D4
倒壊・崩壊	D5/D6

25

図 3.2-1、図 3.2-2 に調査エリアにおけるメッシュごとの大破率（＝メッシュエリア内の大破、以上の建築物の数／メッシュエリア内の全建築物数）、及び倒壊率（＝メッシュエリア内の倒壊・崩壊の建築物の数／メッシュエリア内の全建築物数）を示した。メッシュは総務省基準地域メッシュを東西方向は 20 分の 1、南北方向は 16 分の 1 した区分（＝約 57×57m）とした。倒壊率については県道の南側で 50%以上のエリアが多く、調査エリアの北東の辻の城地域と、南側の秋津川に近い地域では倒壊率 0%のエリアが多くなっている。大破率については県道の北側～益城町役場周辺にも 50%以上のエリアが広がっている。

30

図 3.2-3、図 3.2-4 に国土地理院の治水地形分類図と倒壊建物が存在するエリア、倒壊率 0%のエリアを重ねあわせて示した。益城町中心部は県道 28 号沿いから北側にかけて、河岸段丘の段丘面が広がり、秋津川に近いエリアは旧河道と氾濫平野となっている。県道の南側のエリアでは、倒壊・崩壊した建築物が段丘面に存在し、倒壊率 0%のエリアが氾濫平野・旧河道に存在する傾向が見られた。一般的に考えられている地盤と建築物の被害の関係と異なる傾向にあり、今後、地盤調査等による詳細な分析が待たれる。図 2.3-1 の益城町中心部の 1901 年～1977 年の地形図の通り、1901 年～1960 年代までは県道沿いに住宅地が存在し、住宅地から南部に向けて田園地帯が広がる。1970

40

年代からの人口増加に伴い、秋津川の北側の田園地帯、北東の傾斜地にも住宅地が拡大したことが分かる。図 3.2-5、図 3.2-6 に 1926 年の地形図と倒壊建物が存在するエリア、倒壊率 0%のエリアを示したが、倒壊した建物は、1926 年の住宅地と同じエリアに存在することが分かった。

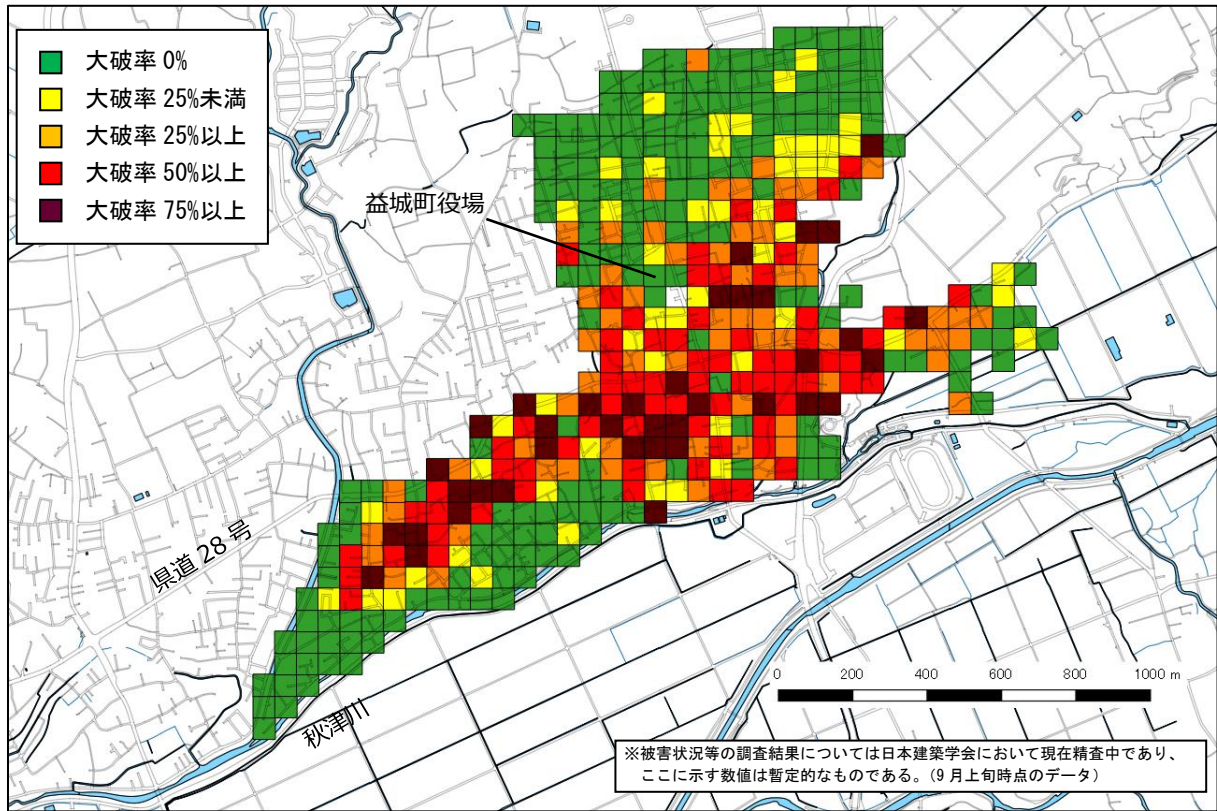


図 3.2-1 悉皆調査結果による大破率の分布（国土地理院地図を編集）

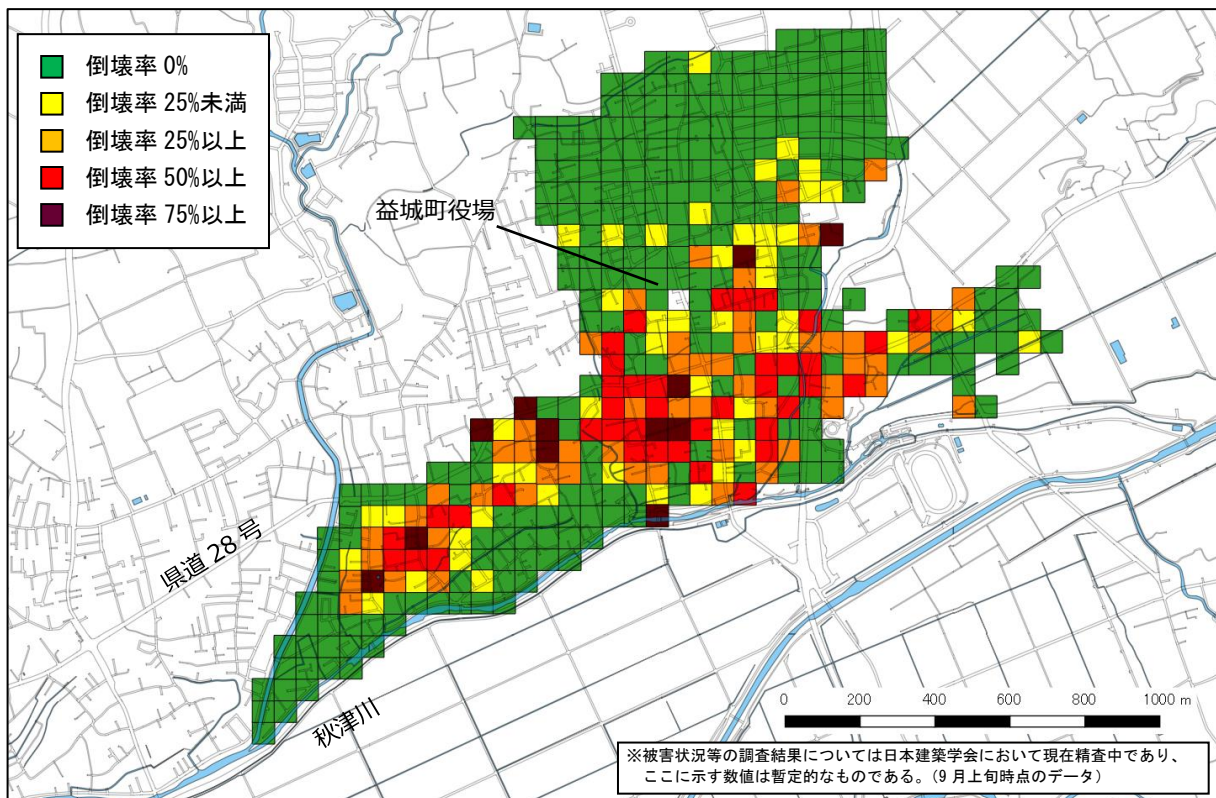


図 3.2-2 悉皆調査結果による倒壊率の分布（国土地理院地図を編集）

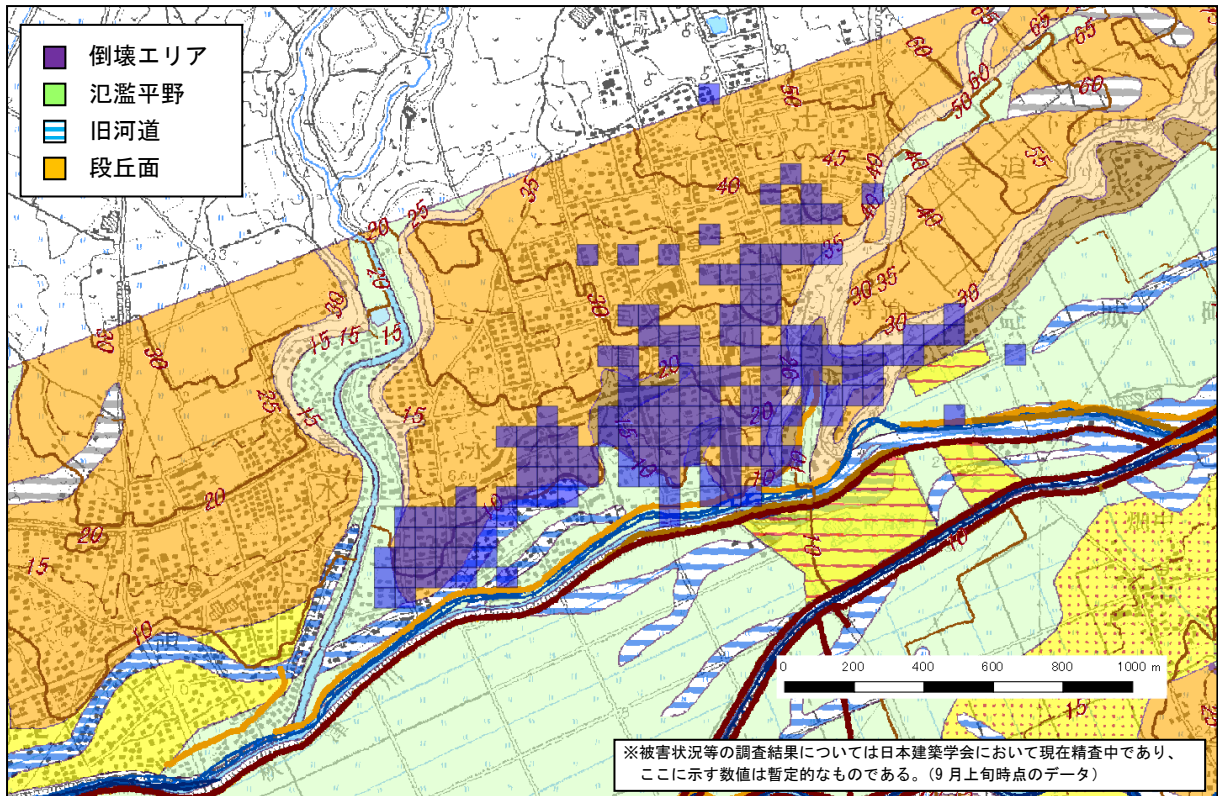


図 3.2-3 治水地形分類図（国土地理院）と倒壊建物が存在するエリア

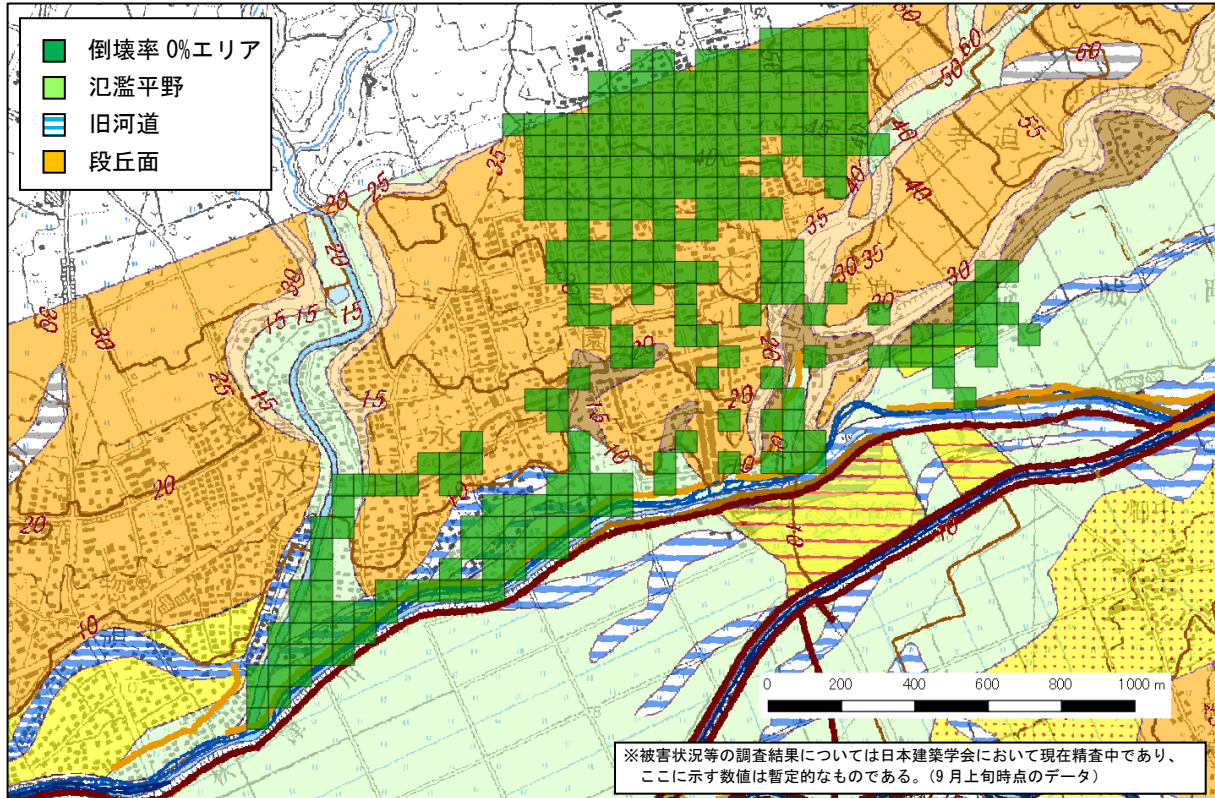


図 3.2-4 治水地形分類図（国土地理院）と倒壊率 0%のエリア

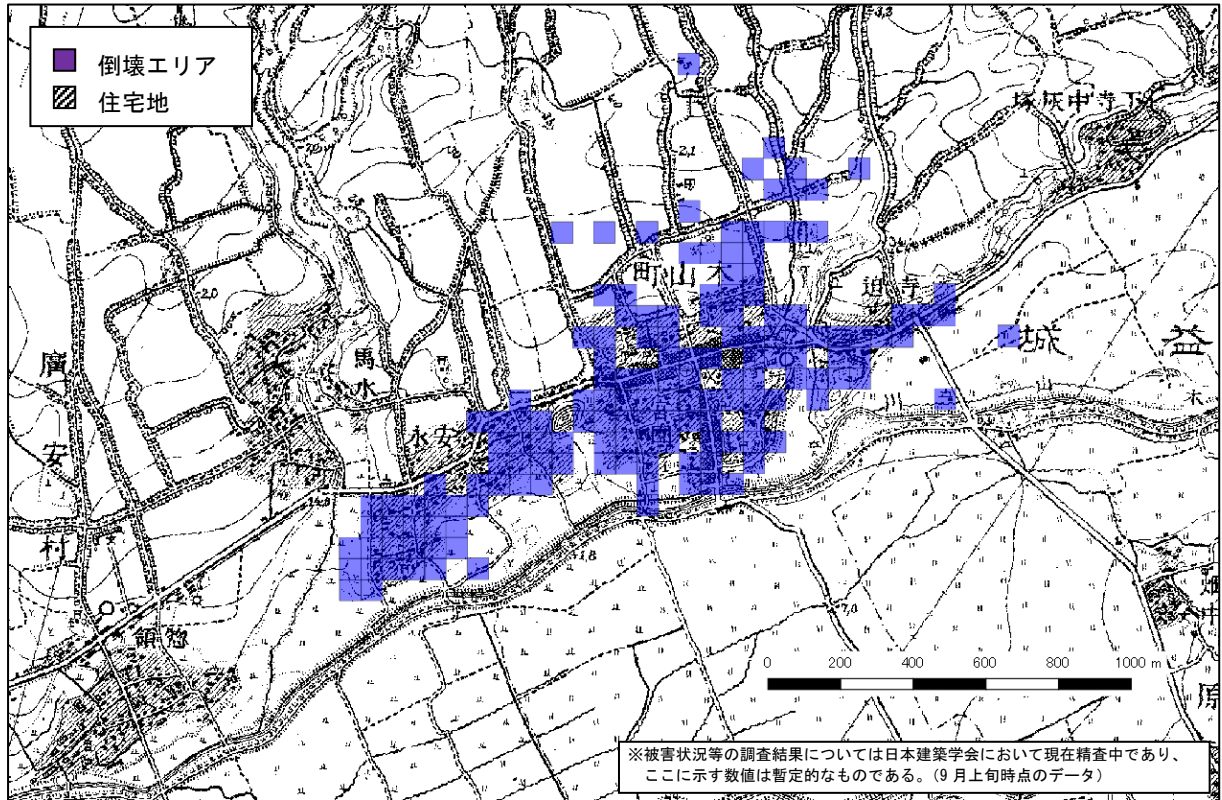


図 3.2-5 1926 年の地形図（国土地理院）と倒壊建物が存在するエリア

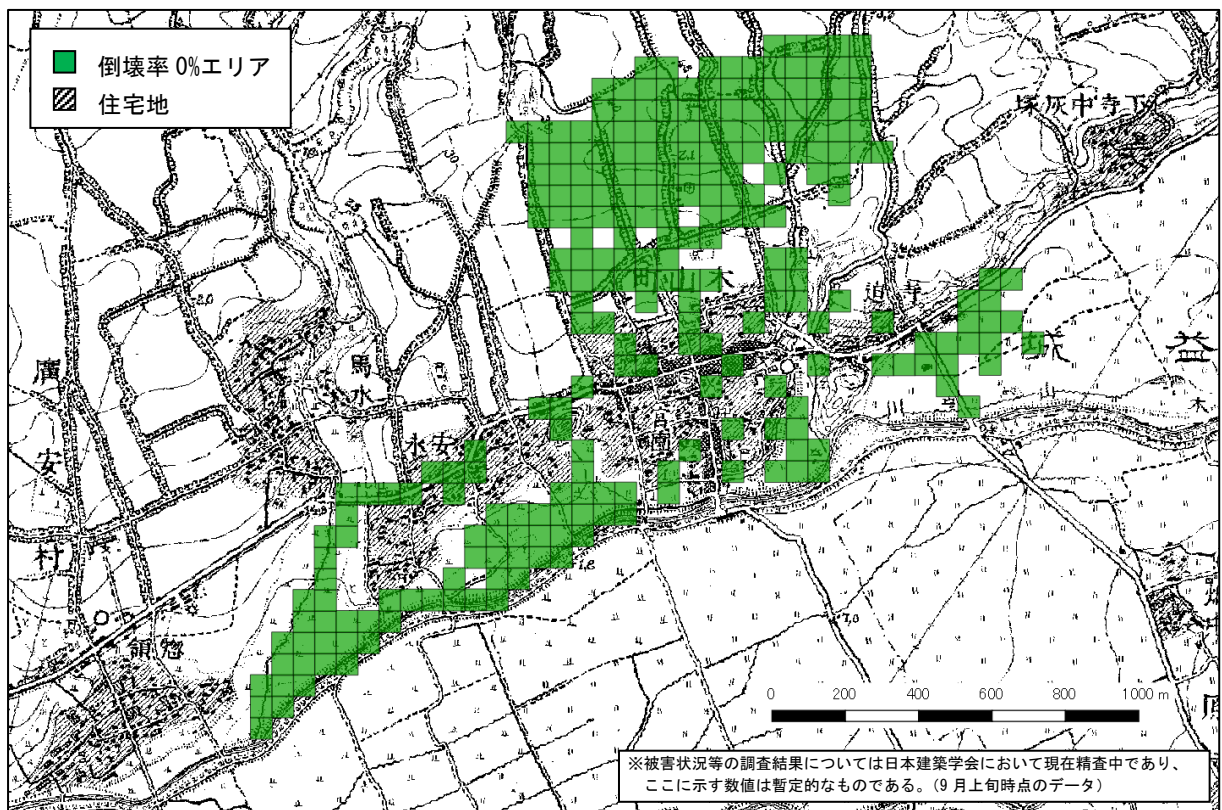


図 3.2-6 1926 年の地形図（国土地理院）と倒壊率 0%のエリア



## (2) 年代・構造別の被害の概要

日本建築学会九州支部熊本地震災害調査委員会、及び日本建築学会木質構造災害WGと協力し、悉皆調査結果と、熊本県から国土交通省住宅局に提供された建築確認台帳や各年代の国土地理院が撮影した航空写真等の情報を用い、構造別・建築時期別の建築物被害状況を整理した。表3.2-2に構造別・建築時期別の被害状況の集計結果を示した。建築時期については、新耐震基準が施行された1981年6月と木造の構造関係の基準が改正された2000年6月を分岐点として、①：1981年5月以前、②：1981年6月～2000年5月、③：2000年6月以降の3つの建築年代に分類し、集計した。なお、航空写真による年代区分では、1982年の航空写真にあるものは旧耐震とするなど、年代区分の境界付近で正確に建築年代を特定できないものは古い年代に分類している。1981年6月施行の新耐震基準では、木造は必要壁量が増加し、2000年6月の基準改正では、つり合い良い壁配置の方法、筋かい及び柱脚柱頭接合部の緊結方法が明確化され、地耐力に応じて採用できる基礎の種類が規定されている。倒壊・崩壊の棟数は木造が297棟で最も多く、S造の倒壊・崩壊10棟で、RC造は2棟であった。倒壊・崩壊の割合も木造が15.2%で最も高く、S造が3.6%、RC造が3.8%であった。

図3.2-7に旧耐震の建築物の割合（メッシュエリア内の旧耐震の建築物の数／メッシュエリア内の全建築物数）、図3.2-8に2000年6月以降建築の建築物の割合（メッシュエリア内の2000年6月以降建築の建築物の数／メッシュエリア内の全建築物数）を示した。旧耐震の建築物は辻の城地区の北東と、馬水地区の南西に少ない傾向がみられるが、その他のエリアでは明確な差はみられない。図3.2-5の1926年の宅地と旧耐震の建築物のエリアについても同様に北東と南西端を除き明確な関連性は見られなかった。2000年以降建築の建築物は辻の城地区、宮園の北部、寺迫地区、秋津川沿いに局所的に多いエリアがみられるが、その他のエリアでは明確な差はみられな

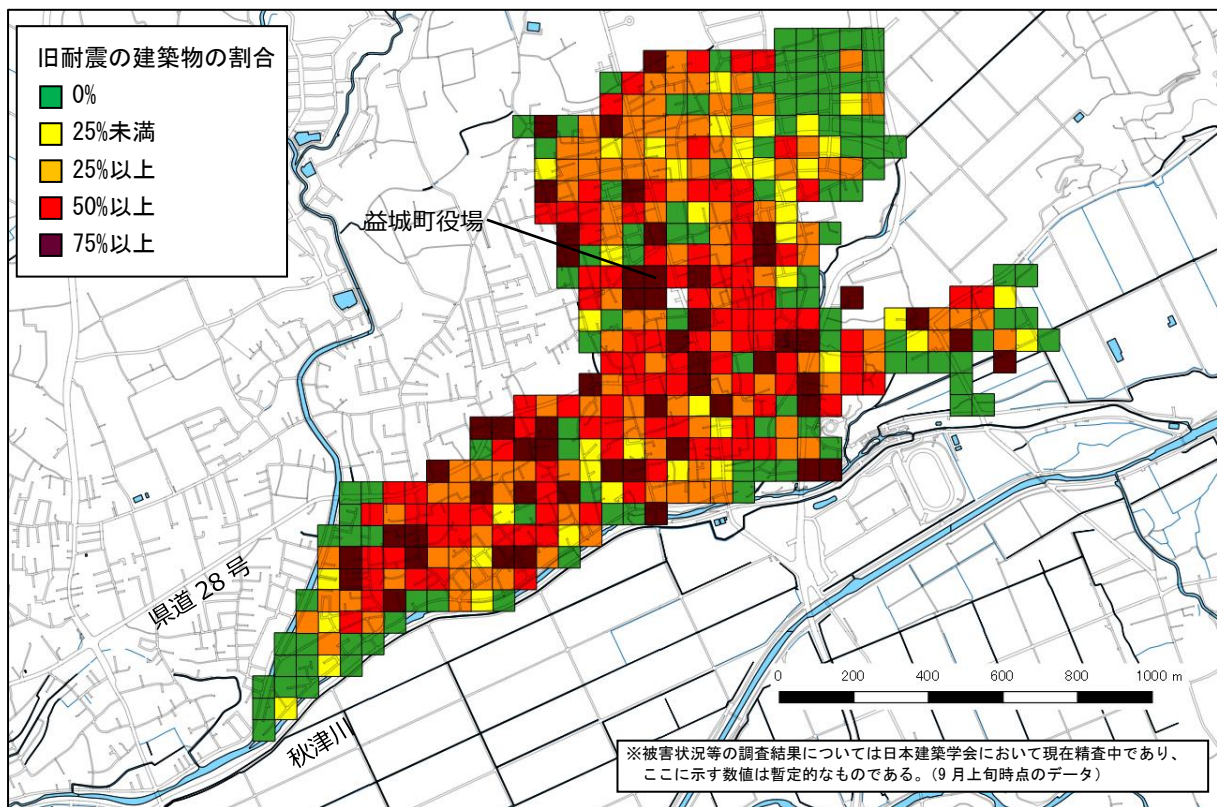


図3.2-7 1981年5月以前建築（旧耐震）の建築物の割合（国土地理院地図を編集）

い。図 3.2-9 に木造の年代ごとの被害状況を示したが、新耐震以前の木造の倒壊・崩壊は 27.9%、新耐震以降 2000 年改正以前の木造の倒壊・崩壊は 8.7%、2000 年改正以降の木造の倒壊・崩壊は 2.2%であった。

5

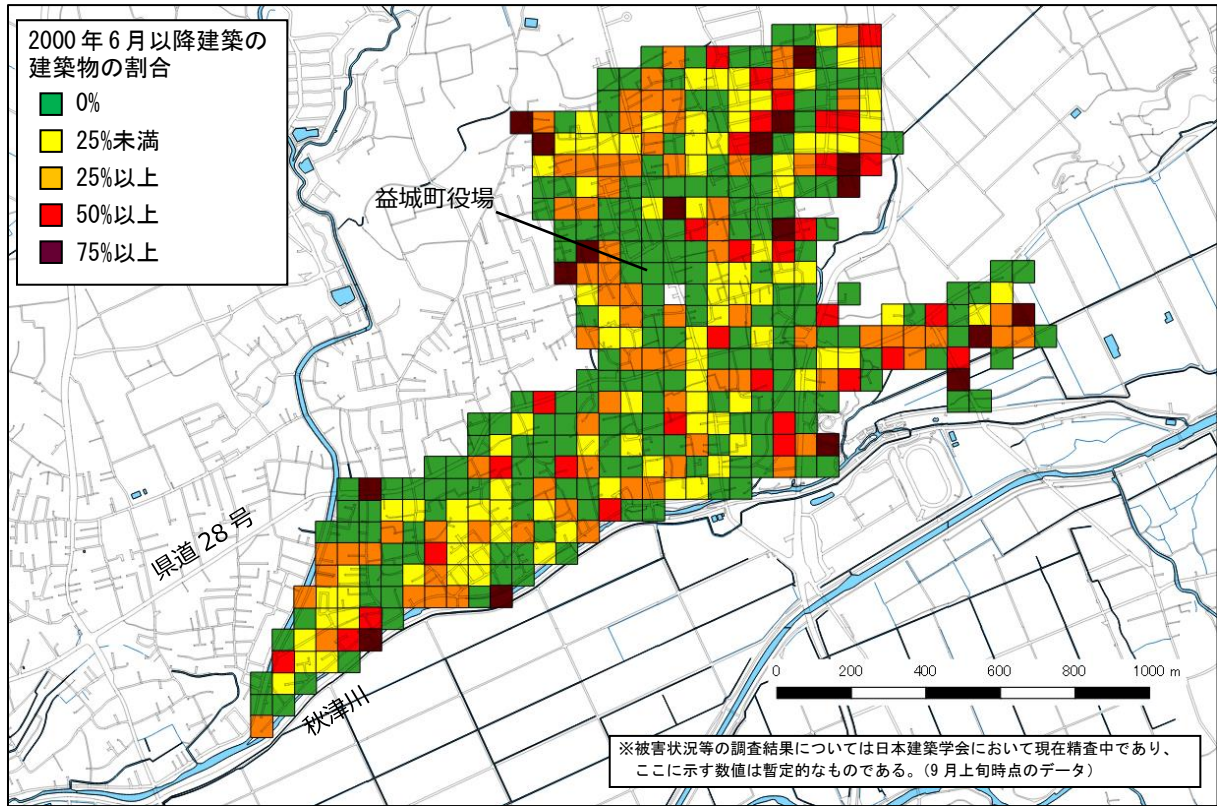


図 3.2-8 2000 年 6 月以降建築の建築物の割合 (国土地理院地図を編集)

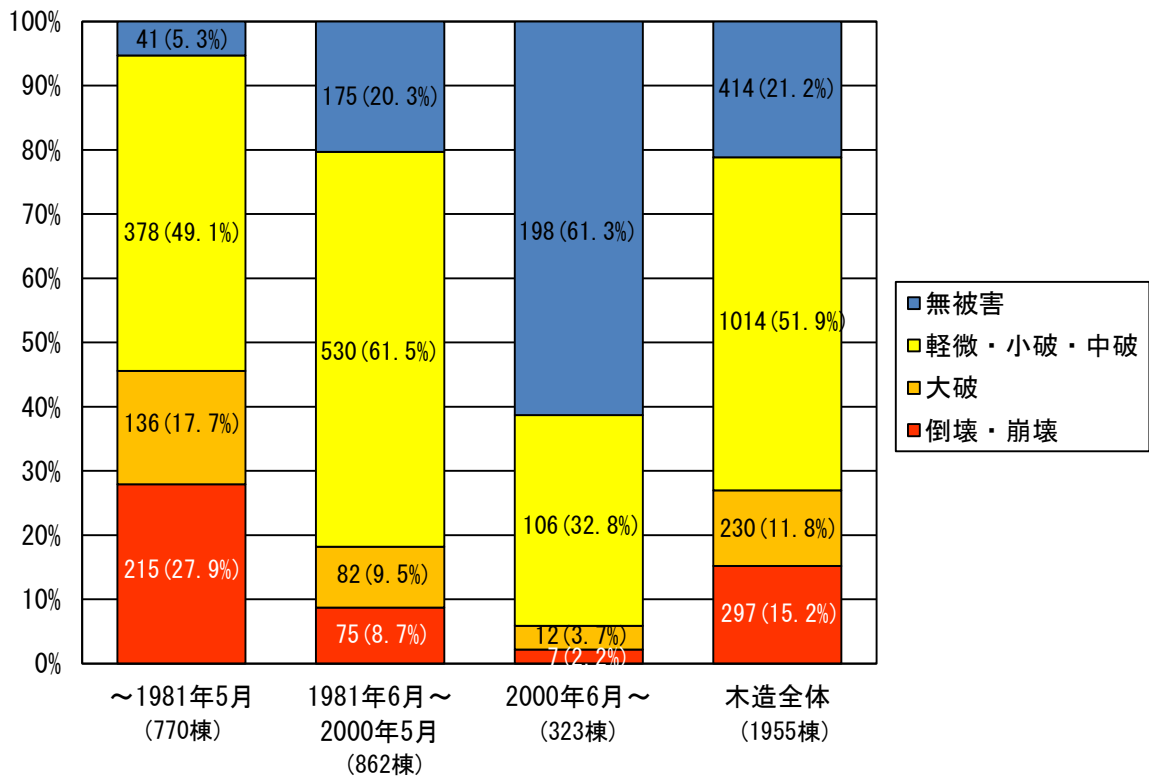


図 3.2-9 木造の建築時期別の被害状況

表 3.2-2 構造別・建築時期別の建築物被害状況

構造	建築物の被害レベル	建築時期			総計
		～1981年5月	1981年6月～ 2000年5月	2000年6月～	
木造	無被害	41 ( 5.3% )	175 ( 20.3% )	198 ( 61.3% )	414 ( 21.2% )
	軽微・小破・中破	378 ( 49.1% )	530 ( 61.5% )	106 ( 32.8% )	1014 ( 51.9% )
	大破	136 ( 17.7% )	82 ( 9.5% )	12 ( 3.7% )	230 ( 11.8% )
	倒壊・崩壊	215 ( 27.9% )	75 ( 8.7% )	7 ( 2.2% )	297 ( 15.2% )
	小計	770 ( 100.0% )	862 ( 100.0% )	323 ( 100.0% )	1955 ( 100.0% )
S造	無被害	27 ( 47.4% )	82 ( 53.6% )	49 ( 74.2% )	158 ( 57.2% )
	軽微・小破・中破	21 ( 36.8% )	56 ( 36.6% )	14 ( 21.2% )	91 ( 33.0% )
	大破	5 ( 8.8% )	10 ( 6.5% )	2 ( 3.0% )	17 ( 6.2% )
	倒壊・崩壊	4 ( 7.0% )	5 ( 3.3% )	1 ( 1.5% )	10 ( 3.6% )
	小計	57 ( 100.0% )	153 ( 100.0% )	66 ( 100.0% )	276 ( 100.0% )
RC造	無被害	5 ( 33.3% )	33 ( 89.2% )	0 ( - )	38 ( 73.1% )
	軽微・小破・中破	8 ( 53.3% )	4 ( 10.8% )	0 ( - )	12 ( 23.1% )
	大破	0 ( 0.0% )	0 ( 0.0% )	0 ( - )	0 ( 0.0% )
	倒壊・崩壊	2 ( 13.3% )	0 ( 0.0% )	0 ( - )	2 ( 3.8% )
	小計	15 ( 100.0% )	37 ( 100.0% )	0 ( - )	52 ( 100.0% )
混構造	無被害	3 ( 20.0% )	3 ( 18.8% )	0 ( 0.0% )	6 ( 18.8% )
	軽微・小破・中破	9 ( 60.0% )	10 ( 62.5% )	1 ( 100.0% )	20 ( 62.5% )
	大破	3 ( 20.0% )	2 ( 12.5% )	0 ( 0.0% )	5 ( 15.6% )
	倒壊・崩壊	0 ( 0.0% )	1 ( 6.3% )	0 ( 0.0% )	1 ( 3.1% )
	小計	15 ( 100.0% )	16 ( 100.0% )	1 ( 100.0% )	32 ( 100.0% )
その他	無被害	0 ( 0.0% )	4 ( 57.1% )	10 ( 90.9% )	14 ( 66.7% )
	軽微・小破・中破	2 ( 66.7% )	2 ( 28.6% )	1 ( 9.1% )	5 ( 23.8% )
	大破	1 ( 33.3% )	1 ( 14.3% )	0 ( 0.0% )	2 ( 9.5% )
	倒壊・崩壊	0 ( 0.0% )	0 ( 0.0% )	0 ( 0.0% )	0 ( 0.0% )
	小計	3 ( 100.0% )	7 ( 100.0% )	11 ( 100.0% )	21 ( 100.0% )
不明	無被害	0 ( 0.0% )	1 ( 33.3% )	0 ( - )	1 ( 25.0% )
	軽微・小破・中破	1 ( 100.0% )	1 ( 33.3% )	0 ( - )	2 ( 50.0% )
	大破	0 ( 0.0% )	1 ( 33.3% )	0 ( - )	1 ( 25.0% )
	倒壊・崩壊	0 ( 0.0% )	0 ( 0.0% )	0 ( - )	0 ( 0.0% )
	小計	1 ( 100.0% )	3 ( 100.0% )	0 ( - )	4 ( 100.0% )
全体	無被害	76 ( 8.8% )	298 ( 27.6% )	257 ( 64.1% )	631 ( 27.0% )
	軽微・小破・中破	419 ( 48.7% )	603 ( 55.9% )	122 ( 30.4% )	1144 ( 48.9% )
	大破	145 ( 16.8% )	96 ( 8.9% )	14 ( 3.5% )	255 ( 10.9% )
	倒壊・崩壊	221 ( 25.7% )	81 ( 7.5% )	8 ( 2.0% )	310 ( 13.2% )
	小計	861 ( 100.0% )	1078 ( 100.0% )	401 ( 100.0% )	2340 ( 100.0% )

### 3.2.3 まとめ

建築学会によって益城町大字安永、大字宮園、大字木山、大字辻の城の概ね全ての建築物である 2,652 棟について調査が実施され、国総研・建研が実施した詳細調査等に基づき内容の精査を行った上で、用途が簡易な倉庫、神社等を除いた 2,340 棟について集計が行われている。最終的な内訳は、木造 1955 棟、鉄骨造 276 棟、鉄筋コンクリート造 52 棟である。

(1) 倒壊率は県道の南側で 50%以上のエリアが多く、調査エリアの北東の辻の城地域と、南側の秋津川に近い地域では倒壊率 0%のエリアが多くなっている。

(2) 県道 28 号の南側のエリアでは、倒壊・崩壊した建築物が段丘面に存在し、倒壊率 0%のエリアが氾濫平野・旧河道とよく一致する傾向があった。また倒壊・崩壊した建築物の位置は 20 世紀初頭から住宅地であったエリアとよく一致する傾向にあった。

### 参考文献（3.2 節）

3.2-1) 菊池健児, 田中 圭: 益城町の悉皆調査, 2016 年熊本地震災害調査報告会資料, 2016 年度日本建築学会大会 (九州) 災害部門 緊急報告会, 2016.8

3.2-2) 岡田成幸, 高井伸雄: 地震被害調査のための建物分類と破壊パターン, 日本建築学会構造系論文集, 第 524 号, pp.65-72, 1999.10

3.2-3) 高井伸雄, 岡田成幸: 地震被害調査のための鉄筋コンクリート造建物の破壊パターン分類, 日本建築学会構造系論文集, 第 549 号, pp.67-74, 2001.11

### 3.3 木造建築物の被害の特徴と要因

#### 3.3.1 調査の概要・範囲等

本委員会では、主として次の調査を対象に検討を行った。

##### 5 (1) 建研・国総研の調査の概要

これまで、国総研・建研では、複数回の現地調査を実施している<sup>3.3.1-3.3.3)</sup>。調査の中心となっているのは、多数の木造建築物が倒壊・崩壊等の被害を受けた地域として、震度7を観測した益城町、西原村及び報道等で大きな被害の報告された南阿蘇村である。

##### (2) 他の団体・研究機関の調査の概要

10 日本建築学会等で行われている調査もほぼ同様の対象となっているが、上記以外の地域での被害の把握状況については、次の通りである。

①熊本市内、阿蘇市等での文化財の被害の報告がある。

②熊本市内、嘉島町周辺で倒壊・大破の木造住宅が数棟確認されているが、国総研・建研が調査を行った地域よりは被害が少ない印象であり、築年数が概ね40年超と推定される木造住宅の被害  
15 が多かった。

#### 3.3.2 被害調査の結果及び要因の分析

##### (1) 益城町中心部の被害の概要

益城町で実施された建築学会の悉皆調査区域においては、倉庫・神社等を除くと1955棟の木造  
20 が対象となっており、国総研・建研で詳細調査を実施した木造の約240棟中、上記の区域に存在するものは170棟程度であった。木造建築物については、(大破以下の被害を含めると膨大になることから)主として倒壊・崩壊等したものについての調査・分析を行っている。

木造建築物の倒壊が集中していた益城町中心部において、被害の全体像を把握するための概要調査と、日本建築学会による悉皆調査(以下、悉皆調査)の結果<sup>3.2-4)</sup>、応急危険度判定の結果、  
25 建築確認台帳の建築確認年月の情報等を参考に、新耐震以降の建築確認で倒壊した木造住宅の現地調査や図面等による構造的特徴の把握、被害要因の分析を行った。被害要因については3.3.3に分析結果を報告する。なお、以下の文章では1981年6月の建築基準法改正以前の建築確認の木造を「旧耐震」、1981年6月の建築基準法改正以降の建築確認の木造を「新耐震」、2000年6月の建築基準法改正以降の建築確認の木造を「2000年以降」と呼ぶ。

30 ①益城町役場周辺、県道28号沿い、県道から南側に木造住宅の被害が比較的多かった。

②前震で被害が軽微であった木造住宅が本震で倒壊した例が多数確認された。(写真3.3-1)

③旧耐震の木造住宅、店舗併用の2階建て木造住宅の倒壊が多数確認された。

(悉皆調査エリアでは旧耐震の木造は770棟あり、そのうち215棟(27.9%)が倒壊<sup>※1)</sup>)

④新耐震の木造の倒壊(ここでは大破を除く)が101棟<sup>※1)</sup>確認された。筋かい端部が釘打ち程  
35 度の軽微な接合方法であったものが多く確認された(写真3.3-2~3.3-3)。

(悉皆調査エリアでは新耐震の木造は1185棟あり、そのうち82棟(6.9%)が倒壊<sup>※1)</sup>)

⑤2000年以降の木造の倒壊が7棟<sup>※1)</sup>確認された。(写真3.3-4~3.3-7)

(悉皆調査エリアでは2000年以降の木造は323棟あり、そのうち7棟(2.2%)が倒壊、198棟  
(61.3%)が無被害、12棟(3.7%)が大破<sup>※1)</sup>)

40 (※1) 第3回合同委員会(9月12日)時点で把握している情報

⑥悉皆調査エリア内に住宅性能表示制度を活用した木造住宅は19棟あり、このうち、構造躯体の耐震等級（構造躯体の倒壊等防止）が等級3であった16棟は14棟が無被害、2棟が軽微又は小破の被害、等級2であった2棟は1棟が無被害、1棟が軽微の被害、等級1であった1棟は軽微の被害であった。

5



写真 3.3-1 4/15 時点では壁が外れただけの家屋（左）が本震で倒壊（右）した例



写真 3.3-2 倒壊した木造住宅

写真 3.3-3 写真 3.3-2 の住宅の柱頭部



写真 3.3-4 倒壊した木造住宅

写真 3.3-5 写真 3.3-4 の建物の写真筋かい端部、柱脚接合部

10



写真 3.3-6 倒壊した木造住宅



写真 3.3-7 写真 3.3-6 の建物の写真筋かい端部、柱脚接合部

(2) 西原村の被害の概要

- 5
- ① 畑、風当、古閑、大切畑、布田地区が木造住宅の被害が多かった。
  - ② 築年数が概ね 40 年超と推測される木造住宅の倒壊が多く確認された (写真 3.3-8~3.3-9)。
  - ③ 傾斜地において、敷地の被害や擁壁の崩壊が多数確認された (写真 3.3-10~3.3-11)。



写真 3.3-8 倒壊した木造住宅



写真 3.3-9 倒壊した木造住宅



写真 3.3-10 崩壊した擁壁



写真 3.3-11 崩壊した擁壁

(3) 南阿蘇村の被害の概要

- 15
- ① 河陽黒川地区 (大字：河陽、字：黒川、以下黒川地区) に木造住宅の被害が集中していた。
  - ② 黒川地区では 2 階建ての木造アパートが多く存在し、そのうち 7 棟の倒壊を確認した。
  - ③ これらの木造アパートのうち、柱脚・柱頭、筋かい端部が確認できたものの多くは接合方法が釘打ち程度の比較的軽微な接合方法であった (写真 3.3-12~3.3-15)。
  - ④ 木造アパートの他、築年数が概ね 40 年超と推定される木造住宅の倒壊が多数確認された。

⑤年代ごとの航空写真の分析により、新耐震と推測される木造住宅の倒壊が数棟確認された。木造アパートと同様に柱脚・柱頭、筋かい端部の接合方法が比較的軽微な建物が多かったが、中には金物により緊結されている建物も確認された（写真 3.3-16～3.3-17）。

5



写真 3.3-12 倒壊した木造アパート



写真 3.3-13 筋かい端部 (釘打ちによる接合)



写真 3.3-14 倒壊した木造アパート



写真 3.3-15 写真 3.3-14 のアパートの柱脚部 (柱脚、筋かい端部は釘打ちのみ)

10



写真 3.3-16 倒壊した木造住宅



写真 3.3-17 写真 3.3-16 の住宅の柱頭部



### 3.3.3 益城町中心部において倒壊した木造建築物の被害要因の分析

#### (1) 益城町中心部における新耐震以降の建築確認で倒壊した木造建築物の構造的特徴と被害要因の分析

国総研・建研では、益城町中心部における現地調査を実施し、新耐震の木造住宅で倒壊・崩壊したものを中心に被害状況の把握、構造仕様の確認を行った。その結果、分析対象として101棟の木造住宅を選定し、構造的特徴の把握と被害要因の分析を行った。分析対象には悉皆調査の調査エリアの木造住宅82棟の他、悉皆調査エリア外の木造住宅19棟を含んでいる。被害要因には柱脚・柱頭接合部の金物の有無のほか、隣の建物の衝突、地盤変状の影響など、被害が大きくなった要因について集計を行った。集計の結果、下記のことが明らかとなった。

- 5
  - 10
  - 15
  - 20
  - 25
  - 30
- ・分析対象の101棟のうち、筋かい端部の接合部仕様を確認したものが68棟（2000年以降7棟）で、その中で接合部仕様が不十分（釘打ち程度の接合仕様、金物は施工されているが釘の径・長さが不足等）であったものが50棟（73.5%、2000年以降2棟）であった。
  - ・分析対象の101棟のうち、柱脚柱頭の接合部仕様を確認したものが95棟（2000年以降7棟）で、その中で接合金物が施工されていること（釘の径・長さが不足している等の不十分な接合仕様を含む）を確認したものが29棟（30.5%）、現行規定通りの接合部仕様（引き寄せ金物が施工されている等）と推定されるものが4棟（4.2%、2000年以降4棟）であった。残りの91棟（95.8%、2000年以降3棟）は現行規定の接合部仕様を満たしていない可能性が考えられる。なお、接合部仕様を確認できなかった6棟は、すべて悉皆調査エリア内だった。
  - ・分析対象の101棟のうち、接合部仕様以外の被害を大きくしたと考えられる要因として、地盤変状2棟、隣棟の衝突2棟（悉皆調査エリア内1棟）、生物劣化（蟻害）3棟（悉皆調査エリア内2棟）等がみられた。
  - ・2000年以降で倒壊した7棟については、入手した図面等から被害要因の分析を行った。次項に詳細を報告する。
  - ・文献における分析結果<sup>3.3-5)</sup>に基づき、前震と本震の間の4月15日に斜め方向から撮影された益城町中心部の航空写真（国土地理院電子国土WEB）により、前震で倒壊した木造住宅の確認を行った。悉皆調査エリア内で前震により倒壊した木造住宅を35棟確認した。そのうち旧耐震が30棟であった。残りの新耐震5棟全てにおいて接合部仕様が不十分であったこと、隣接した旧耐震の建物の衝突があったこと等を確認した。

表 3.3-1(a) 筋かい端部接合部の仕様を確認した68棟の状況

状況	建築年	悉皆調査エリア内	全エリア
接合仕様が不十分	1981年6月～ 2000年5月	32棟	48棟
	2000年6月～	2棟	2棟

表 3.3-1 (b) 柱脚柱頭接合部の仕様を確認した 95 棟の状況

状況	建築年	悉皆調査エリア内	全エリア
接合金物の施工を確認	1981年6月～ 2000年5月	22棟	25棟
	2000年6月～	4棟	4棟
現行規定通りの接合仕様	1981年6月～ 2000年5月	0棟	0棟
	2000年6月～	4棟	4棟

(2) 2000年6月以降の建築確認で倒壊した木造建築物の構造的特徴と被害要因の分析

益城町中心部で、2000年以降の木造住宅 323 棟のうち 7 棟（約 2.2%）の倒壊が確認された。倒壊の原因究明を目的として入手した図面等を用いた分析を行った。倒壊した 7 棟のうち 4 棟については現地調査により、不十分な接合部の仕様、地盤変状の影響等の被害要因が見られた。残りの 3 棟と参考までに接合部仕様が不十分であった 1 棟を分析対象として、建築基準法施行令 46 条の壁量計算、品確法性能評価基準における壁量計算<sup>3.3-6</sup>、を行った。また、3 棟の被害状況を再現することを目的として、実態の耐震性能を再現した解析モデルと、近隣で観測された地震波を用いて、限界耐力計算、時刻歴応答解析を行った。以下、分析対象の 4 棟を A-1～A-4（接合部仕様が不十分であった 1 棟が A-4）と呼称する。4 棟の概要を表 3.3-2 に示した。

表 3.3-2 2000年6月以降の建築確認で倒壊した木造建築物の構造的特徴

名称	A-1	A-2	A-3	A-4
構造的被害	1層の層崩壊	1層の層崩壊	1層の層崩壊	1層の層崩壊
敷地・基礎の被害	基礎被害：無し 地盤変状：無し	基礎被害：確認できず 地盤変状：無し	基礎被害：確認できず 地盤変状：無し	基礎被害：軽微な亀裂 地盤変状：無し
構法	軸組構法 2階建て	軸組構法 2階建て	軸組構法 2階建て	軸組構法 2階建て
外壁	サイディング	サイディング	ALC サイディング	サイディング モルタル
内壁	せっこうボード	せっこうボード	せっこうボード	せっこうボード
屋根	スレート瓦	棧瓦葺	棧瓦葺	棧瓦葺
耐震要素	2つ割り筋かい	2つ割り筋かい	2つ割り筋かい	2つ割り筋かい
接合部	ホールダウン金物 筋かい金物	ホールダウン金物 筋かい金物	ホールダウン金物 筋かい金物	筋かい金物
1F床面積	90.18m <sup>2</sup>	86.00m <sup>2</sup>	76.96m <sup>2</sup>	53.89m <sup>2</sup>
2F床面積	84.47m <sup>2</sup>	50.00m <sup>2</sup>	69.99m <sup>2</sup>	45.16m <sup>2</sup>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>細径鋼管による地盤補強を行っているとのこと（鋼管 100 本程度）</li> <li>杭は住宅の真下のみ</li> <li>前震では被害軽微、本震で倒壊</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>RC 造の杭を確認</li> <li>敷地に大きな亀裂</li> <li>接合部仕様が不十分</li> </ul>

①壁量計算による検討

分析対象の4棟の他、益城町中心部において被害が軽微な建物についても図面の入手を行った。入手した図面から建築基準法施行令46条における必要壁量と、品確法性能評価基準の等級2に相当する必要壁量を1.25で除した値を分母として、存在壁量の余裕率の検討を行った。図3.3-1に

5

10

15

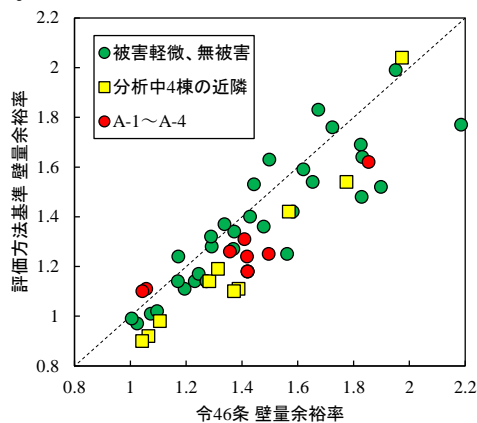


図 3.3-1 壁量余裕率の比較

20

②実態重量を反映した解析モデルを用いた限界耐力計算、時刻歴応答解析による検討

分析対象の4棟のうち被害要因が特定できていない3棟(A-1~A-3)と、A-2、A-3の近隣で無被害だったC-6について、実際の建物の被害状況を再現することを目的として、分析対象の木造住宅の実態に近い重量を推定した解析モデルを用いて、限界耐力計算、時刻歴応答解析による被害再現を試みた。解析モデルを図3.3-2に示した。

25

30

35

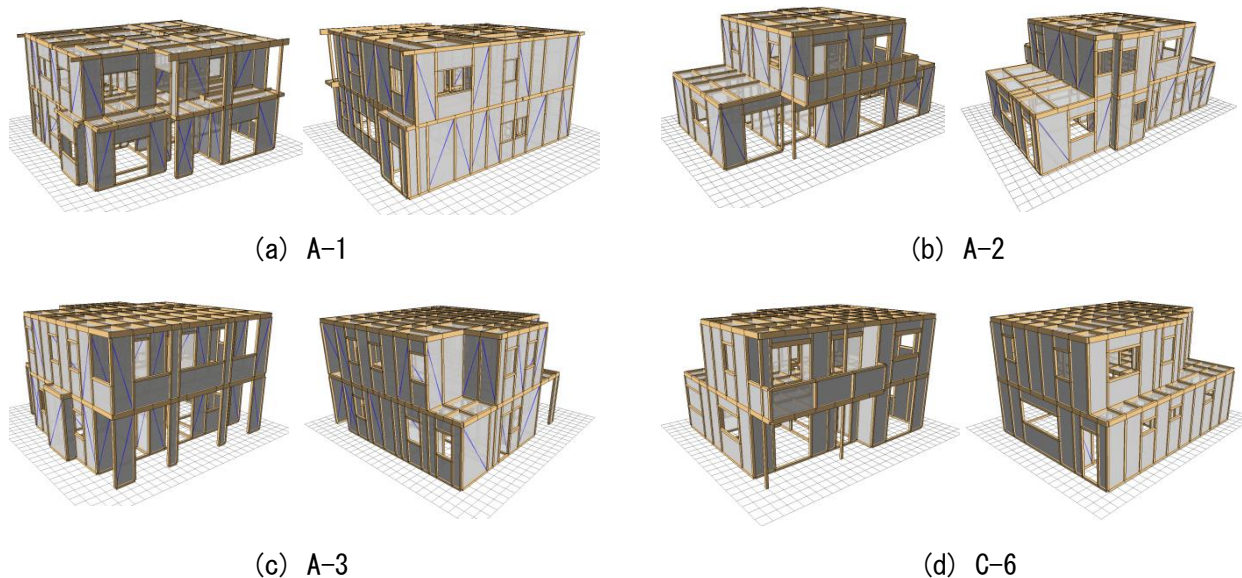


図 3.3-2 解析モデルの概要

40

立体骨組のモデル化とプッシュオーバー解析、時刻歴応答解析は国土技術政策総合研究所のホームページにおいて無償公開している木造住宅用の数値解析プログラム「wallstat（ウォールスタット）」<sup>3.3-7)</sup>を用いた。本プログラムを用いた応答解析は実大の木造住宅の振動台実験との比較により、計算結果の精度・妥当性の確認が行われている<sup>3.3-8)</sup>。解析モデルの耐震要素として筋かい、サイディング、せっこうボードの鉛直構面壁を考慮し、筋かいは両側に面材が張られている場合の座屈拘束効果を考慮してモデル化を行った<sup>3.3-8~3.3-9)</sup>。垂壁・腰壁における内外壁も耐震要素として考慮した。壁倍率の大臣認定を取得している耐力壁については、性能評価実験の荷重変形関係からモデル化を行った。プッシュオーバーはAi分布に応じて、解析対象の建物が倒壊した方向に、該当する解析モデルの各階の床・小屋組レベルを荷重増分させることで各層の層せん断力を算出した。

通常の構造計算では設計用の固定荷重、積載荷重（地震力）を用いて重量の算定を行うが、木造住宅の実態重量は構造計算用の重量より低いことが知られている<sup>3.3-10)</sup>。具体的には解析モデルの重量について下記の調整を行っている。

- 1) 積載荷重を実態を反映して、 $600 \text{ N/m}^2 \rightarrow 200 \text{ N/m}^2$ に減少させる。
- 2) 外壁の開口率 40%、内壁の開口率 50%を考慮して、固定荷重から減少させる。

時刻歴応答解析の入力波として用いた波形は平成 28 年 4 月 14 日 21:26 及び 4 月 16 日 1:25 に国立研究開発法人 防災科学技術研究所の強震観測点<sup>3.3-11)</sup> (KiK-net 益城：コード KMMH16) で観測された波形と、大阪大学 大学院工学研究科 秦吉弥氏が記録・公開した本震の記録<sup>3.3-12)</sup>である。以降、KiK-net 益城における前震の際の記録を「KiK-net 益城 0414 (前震)」、本震の際の記録を順に「KiK-net 益城 0416 (本震)」と呼ぶ。大阪大学の波形は「TMP1」、「TMP2」「TMP3」の 3 種類が公開されているが、本項では分析対象の A-2、A-3 の近隣に位置する「TMP3」を用いた。KiK-net 益城は A-1 から約 350m 離れた位置にあり、A-1 の検討に用いた。TMP3 は、A-2、A-3、C-6 から 120m~160m 離れた位置にあり、A-2、A-3、C-6 の検討に用いた。時刻歴応答解析には、加速度波形を文献<sup>3.3-13, 3.3-14)</sup>による方法により変位波形に変換して、波形の主要な領域 30 秒間を抽出し、入力地震波として用いた。

#### (a) 地震波を必要耐力曲線とした限界耐力計算による検討

入力地震波の 5%の応答スペクトルを元にして、解析モデルのプッシュオーバー解析により得られた 1 自由度縮約の荷重変形関係から減衰による低減係数、等価周期を計算し<sup>3.3-15)</sup>、必要耐力曲線を算定することで応答値の計算を行った。必要耐力曲線等に乗じる係数である p、q、Z、Gs 等は全て 1.0 とした。A-1 については、倒壊した方向の KiK-net 益城の EW 方向の波形を用い、A-2、A-3、C-6 は、A-2、A-3 が倒壊した方向の TMP3 の EW 方向の波形を用いた。表 3.3-3 に応答点の層間変形角をまとめて示した。A-1 は 1 層  $1/28 \sim 1/30 \text{ rad}$  程度の応答で倒壊しない結果となった。A-2 は 2 層が  $1/25 \text{ rad}$  の層間変形となったが、応答点が A-1 の最大荷重手前の変形でかろうじて得られる結果となり、解析モデルの再現精度を考慮すると倒壊する可能性も考えられる。A-3 は応答点が得られず、倒壊する可能性が高い結果となった。C-6 は  $1/67 \text{ rad}$  程度の変形となった。

表 3.3-3 解析モデルの層間変形まとめ

ID	地震波	層	方向	層間変形角
A-1	KiK-net益城 0414 EW	1	X	1/28
		2	X	1/88
A-1	KiK-net益城 0416 EW	1	X	1/32
		2	X	1/98
A-2	TMP3 EW	1	X	1/32
		2	X	1/25
A-3		1	X	応答点なし
		2	X	応答点なし
C-6		1	X	1/67
		2	X	1/96

(b) 時刻歴応答解析による検討

限界耐力計算に用いた立体骨組による解析モデルを用いて、観測地震波を入力地震動とした時刻歴応答解析を行った。A-1はKiK-net 益城の前震、本震を3方向に連続入力し、A-2、A-3、C-6は大阪大学の観測波 TMP3 を3方向に入力した。表 3.3-4に各解析モデルの各階・各方向の層間変形の最大値を示した。モデル A-1は限界耐力計算の応答とほぼ同じ最大層間変形となった。モデル A-2は倒壊する結果となった。モデル A-3は限界耐力計算と同様に倒壊する結果となった。モデル C-6は限界耐力計算よりも変形が大きい結果となったが、時刻歴応答解析では動的なねじれ変形が大きく生じたためと考えられる。

これらの結果から、壁量では耐震性能にあまり差がなかった木造住宅について、実態の耐震性能を再現した解析モデルを用いた応答解析により、被害状況を再現できることが分かった。

表 3.3-4 解析モデルの層間変形まとめ

ID	地震波	層	方向	層間変形 (mm)	層間変形角	
A-1	KiK-net益城 0414	1	X	98	1/37	
			Y	27	1/135	
		2	X	31	1/118	
			Y	7	1/523	
A-1	KiK-net益城 0416	1	X	147	1/24	
			Y	53	1/69	
		2	X	35	1/104	
			Y	16	1/229	
A-2	TMP3 EW	1	X	2845	1/1 (倒壊)	
			Y	59	1/50	
		2	X	300	1/9	
			Y	65	1/46	
A-3		TMP3 EW	1	X	2896	1/1 (倒壊)
				Y	341	1/9
			2	X	785	1/3
				Y	186	1/16
C-6	TMP3 EW		1	X	123	1/22
				Y	172	1/16
			2	X	53	1/52
				Y	24	1/114

### 3.3.4 まとめ

国総研・建研の現地調査は、多数の木造建築物が倒壊・崩壊等の被害を受けた地域として、主に益城町、西原村及び南阿蘇村で行った。悉皆調査による集計、構造計算等による分析を行った結果を以下にまとめる。

○益城町中心部における悉皆調査によれば、1981年の新耐震基準導入以降の木造住宅に比べて、それ以前（旧耐震基準）の木造住宅の被害率が顕著に大きい（新耐震基準導入以降の倒壊率約6.9%に対し、旧耐震基準の倒壊率は約27.9%）。また、新耐震基準導入以降については、2000年の接合部等の基準の明確化以降の木造住宅の被害率が、それ以前（昭和56年基準）の被害率と比較して小さい（2000年以前の倒壊率：約8.7%、2000年以降の倒壊率：約2.2%）。

○益城町中心部における国総研及び建研の調査（悉皆調査エリア外を含む）によれば、新耐震基準導入以降の木造住宅で倒壊・崩壊が確認された101棟のうち、接合部の状況等が確認できたもの（95棟）で昭和56年基準の木造住宅（88棟）の全てについて、現行基準の接合部仕様を満たしていないことを確認した。また、接合部仕様以外の被害を大きくしたと考えられる要因として、地盤変状2棟、隣棟の衝突2棟、蟻害3棟等がみられた。

○悉皆調査エリアでは、2000年以降の木造住宅323棟のうち7棟（約2.2%）の倒壊が確認され、入手した図面等による原因分析を行った。

- ・ 7棟のうち3棟については、接合部仕様が不十分であることを確認した。1棟については敷地の崩壊、基礎の傾斜等が確認され、地盤変状が被害要因の一つであると考えられる。
- ・ 残り3棟については、図面等に基づく調査からは明確な被害要因が確認できなかった。震源や地盤の特性に起因して局所的に大きな地震動が作用した可能性が考えられる。
- ・ 残り3棟の近隣で観測された地震波を用いた時刻歴応答解析等による分析で、2棟については、変形能力を上回る応答変位が生じた可能性が示された。残り1棟については入力した地震動よりも大きな地震動が作用した可能性が考えられる。

○前震で倒壊・崩壊したと考えられる木造住宅は、悉皆調査エリア内で35棟確認された。その中には旧耐震の木造住宅が30棟あり、2000年以降の木造住宅は存在せず、昭和56年基準の木造住宅が5棟あった。この5棟については、不十分な接合部の仕様、隣接建物の倒壊等を確認した。

○悉皆調査エリア内に住宅性能表示制度を活用した木造住宅は19棟あり、このうち、構造躯体の耐震等級（構造躯体の倒壊等防止）が等級3であった16棟は14棟が無被害、2棟が軽微又は小破の被害、等級2であった2棟は1棟が無被害、1棟が軽微の被害、等級1であった1棟は軽微の被害であった。耐震等級3のものについて大きな損傷が見られず大部分が無被害であったのは、壁量が多く確保されていることなど、より高い耐震性を確保したことによるものと考えられる。

○西原村では、築年数が概ね40年超えの旧耐震基準と推測される木造住宅の倒壊・崩壊が多く確認された。また、傾斜地において、敷地の被害や擁壁の崩壊が多数確認された。

○南阿蘇村では、河陽黒川地区に、2階建ての木造アパートが多く存在し、そのうち7棟の倒壊が確認された。これらの木造アパートのうち、柱脚・柱頭、筋かい端部が確認できたものの多くは接合方法が釘打ち程度の比較的軽微な接合方法であった。

○熊本市内、嘉島町周辺で倒壊・大破の木造住宅が数棟確認された。築年数が概ね40年超えの旧

耐震基準と推定される木造住宅の被害が多かった。

### 参考文献 (3.3 節)

- 5 3.3-1) 平成 28 年(2016 年)熊本地震による建築物等被害第一次調査報告(その 1 4 月 15 日(本震前) 調査結果速報)  
[http://www.kenken.go.jp/japanese/contents/topics/2016/01kumamoto\\_1.pdf](http://www.kenken.go.jp/japanese/contents/topics/2016/01kumamoto_1.pdf)
- 3.3-2) 平成 28 年(2016 年)熊本地震による建築物等被害第一次調査報告(その 2 4 月 16 日(本震後) 調査結果速報)  
<http://www.kenken.go.jp/japanese/contents/topics/2016/02kumamoto.pdf>
- 10 3.3-3) 平成 28 年(2016 年)熊本地震による建築物等被害第二次調査報告(速報)(木造住宅及び鉄筋コンクリート造等建築物を中心とした調査)  
<http://www.kenken.go.jp/japanese/contents/topics/2016/02-kumamoto-1.pdf>
- 3.2-4) 菊池健児, 田中 圭: 益城町の悉皆調査, 2016 年熊本地震災害調査報告会資料, 2016 年度日本建築学会大会(九州) 災害部門 緊急報告会, 2016.8
- 15 3.3-5) 山田真澄、大邑潤三、後藤浩之: 「2016 年熊本地震における前震と本震の益城町の建物被害」 日本地球惑星科学連合 2016 年大会
- 3.3-6) 評価方法基準(平成 13 年国土交通省告示第 1347 号)
- 3.3-7) 木造住宅 倒壊解析ソフトウェア wallstat  
<http://www.nilim.go.jp/lab/idg/nakagawa/wallstat.html>
- 20 3.3-8) 中川貴文「大地震動時における木造軸組構法住宅の倒壊解析手法の開発」 建築研究資料, 第 128 号(2010)  
<http://www.kenken.go.jp/japanese/contents/publications/data/128/>
- 3.3-9) T. Nakagawa, et al., "Collapsing analysis of shake table tests of three story post-and-beam wood houses", 14th World Conference on Timber Engineering, New Zealand (2012)
- 25 3.3-10) 岡崎友也, 五十田博, 小塚直人, 若島嘉朗: 家具類の地震時挙動と有効質量に関する実験, 日本建築学会構造系論文集, 74(646), pp.2199-2208, 2009.12
- 3.3-11) 国立研究開発法人 防災科学技術研究所ホームページ(強震観測網 K-NET、KiK-net)  
<http://www.kyoshin.bosai.go.jp/kyoshin/>
- 30 3.3-12) Yoshiya HATA, Hiroyuki GOTO, and Masayuki YOSHIMI (2016): Preliminary Analysis of Strong Ground Motions in the Heavily Damaged Zone in Mashiki Town, Kumamoto, Japan, during the Main Shock of the 2016 Kumamoto Earthquake (Mw7.0) Observed by a Dense Seismic Array, Seismological Research Letters, in printing.
- 3.3-13) Boore, D. M., C. D. Stephens and W. B. Joyner: Comments on baseline correction of digital strong-motion data: examples from the 1999 Hector Mine, California, Earthquake, Bulletin of the Seismological Society of America, Vol. 92, pp.1543-1560, 2002.5
- 35 3.3-14) 平井敬、福和伸夫「強震記録に基づく東北地方太平洋沖地震による地殻変動分布の算定」 日本建築学会構造系論文集 第 77 巻 第 673 号, pp. 341-350 (2012 年 3 月)
- 40 3.3-15) 日本住宅・木材技術センター「木造軸組工法住宅の限界耐力計算による設計の手引き」 2005 年 3 月

## 3.4 鉄骨造建築物の被害の特徴と要因

### 3.4.1 調査の概要・範囲等

鉄骨造建築物については、国総研・建研が実施した、(1)益城町での小規模鉄骨造建築物、(2) 5 体育館、(3) その他の鉄骨造建築物、に関する被害調査があり、これを被害要因分析の主な検討対象とした。また、文科省や建築学会などの調査内容についても情報収集して参考にした。

国総研・建研が実施した益城町での小規模な鉄骨造建築物の調査は、低層の鉄骨造建築物の倒壊や大破の被害があるとして情報が得られた益城町の一部の区域において調査が行われた。この調査は、県道 28 号沿線を中心として、被害の大小に関わらず、鉄骨造建築物 96 棟を対象に実施 10 したものである。また、益城町では建築学会の悉皆調査が実施されており、国総研・建研の調査の対象となった建築物の多くは、建築学会の悉皆調査の対象となっている。

工場、倉庫、体育館などの鉄骨造大空間構造を代表するものとして、国総研・建研では、体育館の調査を行った。この調査は、熊本県と熊本市からのヒアリング情報に基づいて、体育館の中では比較的被害が大きいと考えられる 15 棟を選定して調査が行われた。これらは大半が熊本市内の体育館である。一方、文科省から委託された建築学会の体育館調査は、熊本県内を中心として 15 大分県でも行われており、その調査結果の情報も収集した。

これらの調査以外に、熊本市内や西原村等で、比較的規模の大きな建築物数棟程度について、外観からの調査が行われた。

### 3.4.2 被害調査の結果及び要因の分析

#### 3.4.2.1 益城町における小規模鉄骨造建築物の調査と被害の特徴（分類）、要因

##### (1) 建築学会の益城町における悉皆調査

益城町で実施された建築学会の悉皆調査区域においては 276 棟の鉄骨造が対象となっており、この建築学会の悉皆調査区域の鉄骨造建築物における、年代ごとの倒壊・崩壊または大破と分類 25 された建築物の被害率は、表 3.4-1 に示すように 1981 以前が約 16%、1981～2000 年が約 10%、2000 年以降は約 5%であった。また、この悉皆調査における 1981 以降の新耐震の建築物 219 棟のうち、倒壊・崩壊は 6 棟であった。

倒壊・崩壊した 6 棟のうち、1 棟は柱梁接合部の不十分な溶接方法による溶接部での破断が被害の要因と考えられるものである。兵庫県南部地震でもこのような溶接部での破断の被害が見られ、1997 年版「建築物の構造規定」<sup>3.4-1)</sup>で、角形鋼管柱を用いた柱梁接合部の適切な溶接方法が示されており、崩壊した建築物はこれが出版される以前の建築物である。また、1 棟は不適切な柱降伏による層崩壊が被害の要因と考えられるものである。1996 年版「冷間成形角形鋼管設計・施工マニュアル」<sup>3.4-2)</sup>では、現在の柱梁耐力比規定の告示の原案となる柱梁耐力比の値が示されており、層崩壊した建築物はこの出版以前の建築物である。

そのほか、3 棟は、昭和 56 年基準（新耐震基準導入以降で、文献 3.4-1) 以前)の建築物であり、隣接建築物や周囲擁壁の衝突や倒壊が要因となり倒壊・崩壊したと考えられる。また、1 棟は、現行基準（2007 年告示改正（柱梁耐力比規定の導入）以降)の建築物であり、基礎下の地盤の崩落により倒壊・崩壊したと考えられるものである。



表 3.4-1 年代毎の倒壊・崩壊、大破の棟数及び被害率（建築学会の悉皆調査）

	S造			計
	旧耐震	新耐震		
	-1981.5	1981.6-2000.5	2000.6-	
総棟数	57	153	66	276
大破の棟数	5 (8.8%)	10 (6.5%)	2 (3.0%)	17 (6.2%)
倒壊・崩壊の棟数	4 (7.0%)	5 (3.3%)	1 (1.5%)	10 (3.6%)
大破と倒壊・崩壊の合計棟数	9 (15.8%)	15 (9.8%)	3 (4.5%)	27 (9.8%)

（２）国総研・建研の益城町における被害調査

5 表 3.4-2 に、国総研・建研で調査した鉄骨造建築物 96 棟について、建設年代毎の倒壊・崩壊、大破の棟数と被害率を示す。倒壊・崩壊または大破の鉄骨造建築物の総数は 16 棟であり、倒壊・崩壊 1 棟、大破 15 棟であった。年代ごとの大破及び倒壊・崩壊と分類された建築物の被害率は、1981 以前が約 25%、1981～2000 年が約 20%、2000 年以降は約 7%で、全体では 17%程度の被害率であった。これらの年代ごとの被害率は、建築学会の悉皆調査区域の鉄骨造建築物の大破以上と分類された建築物の被害率とおおむね同様の傾向となっている。建築学会の悉皆調査の建築物と重複については、国総研・建研で調査した 96 棟のうちの 67 棟が重複し、倒壊・崩壊または大破の 16 棟のうちの 12 棟が重複している。なお、ここでの倒壊・崩壊、大破（中破、小破、軽微、無被害）の判定は、被災度区分判定基準<sup>3.4-3)</sup>に基づいて、調査者が決定したものである。

15 表 3.4-2 年代毎の倒壊・崩壊、大破の棟数及び被害率（国総研・建研の調査）

	S造（混構造を含む。）			建築確認年等不明	計
	旧耐震	新耐震			
	-1981.5	1981.6-2000.5	2000.6-		
総棟数	12	45	29	10	96
大破の棟数	3 (25.0%)	8 (17.8%)	2 (6.9%)	2 (20.0%)	15 (15.6%)
倒壊・崩壊の棟数	0	1 (2.2%)	0	0	1 (1.0%)
大破と倒壊・崩壊の合計棟数	3 (25.0%)	9 (20.0%)	2 (6.9%)	2 (20.0%)	16 (16.7%)

調査した益城町の倒壊・崩壊、大破の被害建築物は、概ね次の特徴に分類される。

- ・特徴 1) 建設年が 1980 年以前と推定されるもの又は古いタイプの部材（日の字柱）を用いたもの
- ・特徴 2) 隣の倒壊した建築物による力の作用、宅地擁壁部分の崩壊等の当該建築物以外の周辺状況による何らかの影響があったと推定されるもの
- ・特徴 3) 溶接部等で破断が生じていたもの

25 倒壊・崩壊又は大破した 16 棟の建築物と特徴 1)、2)、3)との対応関係は表 3.4-3 のとおりである。建築物番号 01 の建築物のみが倒壊・崩壊で、02～16 までの 15 棟は大破の被害である。新

耐震の建築物は合計 11 棟であり、建築物番号の右上の\*印は 1981 年以降の建築物である。これらの 3 つの特徴に対応する被害事例をそれぞれ写真 3.4-1～3.4-3 に示す。

表 3.4-3 倒壊・崩壊又は大破した建築物と特徴 1), 2), 3) との対応関係

建築物番号	01*	02	03	04	05*	06*	07	08	09*	10*	11*	12*	13*	14*	15*	16*
倒壊・崩壊 /大破	倒壊・ 崩壊	大破														
特徴 1)		○	○	○			○	○				○	○			
特徴 2)					○					○	○					○
特徴 3)	○	○				○	○		○	○		○		○		○

5

### 1) 倒壊・崩壊した建築物について

「倒壊・崩壊」の 01 の建築物は、1987 年建設の新耐震であり、特徴 3) に分類される。一般的には完全溶け込み溶接で施工される柱と通しダイアフラムの溶接で、隅肉溶接が行われており、その溶接部で破断が生じて倒壊したと考えられるものである。

10

### 2) 大破の建築物について

「大破」の 02～16 建築物のうち、新耐震は 10 棟である。10 棟のうち 2 棟は特徴 1) に分類され、日の字柱が用いられている建築物であり、現在一般的に用いられている角形鋼管柱と H 形鋼梁の接合部に比べれば、塑性変形性能が劣っていると考えられる。また、4 棟は特徴 2) であり、隣接建築物や地盤崩壊が影響したと考えられる。また、特徴 3) に分類されるものは 6 棟であるが、このうち隅肉溶接等の適切でないと思われる溶接方法が原因と考えられるものは 4 棟であった。

15



写真 3.4-1 特徴 1) の事例

20



写真 3.4-2 特徴 2) の事例



写真 3.4-3 特徴 3) の事例

### 5 3.4.2.2 体育館の被害の特徴（分類）と要因

工場、倉庫、体育館などの鉄骨造大空間構造を代表するものとして、体育館の被害調査を行った。熊本県と熊本市からのヒアリング情報に基づいて、体育館の中では比較的被害が大きいと考えられる 15 棟を選定して調査を行った。これらは大半が熊本市内の体育館である。15 棟のうち、新耐震は 5 棟、耐震改修済みが 8 棟、耐震診断の結果、補強不要と判断されたものが 2 棟であった。また、これらの 15 棟の体育館の調査以外に、国総研・建研では、別途、自治体の体育館の非構造部材の調査も行っており、その情報も活用した。一方、文科省から委託された建築学会の体育館調査<sup>3.4-4)</sup>は、熊本県内を中心として大分県でも行われ、その調査結果の情報も収集した。

これらの 15 棟の体育館の調査と建築学会の体育館調査<sup>3.4-4)</sup>において、倒壊、崩壊した体育館は

無く、倒壊・崩壊の防止などの構造上の安全性は適切に確保されていた。15 棟の体育館の調査結果等から、被害部位ごとの特徴と要因は、以下のようにまとめられる。

- 5 1) 鉛直ブレースの被害：耐震改修により取り替えられた平鋼ブレースで、軸部の明瞭な降伏が観察されない状態で、ボルト孔欠損部での破断の被害が見られた。一方で、新耐震の建築物の丸鋼ターンバックル付きブレースで、ブレースの大きなたわみ、変形、伸びが観察されたが接合部等で破断していなかった（写真 3.4-4）。ブレース軸部の明瞭な降伏が見られない被害は、これまでの地震被害でも見られており、実際の建築物のブレース材の降伏比が、設計での想定よりも高いことなどが要因と考えられる<sup>3.4-5)</sup>。
- 10 2) 屋根トラスの被害：RC 架構に立体トラスの屋根が接続された 2 棟の体育館で、立体トラスを構成する部材のたわみ、破断、座屈、落下等の被害が見られた（写真 3.4-5）。このようなトラス部材の落下は、これまでの地震ではほとんど見られなかったものである。この被害要因については、現時点で必ずしも特定できていないため、今後、引き続き検討が必要と考えられる。
- 15 3) 屋根支承部の被害：RC 架構とトラスの屋根の接続部（支承部）で、コンクリートの側方破壊とコンクリート片の落下、ひび割れが見られた。また、国総研・建研が別途行った自治体の体育館の調査では、支承部アンカーボルトの破断が観察されている。一方、建築学会の調査から、露出柱脚でもコンクリートの側方破壊の被害<sup>3.4-4)</sup>が見られたことが報告されている。これらの被害は、2011 年東北地方太平洋沖地震でも見られたもの<sup>3.4-6)</sup>であり、コンクリートの側方破壊はアンカーボルトからコンクリート縁までの縁端距離の不足が要因と考えられ、アンカーボルトの破断は支承部の設計せん断力が要因となっている可能性が考えられる。
- 20 4) 屋根面水平ブレースの被害：屋根面水平ブレースのボルト等の破断の被害が数棟で観察された（これらの中には、ボルト等の破断が生じていたため、調査時には 20 か所以上の屋根面水平ブレースが取り外されていたものもあった）。これらのブレースは、耐震改修以前のブレースがそのまま残されており、それが破断したものである。

25 なお、1)～3)で述べた構造耐力上主要な部分に生じた被害や、4)で述べた屋根面水平ブレースの被害、壁の脱落など非構造部材の被害などにより、一部の体育館が避難所として使用できなかった（応急措置の後、使用を再開したものを含む）ことが報告されている<sup>3.4-7)</sup>。



写真 3.4-4 鉛直ブレースの被害

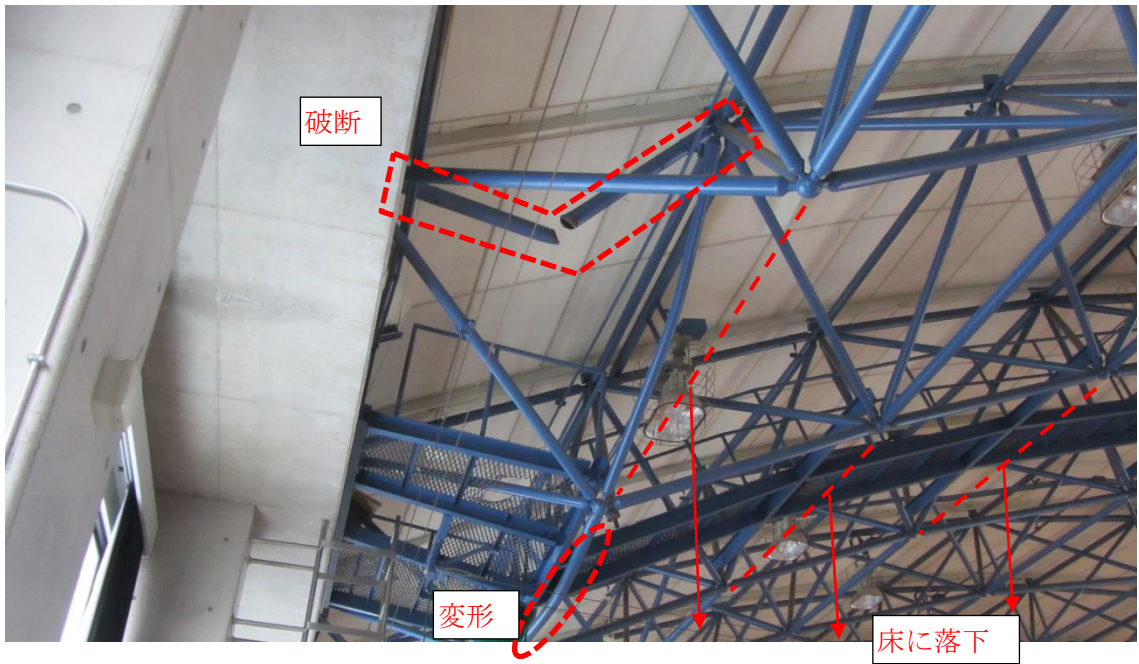


写真 3. 4-5 体育館の立体トラスの被害状況



写真 3. 4-6 屋根支承部のコンクリート側方破壊の被害



写真 3. 4-7 屋根面水平ブレースのボルト破断

### 3.4.2.3 その他の建築物の被害

国総研・建研の調査及び建築学会の調査<sup>3,4-4)</sup>では、熊本市内等の建築物で構造耐力上主要な部分での構造的な被害が報告されている。それらをまとめると次のとおりである。

- 5     ・ 柱、梁部材の塑性化、局部座屈、破断
- ・ ブレースの座屈、接合部の変形、破断
- ・ 柱脚コンクリートの側方破壊、アンカーボルトの伸び、破断

国総研・建研の熊本市内と西原村での被害調査では、益城町で見られたような柱の溶接部等で破断が生じている建築物はなかった。

### 10 3.4.3 まとめ

国総研・建研の被害調査は、1) 益城町での小規模鉄骨造、2) 体育館、3) その他の鉄骨造建築物、に区分して実施した。1) の調査結果の多くは、建築学会の悉皆調査の対象となっている。以下に、これらの調査結果に基づく鉄骨造建築物の被害の概要と要因をまとめて示す。

15 ○ 益城町における建築学会の悉皆調査（対象棟数 276 棟）において、新耐震基準導入以降の鉄骨造建築物（219 棟）のうち、倒壊・崩壊が確認されたものが 6 棟あった。

- 20     ・ これらのうち、1 棟は柱梁接合部の不十分な溶接方法<sup>\*1</sup>、1 棟は不適切な柱降伏による層崩壊<sup>\*2</sup>が被害の要因と考えられる。

      \* 1：兵庫県南部地震でこの被害が見られたため、1997 年版「建築物の構造規定」で、角形鋼管柱を用いた柱梁接合部の適切な溶接方法が示された。溶接が原因で崩壊した建築物は、これが出版される以前の建築物である

      \* 2：1996 年版「冷間成形角形鋼管設計・施工マニュアル」で、現在の告示の原案となる柱梁耐力比の値が示された。層崩壊した建築物はこの出版以前の建築物である。

- 25     ・ そのほか、3 棟（昭和 56 年基準<sup>\*3</sup>）については、隣接建築物や周囲擁壁の衝突や倒壊が要因となり倒壊・崩壊したと考えられ、また、1 棟（現行基準<sup>\*4</sup>）は建築物の基礎下の地盤の崩落により倒壊・崩壊したと考えられる。

      \* 3：新耐震基準導入以降で、1997 年版「建築物の構造規定」以前

      \* 4：2007 年告示改正（柱梁耐力比規定の導入（平 19 国交告第 594 号など））以降

30 ○ 国総研・建研の益城町における小規模鉄骨造の被害調査では、対象となった 96 棟に対して、倒壊 1 棟、大破 15 棟が確認された。これらの 96 棟のうち、67 棟は建築学会の悉皆調査の建築物と重複し、倒壊、大破の 16 棟のうちの 12 棟が重複している。これらの 16 棟の建築物では次の 3 つのいずれかまたは複数の被害要因が見られた。

- 1) 旧耐震基準またはその当時用いられていた古いタイプの部材（日の字柱）の使用
- 2) 隣接建築物や周囲擁壁の倒壊等の外的な要因
- 3) 溶接部等での破断

- 35     ・ 倒壊した 1 棟は、昭和 56 年基準の建築物であり、被害要因 3) に該当するものであった。

      ・ 大破した 15 棟は、旧耐震基準 3 棟、新耐震基準導入以降 10 棟、年代不明 2 棟であった。新耐震基準導入以降の 10 棟のうち、被害要因 3) の溶接部での破断が要因となった建築物は 4 棟あり、それらはすべて昭和 56 年基準であった。

40 ○ 体育館の調査は、工場、倉庫などの鉄骨造大空間構造を代表するものとして行った。体育館の中では比較的被害が大きかった熊本市等の 15 棟（新耐震基準導入以降 5 棟、耐震改修済み 8

棟、耐震診断結果が改修不要 2 棟) の調査を行った。なお、それに加えて、国総研・建研の自治体の体育館の調査、文科省から学校体育館の調査、についての情報を収集した。

- 5 • 被害としては、鉛直ブレースにおけるボルト孔欠損部の破断、立体トラスにおける部材の落下、屋根支承部におけるコンクリートの側方破壊とアンカーボルトの破断、屋根面水平  
ブレースにおける接合部ボルトの破断等、が見られた。また、文科省の調査では、露出柱  
脚におけるコンクリートの側方破壊が見られた。
  - 10 • 鉛直ブレースについては実建築物のブレース材の降伏比の影響、屋根支承部と露出柱脚の  
コンクリートの側方破壊についてはアンカーボルトの縁端距離の不足、屋根支承部アンカ  
ーボルト破断については支承部の設計せん断力、屋根面水平ブレースについては耐震改修  
以前のブレースの存置が、その被害要因と考えられる。立体トラスについては現時点で原  
因が明確になっていない。
  - 15 • 体育館で倒壊・崩壊したものは無かったが、構造耐力上主要な部分の被害や屋根面水平ブ  
レースの被害、壁の脱落など非構造部材の被害などにより、一部の体育館が避難所として  
継続的に使用できなかった（応急措置の後、使用を再開したものを含む）ことが報告され  
ている。
- 国総研・建研の調査や建築学会の調査では、熊本市内等の建築物で構造耐力上主要な部分の被害が報告されている。ただし、国総研・建研の熊本市内と西原村での被害調査では、益城町で見られたような柱の溶接部等で破断が生じている建築物はなかった。

## 20 参考文献

- 3.4-1) 1997 年版 建築物の構造規定、日本建築センター、1997.12
- 3.4-2) 冷間成形角形鋼管設計・施工マニュアル、日本建築センター、1996.9
- 3.4-3) 2015 年改訂版 震災建築物の被災度区分判定基準および復旧技術指針（鉄骨造建築物）、日本建築防災協会、2016 年 3 月
- 25 3.4-4) 松尾真太郎、伊山潤、岩田善裕：鉄骨造建築物の被害、2016 年熊本地震災害調査報告、2016 年度日本建築学会大会災害部門緊急報告会資料、pp.47-62、2016.8
- 3.4-5) 山田哲、伊山潤、島田侑子、松本由香、長谷川隆、清家剛、中野達也、吉敷祥一：東北地方太平洋沖地震および余震による学校体育館の構造被害、日本建築学会技術報告集 第 44 号、pp.133-138、2014 年 2 月
- 30 3.4-6) 平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震被害調査報告、国総研資料第 674 号、建築研究資料第 136 号、2012 年 3 月
- 3.4-7) 「熊本地震の被害を踏まえた学校施設の整備について」緊急提言、熊本地震の被害を踏まえた学校施設の整備に関する検討会、平成 28 年 7 月  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shisetu/043/gaiyou/1374803.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/043/gaiyou/1374803.htm)

## 3.5 鉄筋コンクリート造等建築物の被害の特徴と要因

### 3.5.1 調査の概要・範囲等

鉄筋コンクリート造及び鉄骨鉄筋コンクリート造については、国総研・建研が地方自治体やマ  
5 スコミによって収集された被害情報に基づき、熊本市、宇土市、宇城市、八代市、人吉市、益城  
町、菊陽町、大津町、御船町、氷川町、嘉島町、西原村、南阿蘇村の地域で、建築物の倒壊や構  
造部材、非構造部材の被害を受けた建築物 84 棟について調査を行っている<sup>3.5-1, 3.5-2 等</sup>。国総研・  
建研以外の機関でも、熊本市や益城町を中心に同様の被害を受けた鉄筋コンクリート造等建築物  
10 の調査が実施されており、国総研・建研の調査と重複を除き、9 棟の鉄筋コンクリート造（以下  
RC 造）の被害を把握している。本委員会では、これらの調査を対象に検討を行った。

### 3.5.2 調査結果の概要と被害の特徴

被害調査の結果より、以下の被害パターンに分類される。

(1) 1981 年以降に設計された建築物：

- 15
- ・下階壁抜け（以下、ピロティ）構造の曲げ・引張応力による柱の破壊：1995 年以降に設計さ  
れたピロティ柱に主筋の座屈や破断（写真 3.5-1、2）によって大破に至る事例が確認された。  
その中には溶接した鉄筋が破断しているものも含まれる。
  - ・ピロティ構造のせん断・付着割裂による破壊（いずれも 1995 年以前の建築物）：柱にせん断  
破壊や付着割裂破壊といった脆性的な破壊（写真 3.5-3）が確認された。
  - 20
  - ・梁端部損傷に基づく梁のたわみ：梁端部の曲げ破壊に基づく梁およびスラブのたわみ（写真  
3.5-4）が確認された。
  - ・損傷集中した崩壊形：3、4 層に損傷が集中し、当該層に大きな残留変形（写真 3.5-5）が生  
じた。また、渡り廊下の 1 階柱頭柱脚部が損傷し、当該層に損傷が集中して大破と判定され  
る事例が確認された。
  - 25
  - ・上部構造物の傾斜被害：基礎又は地盤の損傷により上部構造物が傾斜または損傷していると  
思われる事例が確認された。
  - ・RC 造非構造部材の破壊：共同住宅における RC 造非構造壁（写真 3.5-6）やエキスパンション  
ジョイントおよびその周辺部の大きな損傷によって、地震後の継続使用に影響を与えた事例  
が確認された。

30 (2) 1981 年以前に設計された建築物：

- ・耐震補強済みで構造部材の損傷度が大きい建築物：耐震補強された RC 造構造部材の被害は、  
耐震補強された耐震壁の側柱のせん断破壊や補強された建築物における耐震壁の顕著なせん  
断ひび割れ、コンクリート杭（写真 3.5-7）の損傷が挙げられる。東北地方太平洋沖地震に  
おいても補強された RC 造建築物の構造部材の被害が確認されているが、同じ被害パターンで  
35 あるかは今後検証が必要である。
- ・耐震診断済みで構造部材の損傷度が大きい建築物：渡り廊下で 1 階柱頭柱脚部の大きな損傷  
により過大な残留変形（写真 3.5-8）が確認された。
- ・倒壊および崩壊した建築物：柱や柱梁接合部の大きな損傷により局部崩壊した事例（写真 3.5-9）  
や 1 層崩壊した事例が挙げられる。後者は兵庫県南部地震や東北地方太平洋沖地震におい  
て  
40 も同様の被害が確認されている。





写真 3.5-1 主筋が座屈・破断した柱頭部



写真 3.5-2 溶接部が破断した柱主筋



写真 3.5-3 付着割裂破壊した柱



写真 3.5-4 梁端部損傷による梁・スラブのたわみ



写真3.5-5 3, 4層の損傷集中による大きな残留変形



写真 3.5-6 大きく損傷したベランダ側の非構造壁



写真 3.5-7 コンクリート杭端部の損傷



写真 3.5-8 1階柱頭柱脚部の損傷による大きな残留変形

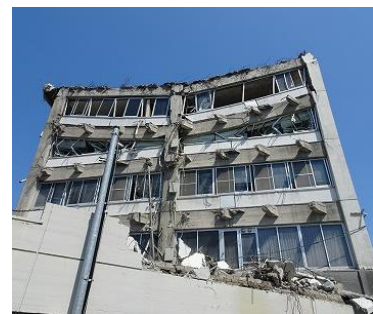


写真 3.5-9 柱梁接合部破壊による局部崩壊

### 3.5.3 1981年以降に設計された建築物の被害要因分析

以下に1981年以降に設計され、特に上部構造物に大きな被害を呈した建築物9棟（4棟がピロティ構造、1棟が4本柱からなる建築物、4棟が渡り廊下）を対象に被害分析を行った。何れも、被災度区分判定基準<sup>3.5-3)</sup>に基づく被災度は大破と判定されたものである。ここでは同基準に基づく各構造部材の損傷度と設計時に想定された部材の破壊モードや建築物の崩壊形等とを比較することにより、被害分析を行うとともに今後の課題を纏める。

#### 1) 柱主筋が座屈および破断した事例（写真3.5-1）

本被害は、1階が純ピロティ構造である4階建てRC造共同住宅において、1階柱主筋の座屈や破断が生じた事例である。被災度区分判定基準に従い、部材損傷度を判定した結果は図3.5-1に示す。

なお、スパンの短いX2-X3区間、X4-X5区間、X7-X8区間およびX9-X10区間は桁行方向に梁はなく、スラブのみで接続（図3.5-1）している。構造計算上は、これらの区間は両端ピンの梁で接続するようにモデル化され、4本または6本の柱で構成するゾーニングがなされている。

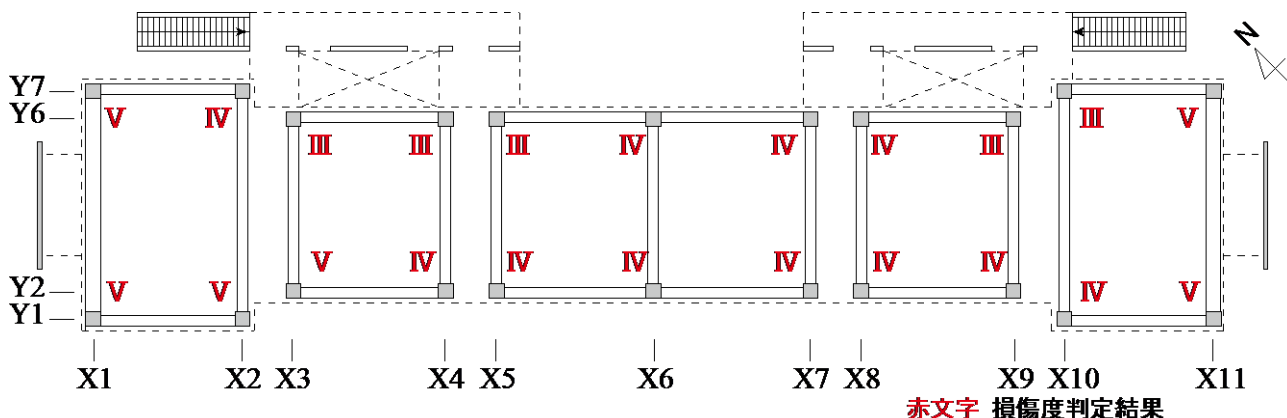


図3.5-1 2階梁伏図および柱の損傷度判定結果

X1、X11構面の2階以上は開口付き壁（柱際に部分スリットあり）であるが、純ラーメン架構としてモデル化されており、X2およびX10構面の2階以上の壁（戸境壁）は耐力壁としてモデル化されている（図3.5-2）。X1およびX11構面の部分スリット付き壁が水平力に抵抗した場合、解析モデルに比べて1階に作用するせん断力が大きくなり変動軸力も顕著になることから、柱主筋の座屈や破断が生じたものと考えられる。このような壁のモデル化に起因する被害は、阪神・淡路大震災においても確認されている。また、構造計算書では、崩壊形は1層の層崩壊形となっている。

上記の検討結果より、部分スリットを有する壁部材のモデル化と1階の部分崩壊形の計画が、被害の原因であると考えられる。なお、これらについては、1997年の建築物の構造規定<sup>3.5-4)</sup>において、部分スリットを有する壁はその影響を考慮することと、ピロティ建築物のピロティ階で層崩壊しないような架構形式を用いることが留意点として示されている。

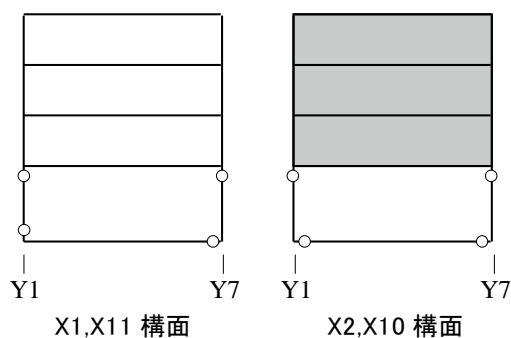


図 3.5-2 保有水平耐力時ヒンジ図（張間方向）

2) 柱主筋の溶接継手部が破断した事例（写真 3.5-2）

5 本被害は、ピロティ構造である 9 階建て RC 造共同住宅の、1 階の 10 本の柱のうち 6 本に主筋溶接継手部の破断が確認された事例である。その原因は、溶接の品質が十分でなく、継手部の引張性能が継手を行う鉄筋の性能よりも劣ったことにあると考えられる。

3) 脆性部材柱を有するピロティ建築物の事例（写真 3.5-3、4）

10 本被害は、ピロティ建築物の 1 階の柱が付着割裂破壊やせん断破壊などの脆性破壊を生じたものである。

15 このような被害事例は、阪神・淡路大震災においても確認されており、1997 年の建築物の構造規定<sup>3.5-4</sup>において、ピロティ柱の設計は柱上下端で曲げ降伏となるように計画し、その際の軸力は崩壊形形成時のものを用いることと、せん断設計には崩壊形形成までに生じる最大のせん断力を用いること、が示されている。引き続き被害要因の分析を行う必要があるが、本事例も、兵庫県南部地震の際に見られた被害と同様な原因であったと推察される。

4) 特定層に損傷集中した事例（写真 3.5-5）

20 本建築物は、1998 年建設の RC 造 5 階建ての建築物であり、3～5 階の柱は 4 本で構成されている。前震では 3 階の柱脚に、本震で柱梁接合部を含む 3、4 階の部材に損傷が集中し、過大な残留変形が見られた。残留変形の様子から 3～4 階で部分崩壊形が形成されたと考えられ、4 階の柱頭部および柱梁接合部にはコンクリートの剥落が見られた。

25 構造計算書によれば、本震時に大変形が生じた東西方向の 3～5 階における  $D_s$  はいずれも 0.30 である。図 3.5-5(b)、(c)に、本震により大きな残留変形が生じた東西方向西側に水平加力を行った場合の保有水平耐力時の各構面の塑性ヒンジの位置を示す。図から明らかなように、いずれの構面でも 3 階における層崩壊形もしくは 3、4 階の 2 層にまたがる部分崩壊形の形成が想定されており実被害と整合している。ただし、実際には柱梁接合部にも損傷が確認されている。

上記の検討結果より、本件については部分崩壊層の水平耐力が不足した可能性が考えられるが、柱梁接合部の損傷も含めて、引き続き被害要因の分析を行う必要がある。

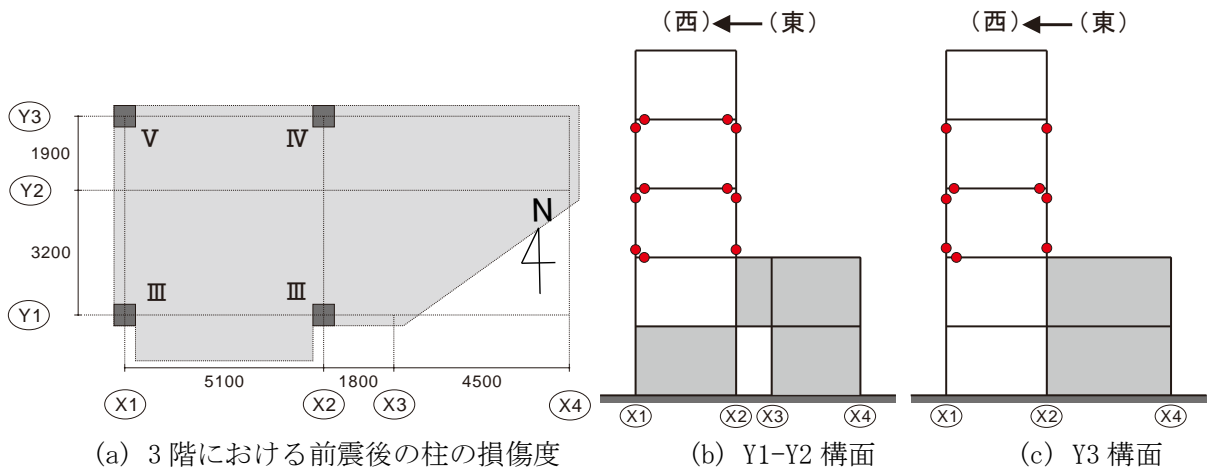


図 3.5-5 被災度区分判定の結果と構造計算で想定された保有水平耐力計算時のヒンジ状態  
(図中の赤丸は塑性ヒンジの形成箇所を示す)

5

#### 5) 損傷集中して大破となった渡り廊下の事例

RC造2階建ての渡り廊下で、1階柱の柱頭および柱脚に損傷が生じ、被災度が「大破」と判定されたものが確認されている。設計上は全体崩壊形を計画した建築物であり、実被害は設計時の想定とは異なる損傷状態を示した。

- 10 本事例は、計算と異なる損傷を生じたことから、設計上想定していた崩壊過程における変形モードが確保されなかったことに原因があったものと考えられる。なお、その設計時の想定とは異なる損傷状態を呈した原因については、引き続き検討を行う必要がある。

#### 3.5.4 まとめ

- 15 国総研・建研が、地方自治体によって収集された被害情報やマスコミ情報に基づき、熊本市、宇土市、宇城市、八代市、人吉市、益城町、菊陽町、大津町、御船町、氷川町、嘉島町、西原村、南阿蘇村の地域で、建築物の倒壊・崩壊や構造部材、非構造部材に被害を受けた建築物に対して実施した調査、建築学会が益城町で実施した悉皆調査並びに建築学会等のその他の機関で把握している調査に基づく要因分析を行った。得られた知見を以下に示す。
- 20 ○ 鉄筋コンクリート造等建築物で倒壊・崩壊が確認された 10 棟は、すべて旧耐震基準の建築物である。すなわち、新耐震基準導入以降の鉄筋コンクリート造等建築物で倒壊・崩壊等が確認されたものは報告されていない。
- 新耐震基準導入以降の鉄筋コンクリート造等建築物で倒壊・崩壊に至らなかったものの上部構造が大破と判定されたものが 9 棟あった。
- 25 ・そのうち 4 棟については下階壁抜け柱が多く存在するピロティ構造であり、鉄筋の溶接継手の品質 (1 棟)、部分スリットを有する壁のモデル化 (1 棟)、および、せん断設計 (2 棟) に原因があったと考えられるものであった。なお、壁のモデル化とせん断設計については、阪神・淡路大震災におけるピロティ建築物の被害を受けて 1997 年に運用の強化がなされている 3.5-4)。
- 30 ・その他の 5 棟は、柱および柱梁接合部に大きな損傷が生じ一部の層に大きな残留変位が生じた 4 本柱からなる建築物 1 棟および 1 層に損傷が集中して大破と判定された渡り廊下 4 棟であった。前者は部分崩壊形となった層の保有水平耐力が不足したこと、後者については想定

する崩壊過程における変形モードと異なったことが要因と考えられるが、引き続き検討を要する。

- 耐震改修済みの鉄筋コンクリート造等建築物で、構造部材の損傷度の大きいもの（未補強箇所の部材のせん断破壊など）があったが、倒壊・崩壊等を生じたものは報告されていない。なお、  
5 耐震診断が行われた渡り廊下で1層に1/5の残留変形角が生じたものが確認された。
- スリットを有しないRC造方立て壁・袖壁やエキスパンションジョイントなど構造耐力上主要な部分として扱われていない部材の被害によって継続使用に影響を与えた事例が報告されている。また、上部構造に著しい被害がなかったものの建築物の傾斜によって継続使用が困難になった事例が確認されている。後者については、コンクリート杭の損傷など地下部分に被害の可能性が考えられる。  
10

### 参考文献（3.5節）

- 3.5-1) 平成28年(2016年)熊本地震による建築物等被害第二次調査報告(速報), 国立研究開発法人建築研究所HP(<http://www.kenken.go.jp/japanese/contents/topics/2016/02-kumamoto-1.pdf>)  
15
- 3.5-2) 平成28年(2016年)熊本地震による建築物等被害第五次調査報告(速報), 国立研究開発法人建築研究所HP(<http://www.kenken.go.jp/japanese/contents/topics/2016/05-kumamoto.pdf>)
- 3.5-3) 震災建築物の被災度区分判定基準及び復旧技術指針改訂委員会: 震災建築物の被災度区分判定基準および復旧技術指針, (一財)日本建築防災協会, 2016.3  
20
- 3.5-4) 建設省住宅局建築指導課・日本建築主事会議監修、建設省建築研究所協力, (財)日本建築センター発行, 建築物の構造規定 -建築基準法施行令第3章の解説と運用-1997年版, 1997.  
12

### 3.6 基礎・地盤の被害の特徴と要因

#### 3.6.1 調査の概要・範囲等

基礎・地盤に関する調査として、国総研・建研で(1)益城町の被害調査、(2)熊本市南区の液状化被害の目視踏査を実施<sup>3.6-1)</sup>しており、その調査結果に基づく分析を実施した。(1)益城町の被害調査について、益城町中心部では、県道28号からの南北方向の距離に応じて、建築物及び地盤の被害程度に差異が見られるとの報告があった。そこで、被害状況を把握するために、益城町内を南北方向に通る2本の道路を抽出し(安永地区:A通り、宮園地区:B通り)、道路沿いの建築物に対して、基礎・地盤の地震被害に重点を置いた被害調査(以下、通り悉皆調査と記す)を実施した。また、(2)液状化被害の目視踏査については、地震発生直後に報道された情報や東京電機大学地震・地盤工学研究室による被害調査報告<sup>3.6-2)</sup>に基づき、液状化被害が報告された熊本市南区近見地区及び刈草地区について現地調査を実施した。

#### 3.6.2 益城町の調査(通り悉皆調査)

##### (1) 調査範囲と調査方法

図3.6-1に、益城町で調査対象とした2本の道路の位置を示す。図中のコンターは標高を示しており、暖色→寒色で標高が高くなっている。国総研・建研が実施した益城町の調査で対象としたA通り78棟、B通り67棟のうち、日本建築学会で実施された悉皆調査(3.2節)(以降、学会悉皆調査と記す)と重複している建物はA通り29棟、B通り65棟となっている。通り悉皆調査は表3.6-1に示すクライテリアで実施した。建築年代および構造種別の特定は外観目視を基本とし、必要に応じて学会悉皆調査データを参照した。具体的な被害判定は外観目視により実施しており、上部構造の被災度は文献3.6-3)の方法に基づいて実施し、倒壊と判断される建築物以外の上部構造の被災度を主として外観から大破、中破、軽微・無被害の3区分により判定した。また、基礎・地盤の被災度は地盤変状の有無とコンクリート製基礎の損傷度により判断した。

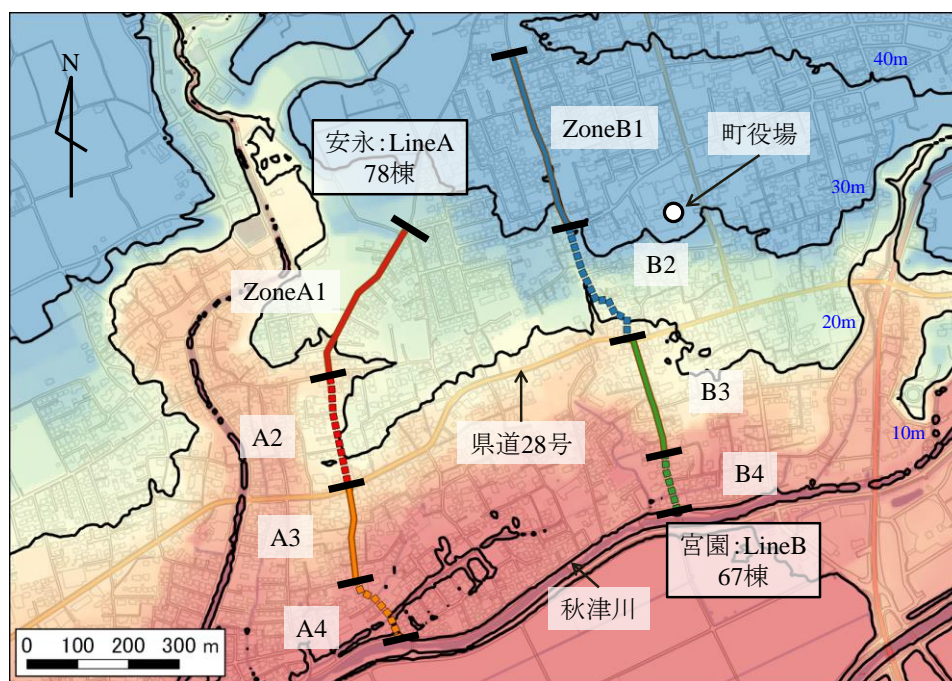


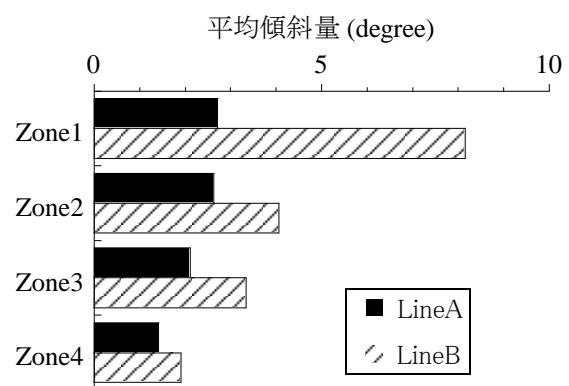
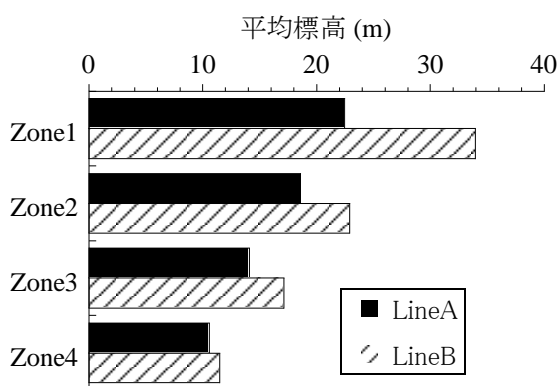
図3.6-1 調査対象地域と調査対象とした道路(背景地図:国土地理院基盤地図情報を使用)

表 3.6-1 通り悉皆調査の被災度判定のクライテリアと方法

項目	クライテリア	方法
建築年	—	外観目視 学会悉皆調査データ
用途, 構造種別 階数, 基礎形式	—	外観目視 ヒアリング 学会悉皆調査データ
沈下, 傾斜	無 / 有	外観目視 傾斜計等
上部構造の被災度	岡田・高井(1999) <sup>3.6-3</sup>	外観目視
基礎の被災度	無 / 軽微 / 部分的 / 顕著 / 不明	外観目視
地盤変状の程度	無 / 軽微 / 顕著 / 不明	外観目視

(2) 被害の概要

5 図 3.6-1 に示すように、調査対象とした益城町は南向きの緩斜面に位置しており、調査対象の  
2つの道路も南向きに傾斜している。図 3.6-2 及び図 3.6-3 に調査対象地域の平均標高と平均傾  
斜量を示す。平均標高は調査対象建物の敷地内の標高を国土地理院発行の基盤地図情報数値標高  
モデル (5m メッシュ) より読み取り平均値として算出し、平均傾斜量は敷地内の数値標高を最小  
10 二乗法で直線近似し、その傾きより算出した。平均標高は LineA、LineB 共に Zone1 > Zone2 > Zone3  
> Zone4 となっており、10~30m 程度の標高となっている。また、平均傾斜量についても Zone1 >  
Zone2 > Zone3 > Zone4 となっており、LineB の県道 28 号線北側 (ZoneB1) では傾斜量が大きいため、  
高い盛土擁壁が多くみられる。



15 図 3.6-2 調査対象地域の平均標高

図 3.6-3 調査対象地域の平均傾斜量

15 県道 28 号線北側の ZoneB1 の被害事例として、盛土擁壁の被害を写真 3.6-1 に示す。図 3.6-3  
に示したように、ZoneB1 では平均傾斜量が他の地域に比べて大きく、盛土擁壁上に建物が立地し  
ているケースが多い。ZoneB1 では南に位置する建築物ほど盛土擁壁の被害が大きくなる傾向が認  
20 められた。

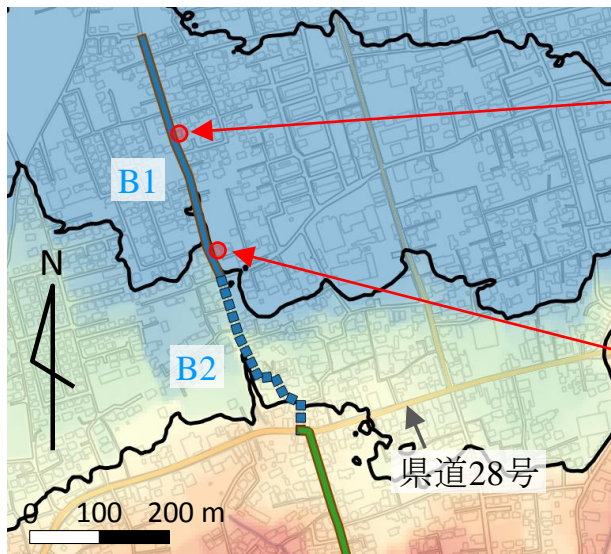


写真 3.6-1 県道 28 号線北側の ZoneB1 で見られた盛土擁壁の被害事例

5 県道 28 号線南側の地域では、甚大な被害を受けている建築物が多く見られ、加えて損傷を受けた基礎や地盤変状も多数認められた。地盤の地震時挙動が建築物の被害に及ぼす影響として、静的な地盤変状と動的な地盤震動が考えられるが、ここでは静的な地盤変状に着目し、建築物の被害と基礎・地盤の被害の関係について分析する。益城町内で確認された大破・倒壊に相当する被害を受けた建築物において、確認できた基礎・地盤関連の被害は、次の 3 つのパターンに分類できる。

- 10
- 1) 建築物が倒壊したことにより基礎もしくは敷地地盤全体の状況確認が困難なもの（写真 3.6-2）
  - 2) 地盤変状が認められ、基礎に損傷が著しいもの（写真 3.6-3、写真 3.6-4）
  - 3) 地盤変状が認められ、基礎の損傷が軽微・無損傷なもの（写真 3.6-5）

15 地盤変状が建築物被害に影響を及ぼすメカニズムを構造力学的な観点から考えると、地盤変状が生じることによって基礎が破壊し、1 階柱脚に強制変位が作用することによって、建築物に構造的被害が生じるメカニズムが考えられる。このとき、基礎固定条件で上部構造が崩壊状態となるような部材変形角を 1 階柱脚の強制変位によって生じさせるためには相当量の変位量が要求され、基礎にはパターン 2) の写真 3.6-3 で見られる程度以上の破壊状態が要求されることになる。しかし、このような基礎被害は調査の中ではほとんど認められなかった。よって、パターン 1) の

20 ような倒壊事例に対して基礎の状態を十分に確認できていないため、現時点で断定することはできないが、建築物に甚大な被害を生じさせた外力要因として、地盤変状の影響は小さいと思われる。今後、地盤調査等の実施により、地盤震動が地表面地震動の場所による差異に及ぼす影響を解析的に検討するとともに、地震動の違いが建築物の応答とそれに伴う被害発生に及ぼす影響について分析し、局所的に甚大な建築物被害をもたらした要因を明らかにすることが重要と考えられる。

25





写真 3.6-2 建築物の倒壊により基礎もしくは敷地地盤全体の状況確認が困難な事例（2例）



写真 3.6-3 地盤変状が認められ、基礎に損傷が著しい事例 1



5

写真 3.6-4 地盤変状が認められ、基礎に損傷が著しい事例 2



写真 3.6-5 地盤変状が認められるが、基礎の損傷が軽微・無損傷の事例

### (3) 建築物と基礎・地盤の被害率

建築物の被害と基礎・地盤の被害の関係について、通り悉皆調査結果より得られた被害率より分析する。図 3.6-4 に対象とした建築物の母数を地図上に示す。ここでは、1981 年以降の木造建築物を対象として、建築物大破以上の被害率、基礎被害顕著の割合、地盤変状ありの割合をそれぞれ算出する。図 3.6-5 に建築物大破以上に対する基礎被害顕著の割合の関係を示す。建築物大破以上の割合が増大するほど基礎被害顕著の割合も増大するが、同図のほとんどのプロットは 45° の直線、すなわち建築物大破以上＝基礎被害顕著より下側となっており、基礎被害顕著の割合は建築物大破以上の割合よりも小さくなっている。すなわち、被害率の観点からも基礎の損傷が建築物の被害に及ぼした影響は大きくないと言える。図 3.6-6 に建築物大破以上に対する地盤変状ありの割合の関係を示す。基礎被害顕著の場合と同様に、建築物大破以上の割合が増大するほど基礎被害顕著の割合も増大するが、その増加量は小さい。また、建物大破以上の割合が小さい場合でも地盤変状ありの割合は約 40%以上となっている。すなわち、建築物の被害に関係なく、地盤変状が現れていることが分かる。図 3.6-7 に地盤変状ありに対する基礎被害顕著の割合の関係を示す。同図の場合、全プロットが 45° の直線、すなわち地盤変状あり＝基礎被害顕著より下側となっており、基礎被害顕著の割合は地盤変状ありの割合より小さくなっている。(2) で示したように、静的問題において地盤変状が建築物被害に影響を及ぼす場合のメカニズムは、地盤変状の発生→基礎の損傷→建築物の損傷であると仮定すると、同図は地盤変状が生じても基礎の損傷が生じにくいことを示していると考えられる。図 3.6-8 に平均傾斜量に対する地盤変状ありの割合の関係を示す。同図では平均傾斜量と地盤変状ありの割合の間に明確な相関関係は見られない。また、平均傾斜量の大きい Zone B1 での地盤変状ありの割合は、他の Zone に比べて小さくなっている。

以上、基礎被害顕著の割合が建築物大破以上や地盤変状ありの割合よりも小さいこと、建築物大破以上の割合が小さくても地盤変状ありの割合が約 40%以上あることから、通り悉皆調査の結果は、(2) で示した「建築物に甚大な被害を生じさせた外力要因として地盤変状の影響は小さい」という結論を支持していると考えられる。

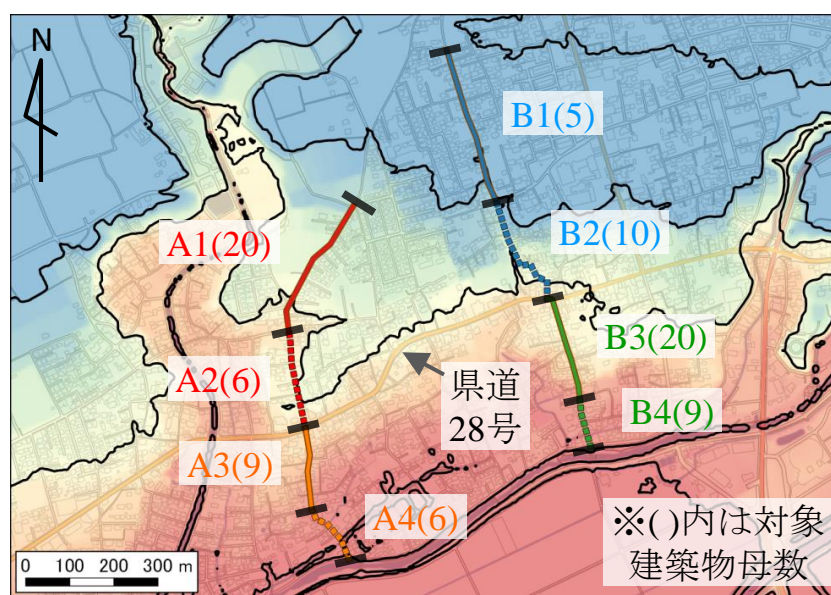


図 3.6-4 Zone 毎の対象建築物母数 (1981 年以降の木造建築物)

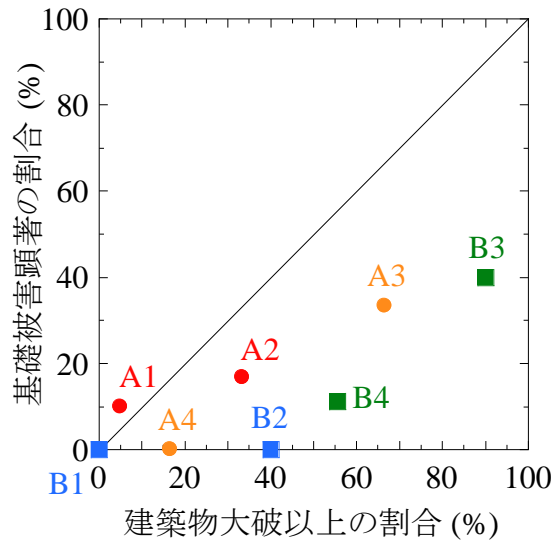


図 3.6-5 建物被害と基礎被害の割合の比較

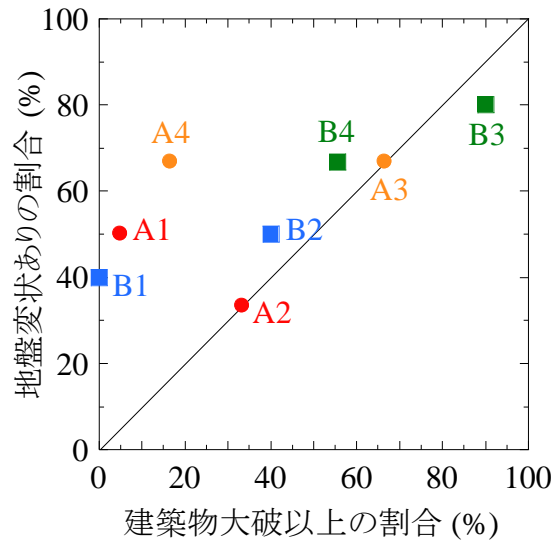


図 3.6-6 建物被害と地盤変状の割合の比較

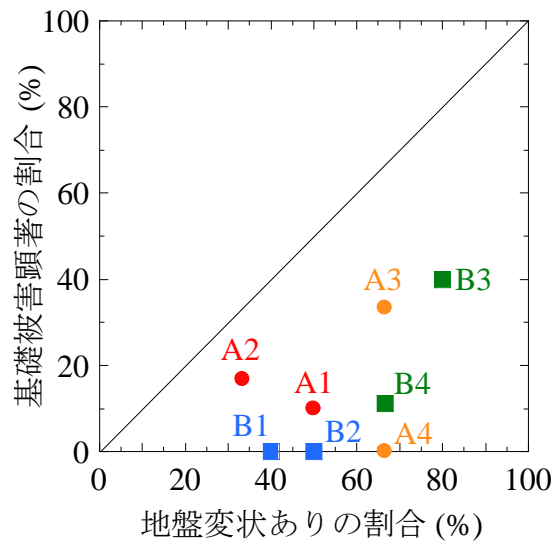


図 3.6-7 地盤変状と基礎被害の割合の比較

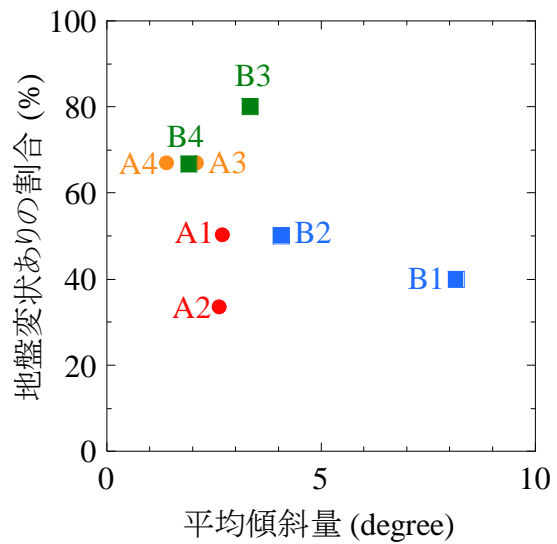
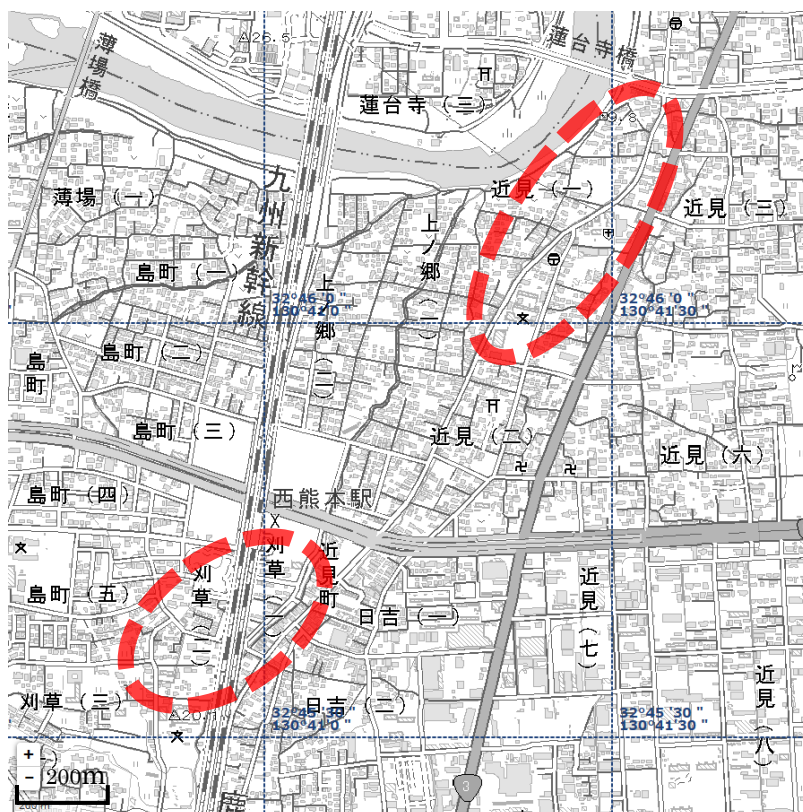


図 3.6-8 平均傾斜量と地盤変状の割合の比較

### 3.6.3 熊本市南区の液状化被害調査

#### (1) 調査範囲と調査方法

地盤の液状化及びそれによる建築物の被害の調査は、図 3.6-2 に示す熊本市南区近見地区及び刈草地区の赤点線の範囲を対象に、地上目視により実施した。液状化発生の有無は、地震直後の調査では地表の噴砂痕などにより確認する機会が多いが、調査時(4月23日)は発災後1週間が経過しており、その間には調査当日を含めて降雨があった。そこで、本調査では顕著な地盤変状の有無と建築物の沈下・傾斜及び周辺地盤の沈下の状況によって液状化の発生の有無を判断した。



10 図 3.6-9 熊本市南区近見地区及び刈草地区における液状化被害調査の範囲(赤点線)(背景地図: 国土地理院電子地形図(タイル))

#### (2) 被害の概要

図 3.6-9 の北西部に位置する近見では、写真 3.6-6 に示すように、2 階建て木造住宅が上部構造に損傷のないまま沈下・傾斜している状況が多く見られた。これは、1995 年兵庫県南部地震や 2011 年東北地方太平洋沖地震で液状化した地域においても広く見られた光景であり、地盤の液状化によるものと思われる。写真 3.6-7 は、地盤の液状化により沈下・傾斜したと思われる 2 階建て店舗併用住宅及び 3 階建て商業建築である。写真から、これらの沈下・傾斜の程度は、上述の木造住宅のそれに比べて、大きいように見える。同様の建築物の沈下・傾斜被害は、他にも数棟見られた。なお、これらの建築物の基礎形式は確認できなかったが、沈下・傾斜の状況から、直接基礎と思われる。写真 3.6-8 は、地盤の液状化により周辺地盤が大きく沈下したと思われる病院である。周辺地盤が沈下して建物との間に大きな段差が生じていることから、この建築物は(先端支持による)杭基礎である可能性が高い。

図 3.6-9 の南東部に位置する刈草においては、JR 線の東側の範囲では、写真 3.6-9 に示すように、地盤の液状化により沈下・傾斜したと思われる 3 階建て店舗併用住宅が数棟見られた。また、液状化被害により、倒壊・崩壊に至ったものがないことが確認されている。一方、JR 線の西側の範囲では、建築物の大多数は 2 階建て木造住宅で、地盤にも建築物にも地盤の液状化に起因する被害があるようには見えなかった。新築中の 2 階建て木造住宅の工期表示の中に、宅地が柱状改良されている旨の記載が見られた（写真 3.6-10）ことから、地盤改良によって宅地の液状化発生が抑制されている可能性も考えられる。

以上より、熊本市南区の九州新幹線沿いの緑川と白川に挟まれた地域について、建築物の液状化被害を次の通りに分類できる。

- 10 1) 液状化の影響で地盤沈下が生じているが、基礎形式によると思われる影響で建築物に傾斜被害が生じていないもの
- 2) 液状化の影響で地盤沈下が生じ、建築物に著しい傾斜被害が生じているもの

現時点で確認できる他機関での調査報告として東京電機大学の安田教授によると熊本市南区や緑川沿い、秋津川沿いで液状化被害が広く見られているとしている。国総研・建研による調査でも、液状化被害は南区で広範囲で見られた。ただし、液状化による地盤沈下量には地域差が見られており、地域差は約 200m 程度の距離の間で顕著に見られた。液状化による地盤の沈下メカニズムには不明な点が多く残されており、現時点で沈下量の大小の原因を推察することはできない。



写真 3.6-6 地盤の液状化により沈下・傾斜したと思われる 2 階建て木造住宅と 1 階玄関部分の沈下状況



写真 3.6-7 地盤の液状化により沈下・傾斜したと思われる 3 階建て商用建築物



写真 3.6-8 地盤の液状化により周辺地盤が大きく沈下したと思われる病院とその沈下状況



写真 3.6-9 地盤の液状化により沈下・傾斜したと思われる 3 階建て店舗併用住宅

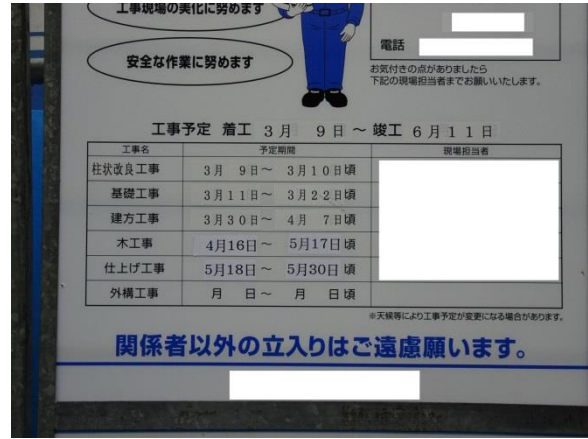


写真 3.6-10 宅地が柱状改良されている住宅

### 3.6.4 まとめ

本節では、国総研・建研が実施した益城町における調査及び熊本市南区における液状化に関する調査に基づく分析を行った。得られた知見は次の通りである。

- 益城町における調査（県道 28 号線に直交する 2 本の通り沿い、計 145 棟）においては、建築物の敷地や周辺道路について、著しい地盤変状を確認した。また、建築物の基礎についても、ひび割れ等の軽微な損傷を含め、122 棟について被害の有無を確認した。
- 倒壊・崩壊又は大破した建築物について、敷地の地盤変状と建物基礎の被害との関連を分析したところ相関は明確ではなく、益城町における建築物の著しい被害のうちその要因が地盤変状であることが明らかなものは少なかった。
- 熊本市南区の緑川と白川に挟まれた地域において、液状化の影響と考えられる建物の沈下・傾斜および地盤沈下が生じていることを確認した。当該地域内の建築物には、沈下・傾斜被害が生じていないものと生じているものがあったが、過去の震災事例と照らして、建物規模・形状や地盤条件の差違が影響した可能性が考えられる。

### 参考文献（3.6 節）

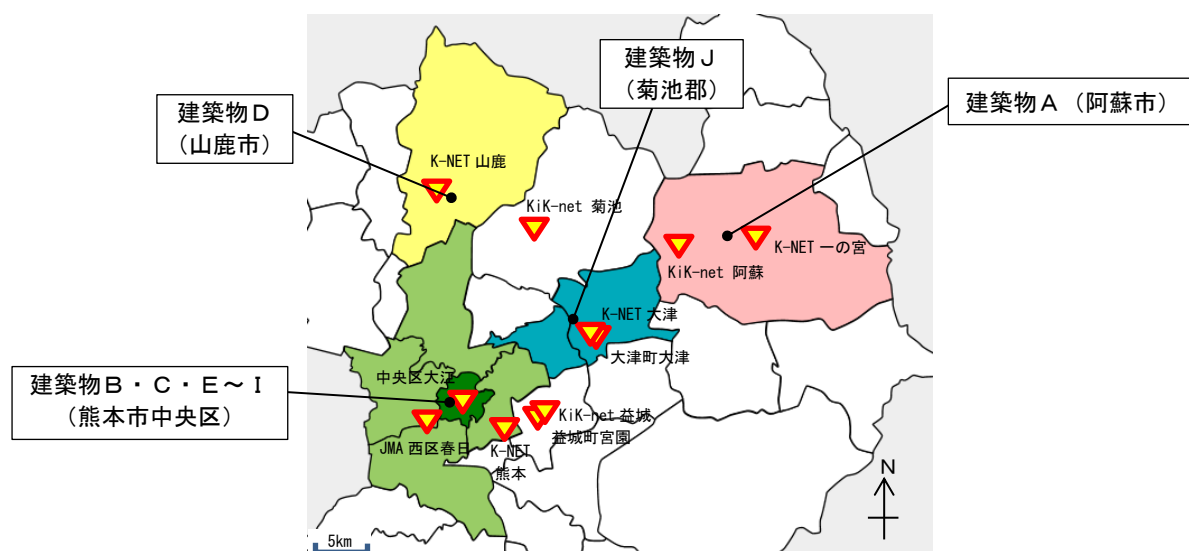
- 3.6-1) 平成 28 年(2016 年)熊本地震による建築物等被害第四次調査報告  
(<http://www.nilim.go.jp/lab/bbg/saigai/index.html>;  
<http://www.kenken.go.jp/japanese/contents/topics/2016/index.html>)
- 3.6-2) 東京電機大学理工学部理工学科地震・地盤工学研究室 HP  
(<http://yasuda.g.dendai.ac.jp/>)
- 3.6-3) 岡田成幸、高井伸雄：地震被害調査のための建物分類と破壊パターン，日本建築学会構造系論文集，No. 524，pp.65-72，1999.10.

### 3.7 免震建築物の被害の特徴と要因

#### 3.7.1 調査の概要・範囲等

今回の地震の被災地域である熊本・大分両県内における免震建築物の棟数は、確認された範囲  
5 で熊本県 20 数棟、大分県 10 数棟（戸建てを除く）である。これらの免震建築物に対し、国総研・  
建研が熊本県内の 12 棟（熊本市 7 物件 9 棟、ほか阿蘇市、菊池郡、山鹿市それぞれ 1 棟）を対象  
に免震層内及び周辺を目視確認、建物管理者及び使用者へのヒアリングを中心とした現地調査を  
実施<sup>3.7-1)</sup>しており、委員会における被害原因の分析はこれらの調査の結果を用いて行った。なお、  
10 国総研・建研の調査の対象となる建築物は、震源に近い熊本市内を中心に、事前連絡等により免  
震層及び周囲の状況が把握できているものから選定されている。

調査対象とされた免震建築物及び近傍の代表的な地震観測点の位置を図 3.7.1-1 に、また、各  
種的设计情報を表 3.7.1-1 に示す。



15 図 3.7.1-1 国総研・建研の調査対象の建築物（A～J）及び地震観測点（▽）位置

#### 3.7.2 被害調査の結果及び原因の分析

##### (1) 調査結果

国総研・建研の調査において報告された免震建築物の被害は、大きく次の 4 種類に分類できる。

- 20
- ①ダンパー取付け基部の損傷（建築物 C、建築物 I）
  - ②外付け階段の損傷（建築物 G（B 棟）、建築物 H（E 棟・W 棟））
  - ③免震材料の変状（多数）
  - ④エキスパンションジョイント等の変状（多数）

これらのうち被害①及び②は、構造耐力上主要な部分に関する損傷であり、過去の震災調査で  
25 は報告されたことのないものである。ただし、建物使用者・管理者等へのヒアリング等によれば、  
いずれの免震建築物も継続使用上の大きな支障は見られず、周囲の建築物（耐震設計）と比較し  
て一定の効果があったとの回答がみられた。

被害③及び④については、これまでも多くの報告がある。



表 3.7.1-1 国総研・建研の調査対象の建築物一覧（建築物A～Jは図 3.7.1-1 と対応）

用途等 （*は告示免震 <sup>a</sup> ）	クリア ランス <sup>b</sup>	上部構造		免震材料 <sup>d</sup>	評価年 <sup>e</sup> （建設年）	罫書き 記録	近傍 <sup>f</sup> の 震度（本震）
		形式 <sup>c</sup>	階数				
A 医療施設*	620mm	RC	4	RB, LRB	(2014)	○	6 弱
B 事務所*	650mm	S+SRC	8	RB, SnRB, USD	(2015)	○	6 強
C 共同住宅*	550mm	RC	13	RB, USD, LD	2007		6 強
D 事務所	600mm	S	5+B1	RB, ESD, USD	2012	○	5 弱
E 事務所	600mm	S	5+B1	RB, LRB, LSB, OD	2014		6 強
F 宿泊施設	450mm	RC	12	HRB, OD	2001		6 強
G 共同住宅	A棟	600mm	RC	14	HRB	1996	6 強
	B棟	600mm	RC	11	HRB	1996	
H 共同住宅	E棟	600mm	RC	14	HRB	2000	6 強
	W棟	600mm	RC	14	HRB	2000	
I 共同住宅*	600mm	RC	15	RB, USD, LD	2006		6 強
J 倉庫	580mm	S+SRC	2	RB, LRB, ESD	2011	○	6 強

a…平成12年建設省告示第2009号を満たすものとして設計された免震建築物をいう。  
b…免震建築物と周囲に設けられた擁壁等との間の距離。免震建築物の地震時の動きを損なわないように設けられる。  
c…RC：鉄筋コンクリート造、S：鉄骨造、SRC：鉄骨鉄筋コンクリート造  
d…RB：天然ゴム系積層ゴム、HRB：高減衰積層ゴム、LRB：鉛プラグ入り積層ゴム、SnRB：錫プラグ入り積層ゴム、ESD：弾性すべり支承、LSB：直動転がり支承、USD：U形鋼材ダンパー、LD：鉛ダンパー、OD：オイルダンパー  
e…告示免震については建築確認の取得年を、時刻歴応答解析を行い指定性能評価機関等において性能評価を実施した建築物については性能評価の取得年を指す。  
f…それぞれの建築物の近傍における地震観測点。AはK-NET一の宮、B及びIはJMA西区春日、DはK-NET山鹿、JはK-NET大津、その他（C・E・F・G・H）はすべて中央区大江（自治体震度計）である。

## （2）被害要因の分析

### i）被害①（ダンパー取付け基部の損傷）

5 被害①は、鉛ダンパーや鋼材ダンパーを上部構造に緊結するために設けられた取付け基部が免震層上部の鉄筋コンクリート造の床スラブとの間の定着部で破壊を生じていたり、また、取付け基部の躯体に損傷を生じていたりする被害である（写真 3.7-1）。スラブの被害は、その上面まで達しているものもあった（写真 3.7-2）。

10 この被害は建築物Cと建築物Iの2棟で見られており、鉛ダンパー（建築物C：6基、建築物I：8基）についてはその全てで、鋼材ダンパー（建築物C：4基、建築物I：8基）では建築物Iの3基で生じていた。

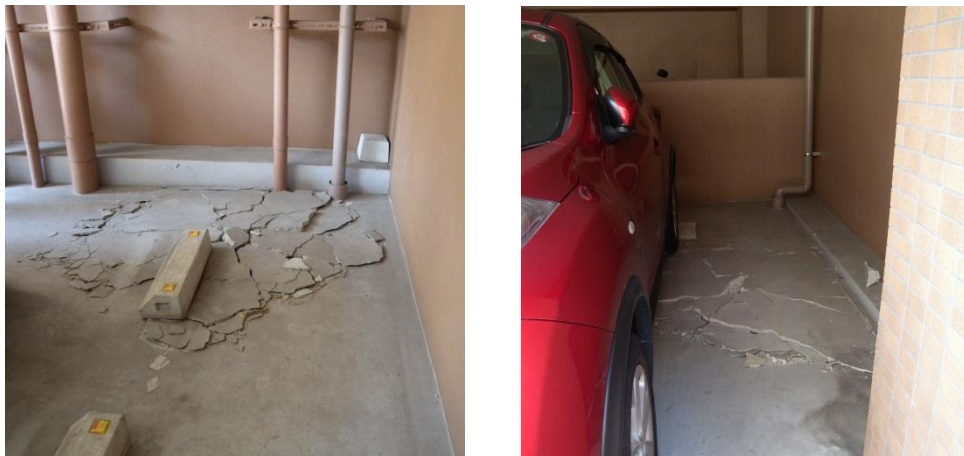
15 ①に類似の被害として、過去に2005年福岡県西方沖地震で報告された鉛ダンパーの構造躯体への定着位置における破損被害<sup>3.7-2)</sup>があり、この原因として同報告では、定着部の設計についてダンパーの水平変形に伴って生ずる（せん断力以外の）曲げと引張力に対する配慮不足を指摘している。2009年には設計用の資料も整備（最新版は2014年の第2版<sup>3.7-3)</sup>されたが、被害①が見られた建築物はこの資料以前の設計であり、上記の分析と同様に、設計の際に想定した免震材料の変形等に対し当該部位に生ずるせん断応力や曲げ応力等の想定が十分でなく、部材の配置計画や損傷部位の配筋などについて適切な設計が行われなかったことが被害要因として考えられる。

さらに、被害を受けたダンパーの取付け基部は、その周囲にはり等の部材が適切に配置されておらず、このことが被害を拡大した要因の一つと考えられる。実際に、被害を受けた鉛ダンパーに隣接して取付け基部にはり等が配置されたU形鋼材ダンパーがあり、基部の損傷が生じていないものがあった。(写真 3.7-3)。ただし基部に対して周囲のはりが偏心して取り付けられている等々でかえって被害を拡大した事例もみられた。

5



写真 3.7-1 鉛ダンパー取付け基部の被害 (建築物C)



10

写真 3.7-2 免震層上面の床スラブの損傷 (建築物I)



写真 3.7-3 鋼材ダンパー (周囲のはり等の配置あり) と鉛ダンパーの比較 (建築物C)

## ii) 被害② (外付け階段の損傷)

被害②は、中間階免震の上部構造に対し外付け階段を張り出して立ち下げ、階段部分を個別に積層ゴム支承で支える形式としたものについて、階段中央の壁部材で発生していた (図 3.7-2、写真 3.7-4 及び写真 3.7-5)。この被害の要因としては、外付け階段の設計を長期荷重に対してのみ行い、地震に対しては本体架構の付加質量として取り扱っていたため、地震時の検討対象となる架構に外付け階段部分が含まれておらず、その結果、地震時に外付け階段の部材に生ずるせん断や曲げ応力等の想定が十分でなく、免震層の応答変位に対して追従できずに損傷に至ったことが考えられる。

10

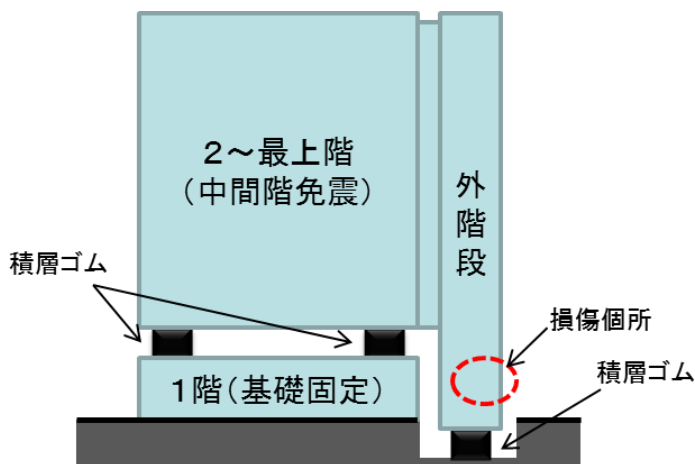


図 3.7-2 中間階免震の上部構造に対する外付け階段の配置と損傷位置



写真 3.7-4 外付け階段の被害 (建築物G)

15



写真 3.7-5 被害状況 (建築物G : 写真左は階段南側、右は階段北側)

## iii) 被害③ (免震材料の変状)

被害③は、積層ゴム支承の保護 (化粧) カバーのずれ・脱落や胴部保護ゴムのめくれ等、鋼材ダンパーの屈曲部の残留変形や塗装の剥がれなどである (写真 3.7-6、写真 3.7-7)。これらの要因は、地震時に免震材料に生ずる一方向又は繰返しの変形と考えられる。性能評価の範囲を超えるような著しい変形である場合を除き、地震時の免震性能の低下などの問題は発生せず、ただし耐久性上の影響のおそれがあることから、あらかじめ定められた免震建築物の維持管理の基準にしたがって地震後に点検を実施した上で必要に応じ補修又は交換等の措置を講ずることで対応する (できる) ことが多いと考えられる。



写真 3.7-6 化粧カバーのずれ及び胴部保護ゴムのめくれ (建築物A)

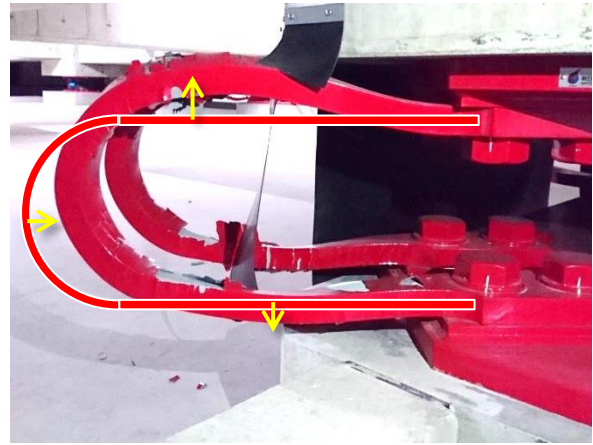


写真 3.7-7 鋼材部分の残留変形と塗装のはがれ (建築物B)

5 iv) 被害④ (エキスパンションジョイント等の変状)

被害④は、免震建築物の周囲や免震層内に設けられたクリアランス部において見られた変状である (写真 3.7-8～写真 3.7-11)。免震建築物が性能を発揮するためには、免震層の水平方向の変形量を確保するため、免震部分の周囲にクリアランス部等を設け、免震挙動を阻害しないようにする必要がある。建築物を使用する上では、このクリアランス部等には居住者や利用者の通行のためのエキスパンションジョイントや、逆に誤って人が立ち入ることによる危険を防止するための柵等が設置されることが多い。被害はこうした部分を中心に生じており、建築物の応答に合わせて可動するように設計されるが実際には想定したとおりの挙動をしなかったことや、設計者・管理者等が地震時の免震層の可動範囲や動きの影響を適切に想定できなかったことが主な被害の要因と考えられる。

15 調査の範囲では、こうした被害によって地震時の免震性能の低下などの影響が生ずることはなかったと考えられる。ただし、写真 3.7-8 に示す部位など、損傷する前提で設計されているがその後の継続使用にあたって支障となる (通常は予想外の) 大きな損傷に至ったものなどがあつた。



写真 3.7-8 エキスパンション部の変状 (建築物G : 破損した天井被覆を撤去済み)

20

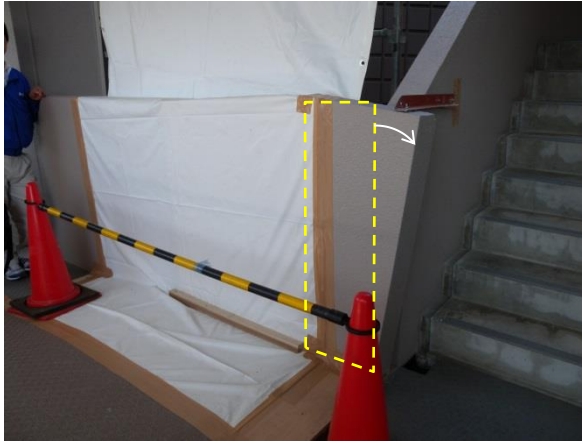
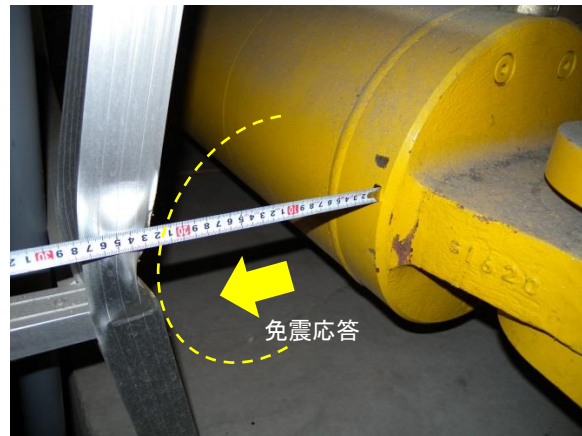


写真 3.7-9 同 変状② (建築物H (W棟) : 左は渡り廊下手すり壁の変形、右はカバーの変形)



5 写真 3.7-10 クリアランス部の変状① (建築物F : 左は配管吊り下げ用ボルトの変形、右はオイルダンパー胴部の移動・接触に伴う周囲柵の変形)

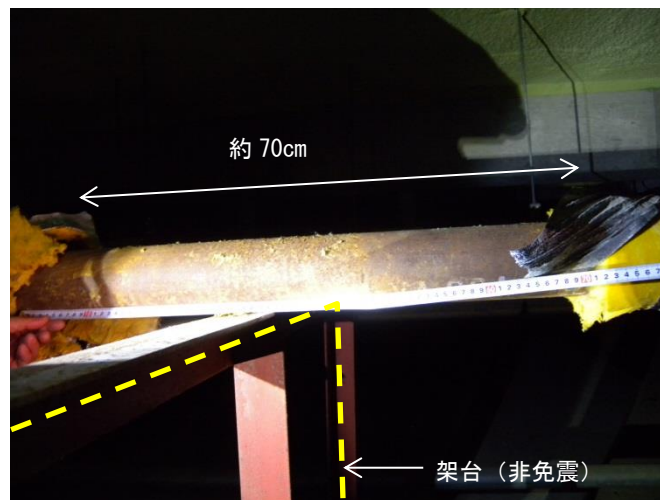


写真 3.7-11 同 変状② (建築物H (W棟) : 配管の断熱被覆の損傷)

### 3.7.3 まとめ

国総研・建研が熊本市及びその周辺で実施した 12 棟の免震建築物の現地調査結果に基づき、今回の地震における被害状況と要因分析の結果についてまとめると、次のとおりである。

- 5 ○ 免震建築物は、家具の転倒防止などには一定の効果を発揮した。ただし、12 棟中 5 棟（建築物 C、G（B棟）、H（E棟及びW棟）、I）で構造耐力上主要な部分の被害が見られた。
- 構造耐力上主要な部分の被害は、ダンパー取付け基部の損傷及び外付け階段の損傷である。これらは、いずれも過去の震災の被害調査では報告されていないものであり、部材の断面や配筋等が不足していたため、地震時の免震材料の応答変形に追従できずに被害を生じたものと考えられる。
- 10 ○ その他、過去の震災と同様に、免震材料の変状やエキスパンション周辺などクリアランス部の損傷が生じた被害が見られた。また、通路となる部分のエキスパンションカバー等の一部で、ゆがみや破損によって被災直後の通行などに支障を生じたものがあった。

#### 参考文献（3.7 節）

- 15 3.7-1) 国土交通省国土技術政策総合研究所・国立研究開発法人建築研究所：「平成 28 年(2016 年)熊本地震による建築物等被害第九次調査報告」，  
<http://www.kenken.go.jp/japanese/contents/topics/2016/index.html>
- 3.7-2) (一社)日本建築学会：「2005 年福岡県西方沖地震災害調査報告」，pp.201～205，2005
- 3.7-3) (一社)日本建築学会：「非構造部材の耐震設計施工指針・同解説および耐震設計施工要領」，  
20 p.271，2003.1

## 3.8 非構造部材の被害の特徴と要因

### 3.8.1 調査の概要・範囲等

5 これまでの非構造部材を主対象とした地震被害調査としては、建築学会が 4/23～4/24 に熊本市内、4/30～5/1 に大分県及び熊本県で実施したもの<sup>3.8-1)</sup>があるほか、建築学会の各被害調査報告の中で一部、非構造部材の被害報告がある。

10 国総研・建研では、非構造部材に関する被害調査（第三次調査、第十一次調査、第十三次調査、）を行っている<sup>3.8-2)</sup>。第三次調査は報道等で非住宅の非構造部材に被害があるとの情報のあった建築物を対象に、第十一次調査は事前の聴き取り調査で被害情報のあったホール等を有する建築物  
15 を対象に、第十三次は熊本県と熊本市への事前ヒアリング情報に基づいて被害が大きいと考えられる学校等の体育館を対象に、内部調査をそれぞれ実施している。調査建築物の所在地は熊本市、益城町であり、調査行程上で建築物の外観から非構造部材の被害調査を行っている。内部調査を行った対象は、学校等 14 件、音楽等用ホールを有する施設 5 件、自治体運動施設 3 件、美術館、空港旅客ターミナルビル、展示用ホールを有する施設が各 1 件である。

15 本委員会では、これらを対象として検討を行った。

### 3.8.2 被害調査の結果及び要因の分析

#### (1) 吊り天井の被害

20 国総研・建研による上記の調査において内部調査を実施した 25 件の内、10 室で、表 3.8-1 に示す通り、吊り天井に顕著な被害を確認した（①～⑤、⑦～⑩）。天井種類から見ると、8 室で在来工法による天井、1 室でシステム天井、1 室でラスモルタル天井が使われており、いずれも以前から被害の確認されている種類の天井での被害である。

25 特定天井（現行の建築基準法施行令第 39 条第 3 項に規定する「特定天井」。①6m 超の高さにあり②水平投影面積 200 m<sup>2</sup>超で③質量 2kg/m<sup>2</sup>超である吊り天井が該当する）に該当するものの被害が 10 室中の 6 室であり、用途別にみた内訳は、音楽等用ホール 3 室、展示用ホール 1 室、展示室 1 室、剣道場 1 室である。いずれも特定天井に関する技術基準の制定以前に設けられたものであって同技術基準を満たすものではない。また、特定天井に該当しないものの被害は 4 室で、用途別にみた内訳は、体育室 2 室、柔道場 1 室、ライフル射場 1 室である。

30 天井の形態から見ると、おおむね平面（一様な勾配などを含む）のものが 4 室、一方向の断面形状が複雑（のこぎり形状など）なものが 4 室、天井面の一部に折り上げや折れ曲がりがあるものが 2 室である。天井が平面の室では被害は比較的小さいものに留まっているが、捨て張りの天井板が金属板であった室で全面的に脱落していたり、吊り長さが一様でない天井で比較的短い吊りボルト（長さ 0.4m。その他は 1.9m と 2.4m。）が多数脱落していたりするなどの被害を生じている。音楽等用ホール等で天井面が一方向の断面形状が複雑な天井を有する室では野縁と天井板が  
35 一体的に落ちるなど比較的大きな被害を生じている。

国総研・建研の内部調査で確認した被害の外、⑥に示すような特定天井の被害が自治体体育館の体育室について報告されている。立体的に折れ曲がったシステム天井が全面的に脱落しており、特定天井に関する技術基準の制定以前に設けられたものあって同基準を満たすものではない。

40 落下した特定天井はすべて平成 26 年の新基準導入以前の未対策のものであり、同基準に規定する斜め部材の不足による揺れ、クリップ等の接合部の耐力不足等が被害要因と考えられる。その

他の吊り天井の被害も同様に、地震時の揺れ、接合部の耐力不足等が要因と考えられる。

表 3.8-1 吊り天井の被害

特定天井				
	①音楽等用ホール	②音楽等用ホール	③展示用ホール	
				
	④展示室	⑤剣道場	⑥体育室（自治体体育館）	
	その他			
		⑦ライフル射場	⑧体育室	⑨体育室（舞台部分）
				
⑩柔道場				

5 (2) ガラス開口部等の被害

国総研・建研による調査と建築学会の被害報告会での報告それぞれの被害情報を踏まえて、ガラスによる開口部等の被害発生状況を整理すると表 3.8-2 のようになる。

①に示すようなガラスをサッシに硬化性パテどめにする方法は、昭和 53 年の 2 月と 6 月に起こった宮城県沖地震で被害を受けた窓ガラスの多くが硬化性パテどめであったことなどを踏まえて昭和 45 年建設省告示第 109 号が改正されて“地階を除く階数が三以上である建築物の屋外に面する帳壁”について“帳壁として窓にガラス入りのはめごろし戸(網入ガラス入りのものを除く。)を設ける場合にあつては、硬化性のシーリング材を使用しないこと。ただし、ガラスの落下によ



る危害を防止するための措置が講じられている場合にあつては、この限りでない。”と規定されたことを踏まえて、現在の新築では使われていない。

②、③と④はガラスをサッシに弾性シーリング材で納めるはめこみ構法である。②、③は比較的小さなガラスが、④は比較的大きなガラスがそれぞれ用いられており、②、③のような被害は以前から体育館等で報告があり、④のような被害の報告は少ない。これらはめこみ構法のガラス開口部の耐震性能については層間変形角に対する検討があり<sup>3.8-5)</sup>、サッシ枠が変形してもガラスと接触しないように、ガラスとサッシ枠との間に適正なクリアランスを設けて変形を吸収するようにしている。ガラスとサッシ枠との間のクリアランスで吸収できる以上の変形が構造体に生じたことが損傷につながったと想定される。

⑤は大判のガラスによる開口部である。ガラススクリーン構法の被害は以前から低層鉄骨造建築物を中心に被害報告があり、東日本大震災の際には仙台市近辺において多くの被害報告がある<sup>3.8-6)</sup>。ガラススクリーン構法の耐震設計では層間変形角の設計値がチェックポイントとされており、構造体の層間変形角が示されているときはそれに従って設計し、そうでない場合は1/100を想定する、とされ、最低でも1/100の層間変形角を考へることになっている<sup>3.8-7)</sup>。この被害についても、構造体に生じた変形が設置されたガラススクリーン構法が許容できる以上となったことが損傷につながったと想定される。

⑥は合わせガラスを用いたDPG構法によるものであり、過去の地震では被害報告はあまり見られない。本震後の写真<sup>3.8-1)</sup>を見ると、両側の柱際のガラスを除くと、全5段中で下3段のガラスが損傷している。ガラスは各段で水平方向について1枚毎に前後に出入りしており、ガラス被害の多くは“後ろ”のガラスで生じていた。地震動によりガラスを支持するフレームに生じた大きな応答が損傷につながったことが想定されるが、被害要因を明らかにするには更に詳細な検討が必要になる。

⑦はガラスを用いた防煙垂れ壁である。ガラス防煙垂れ壁は、低層で大規模な鉄骨造の建物に多数採用されていて以前から多数の被害報告があるものである<sup>3.8-8)</sup>。ガラスには網入りガラスまたは線入りガラスが用いられており、地震時のガラス端部と壁・柱などとの取合い部の破損防止策としてクリアランスを十分にとってガラス端部に緩衝材を設け、ガラスが破損した場合のことを考慮してガラス落下防止用の下枠等があるものを採用する、などが設計上の注意点として挙げられている<sup>3.8-7)</sup>。被害を確認したガラス防煙垂れ壁はこれらの注意点を満たしておらず、損傷・脱落につながったものと想定される。

上記のように、ガラス開口部等では、耐震性が低くて新築では既に使われないような構法での被害のみならず、比較的新しい構法でも被害が確認されている。設置されているガラス開口部等の変形追従性や耐力を上回る変形や加速度がガラス開口部等を支持する箇所が生じたことが損傷の要因として想定され、比較的新しい構法など、被害によっては今後更に詳細な検討が必要と考へる。

表 3.8-2 ガラスによる開口部等の被害

	現在の新築では同様の使い方をしないもの	現在も新築で使われているもの	
		被害報告がある程度あるもの	被害報告が少ないもの
サッシ窓	①硬化性パテどめ	② ガラスが小さいもの	④ガラスが大きいもの
		③ ガラスが小さいもの	
全面ガラス		⑤ガラススクリーン構法	⑥DPG 構法
		⑦ガラス防煙垂れ壁	

(3) 内装の被害

5 国総研・建研による調査と建築学会の被害報告会での報告それぞれの被害情報を踏まえて、内装の被害発生状況を整理すると表 3.8-3 のようになる。

①、②、③はいずれも下地にボードで仕上げた壁の被害である。①は体育館の舞台の壁において足下での鋼製の下地の損傷やボードのずれが見られ、生じた慣性力や層間変位の影響が要因と考えられる。②は ALC パネルによる壁を下地にボードで仕上げた壁からボードが脱落しており、

下地の ALC パネルに生じた大きな変位にボードが追従できなかつたことが要因と考えられる。③は特定天井に被害があった室の高窓につながる立ち上がり壁からのボードの脱落被害であり、このように高所から脱落した被害報告は少なく、地震時に下地に生じた変形が要因と考えられる。

④、⑤はボード以外による壁の被害である。④はコンクリートブロック壁に孔あきベニアで仕上げた壁の損傷であるが、コンクリートブロック壁は以前の地震でも脱落を含めて被害が確認されており、地震時に生じた加速度や層間変位の影響が想定される。

⑤はコンクリート製の自立した壁の転倒であり地震時の慣性力による影響と考えられるが、壁の転倒は鋼製下地材のものも含めて過去の地震や今回の地震でも被害が見られるが、事例としては少ない。

10 被害を受けた各部位において、下地や支持部分などに生じた変形や加速度が増大してそれぞれの壁が有する変形追従性や耐力を超過して被害を生じさせたと考えられる。

表 3.8-3 内装の被害

	現在の新築では同様の使い方をしていないもの	現在も新築で使われているもの	
		被害報告がある程度あるもの	被害報告が少ないもの
ボードによるもの		 <p>①壁の損傷</p>	 <p>③高所からのボードの脱落</p>
		 <p>②ボードの脱落</p>	
その他		 <p>④コンクリートブロック壁の損傷</p>	 <p>⑤コンクリート造の自立した壁の転倒</p>

#### (4) 外装の被害

国総研・建研による調査より、外装の被害発生状況を整理すると表 3.8-4 のようになる。

①のラスシートモルタル外壁や②のラスモルタル外壁はこれまでの地震でも被害報告が少なからず見られるものであり、比較的古い鉄骨造での被害が多く見られる。これらの被害が見られたような鉄骨造建築物の外壁には現在は乾式工法が用いられることがほとんどであり、新築する際に①や②の被害で見られたような使い方をすることはほぼないと思われる。

③のようなタイル張り外壁の被害は、過去の地震でも今回の地震でも少なからず見られる被害であるが、③に見られるように下地の鉄筋コンクリート壁の被害が確認されるものも少なくない。

④の被害に見られる ALC 縦壁挿入筋構法の被害は以前の地震でも被害報告が見られるものである。ALC パネルを用いた外壁を縦壁に用いる場合には現在はロッキング構法を用いるようになっており、縦壁挿入筋構法が用いられることはない。

⑤、⑥は ALC 横壁構法による外壁の被害である。⑤のように天井面のレベルで脱落等を生じる被害は過去の地震でも報告があり今回の地震でも複数見られる。⑥は ALC 横壁を支持する軽量形鋼の下地から傾斜を生じたものであり、過去の地震ではあまり被害報告はない。

⑦は PC パネル外壁の被害であるが、過去の地震では、比較的古い建築物について被害報告が見られる。PC パネルについては、硬化性パテどめのガラス同様に、昭和 53 年の宮城県沖地震の被害を踏まえた昭和 45 年建設省告示第 109 号の改正で“地階を除く階数が三以上である建築物の屋外に面する帳壁”について“プレキャストコンクリート板を使用する帳壁は、その上部又は下部の支持構造部分において可動すること。ただし、構造計算又は実験によつてプレキャストコンクリート板を使用する帳壁及びその支持構造部分に著しい変形が生じないことを確かめた場合にあっては、この限りでない。”とされており、⑦の被害のあった建築物も支持構造部は可動となっていたものと考えられる。

湿式工法、乾式工法ともに、被害の見られたような建築物を新築する際に現在は使わないような比較的耐震性の低い構法における被害を確認した。その他の被害については、各構法の外装材の支持部に生じた応答の増大や設置された非構造部材の耐力の不足が被害につながった可能性も考えられる。

#### 3.8.3 まとめ

非構造部材の被害については、建築学会が熊本県及び大分県で実施した調査、国総研・建研が熊本市及び益城町近傍で実施した調査に基づいて取りまとめた。以下に、これらの調査に基づいて被害の概要と要因を要約して示す。

○吊り天井については、内部調査をした建築物 25 件のうち 6 室において特定天井の落下が確認された。その他にも自治体体育館等での被害が報告されている。

・被害を確認した天井は、規模、用途様々であり、東日本大震災と同様に、単位面積重量が重い天井の被害、ホール等の不特定多数の人が使う室での被害も確認されている。

・落下した特定天井はすべて平成 26 年の新基準導入以前の未対策のものであり、同基準に規定する斜め部材の不足による揺れ、クリップ等の接合部の耐力不足等が被害要因と考えられる。



・その他の吊り天井の被害も同様に、地震時の揺れ、接合部の耐力不足等が要因と考えられる。

○ガラスの被害が比較的新しい構法である DPG 構法で確認されており、支持部材に生じた大きな応答によりガラスが損傷したと考えられる。

○その他、過去の地震と同様、生じた加速度や層間変位に十分に追従できなかったことによる被害（大小ガラス開口部の破損・脱落、ガラス防煙垂れ壁の破損・脱落、外壁パネルの破損・脱落、タイル等湿式外壁の破損・脱落、内装の壁の破損・脱落・転倒、等）が見られている。

5

表 3.8-4 外装の被害

	現在の新築では同様の使い方をしないもの	現在も新築で使われているもの	
		被害報告がある程度あるもの	被害報告が少ないもの
湿式工法	 <p>①ラスシートモルタル外壁</p>	 <p>③タイル張り外壁</p>	
	 <p>②ラスモルタル外壁</p>		
乾式工法	 <p>④ALC 縦壁挿入筋構法</p>	 <p>⑤ ALC 横壁アンカー構法</p>	 <p>⑥ ALC 横壁アンカー構法</p>

参考文献（3.8 節）

3.8-1) 清家剛:平成 28 年熊本地震における非構造部材の被害について(日本建築学会「2016 年

熊本地震」地震被害調査速報会)

- 3.8-2) 平成 28 年 (2016 年) 熊本地震による建築物等被害第三次調査報告 (速報)、国土交通省  
国土技術政策総合研究所、国立研究開発法人建築研究所、平成 28 年 5 月
- 3.8-3) 平成 28 年 (2016 年) 熊本地震による建築物等被害第十一次調査報告、国土交通省国土技  
5 術政策総合研究所、国立研究開発法人建築研究所、平成 28 年 6 月
- 3.8-4) 平成 28 年 (2016 年) 熊本地震による建築物等被害第十三次調査報告、国土交通省国土技  
術政策総合研究所、国立研究開発法人建築研究所、平成 28 年 9 月
- 3.8-5) 建築工事標準仕様書・同解説 JASS17 ガラス工事, (一社) 日本建築学会, 2003 年 12 月
- 3.8-6) 板硝子協会: 平成 23 (2011) 年東北地方太平洋沖地震におけるガラス等の被害調査報告  
10 書, 2012 年 1 月
- 3.8-7) 安全・安心ガラス設計施工指針 増補版, (一財) 日本建築防災協会, 2014 年 9 月
- 3.8-8) 2011 年東北地方太平洋沖地震災害調査速報, (社) 日本建築学会, 2011 年 7 月

## 4. 調査結果を踏まえた総括

本報告の第2章（地震及び地震動の特徴）及び第3章（被害状況・被害要因等の分析）の調査結果を踏まえ、「建築物の倒壊・崩壊等の防止」の観点を始め、「建築物の被災後の継続使用性」や本委員会です十分な検討を加えられなかった「その他の課題」についても、本委員会の検討結果の総括を各分野の報告から主要な項目を抜粋する形で示す。

各項目については、本委員会です直接の目的とする調査あるいは分析の結果に加えて、その対応として今後進めて行くべき検討の方向性についても、一例として下線を付して区別した上で示した。この下線部を参考として委員会設置者である国総研及び建研、また国土交通省においてより具体的な措置の検討がなされること、さらには、その他の関係機関や建物所有者、設計者、技術者、関係業界においても今後の活動に当たって参考にしていただくことを期待したい。

なお、本章の内容は今回の熊本地震を対象とした報告の内容に基づき、その抜粋として記述されている。対応として例示された内容についても同様である。したがって、本章で示された内容以外にも技術的な課題があり得ることに留意されたい。

### 4.1 建築物の倒壊・崩壊の防止について

木造及び鉄骨造で小規模（住宅中心）の建築物について、益城町及びその周辺の被害に基づき検討を行った。また、中規模～大規模な建築物についても、熊本市及びその周辺の被害を含めて検討することで、倒壊・崩壊等の被害とその防止の議論を行うための適切な情報が得られたと考えられる。

本委員会の検討においては、地震地域係数は論点とならなかった。それは、新耐震基準導入以降で倒壊・崩壊の被害が見られた益城町における木造の小規模な住宅は地震地域係数を考慮しない壁量で建てられていることや、鉄骨造においても倒壊した隣棟の衝突や不十分な溶接などが倒壊要因と考えられるなど、報告の範囲では、地震地域係数の大小が倒壊したか否かに直接影響したと考えられる被害状況は確認されなかったためである。

さらに、被害要因等の分析にあたっては、前震・本震など複数回の地震を別々に扱うのではなく、一連の地震の結果としての被害を対象として検討した。

#### 4.1.1 木造

○ 旧耐震基準の木造建築物については、過去の震災と同様に新耐震基準導入以降の木造建築物と比較して顕著に高い倒壊率であった。必要壁量が強化された新耐震基準は、旧耐震基準と比較して、今回の地震に対する倒壊・崩壊の防止に有効であったと認められる一方、旧耐震基準の木造建築物については、耐震化の一層の促進を図ることが必要である。

○ 新耐震基準導入以降の木造建築物では、接合部の仕様等が明確化された2000年以降の倒壊率が低く、接合部の仕様等が現行規定どおりのものは、今回の地震に対する倒壊・崩壊の防止に有効であったと認められる。このため、2000年に明確化された仕様等に適合しないものがあることに留意し、被害の抑制に向けた取り組みが必要である。

- 大きな被害のあった益城町中心部においても、住宅性能表示制度に基づく耐震等級（構造躯体の倒壊等防止）が3のものには大きな損傷が見られず、大部分が無被害であった。このため、消費者により高い耐震性能の選択肢を示す際には、住宅性能表示制度の活用が有効と考えられる。

5

#### 4.1.2 鉄骨造・鉄筋コンクリート造等

- 旧耐震基準の鉄骨造建築物及び鉄筋コンクリート造等建築物については、過去の震災と同様に倒壊や大破の被害が見られた。一方、耐震診断及びそれに基づき耐震改修された鉄骨造建築物及び鉄筋コンクリート造等建築物には、倒壊・崩壊の被害は見られなかった。このため、旧耐震基準の鉄骨造建築物や鉄筋コンクリート造等建築物については、耐震化の一層の促進を図ることが必要である。
- 新耐震基準は、今回の地震に対する鉄骨造建築物や鉄筋コンクリート造等建築物の倒壊・崩壊の防止に有効であったと認められる。しかし、柱はり接合部における不十分な溶接方法等により倒壊又は大破した鉄骨造建築物や、下階壁抜け柱が多く存在するピロティ構造でピロティ層が大破した鉄筋コンクリート造建築物が複数確認された。これらに関しては、兵庫県南部地震後に一連の運用基準が整備されているところである。このため、新耐震基準の建築物については、こうした被害事例やそれに対応した運用基準の周知など、被害の抑制に向けた取り組みが必要である。
- その他、鉄骨造による屋根において、これまでの震災でも見られた屋根支承部の被害などが確認された。これらについては、被害事例や対策方法の周知が必要である。

10

15

20

#### 4.1.3 免震建築物

- 免震建築物は、概ね期待された構造性能を発揮した。しかし一部に、ダンパーの基部となる鉄筋コンクリート部材の破壊など、地震時に作用する力が伝達できず、期待する性能が発揮されなくなるおそれのある破壊が見られた。これらについては、被害事例や対策方法の周知が必要である。

25

#### 4.1.4 非構造部材

- 非構造部材の被害のうち特定天井に該当するものの脱落被害は、全て特定天井の基準を満たさないもので見られた。学校体育館等で落下防止対策として天井の撤去が進められている一方で、用途等により天井が必要なものもあり、特定天井について引き続き脱落被害の防止に向けた取り組みが必要である。
- その他、これまでの地震でも見られているようなガラス開口部、外壁パネル、防煙垂れ壁等の非構造部材等の落下が見られた。これらについては、引き続き、設計・施工上の留意事項について周知することが必要である。

30

35

#### 4.2 建築物の被災後の機能継続について

- 倒壊・崩壊防止など構造上の安全性は適切に確保されたが、構造部材や非構造部材等の部分的な損傷により、庁舎、体育館などの避難所、病院、共同住宅等で地震後に継続的に使用できな

40



かった事例が確認された。例えば益城町によれば、避難所として指定されていた建築物のうち使用が検討された 14 棟中 6 棟が、発災当初は損傷等により使用できなかった。こうした状況を踏まえ、今回の熊本地震を含む最近の地震被害において建築物の機能が損なわれ、継続的に使用できなかった事例について、その原因を明らかにする必要がある。

- 5 ○ 建築基準法令は、建築物の構造等に関する最低の基準を定めたものであり、構造部材や非構造部材等において全く損傷が生じないことや、被災後に継続して使用できることまでを要求しているものではない。一方で、災害時に機能を継続すべき庁舎や、防災・避難・救助等の拠点となることがあらかじめ想定されている施設等については、被害を少しでも軽減し、期待される機能が被災後に維持できるようにするための検討を行うことが必要である。

10

#### 4.3 その他の課題

##### 4.3.1 要因分析に至らなかったものの対応

- 15 ○ 益城町内において震源や地震動の特性に起因して局所的に大きな地震動入力があった可能性を検討するための地盤情報等の把握をはじめ、本報告の第3章(被害状況・被害要因等の分析)において被害や現象が報告されているものの、必要な情報が十分に得られていない等により要因分析に至っていないとされているものについては、引き続き情報収集や詳細な検討が必要である。

##### 4.3.2 今後新たに報告があった場合の対応

- 20 ○ 本委員会の調査時点では情報が得られていない項目について、今後、新たな被害や被害原因の報告があった場合には、必要に応じ被害調査や原因分析を行って適切な措置を講ずることを期待する。

## 謝辞

本報告書の作成にあたっては、多くの建築物所有者、管理者及び居住者の方々や関係機関各位から、調査への協力や情報提供などのご協力を頂きました。ここに記して、深甚なる感謝の意を表します。

位置表示や図の作成などにおいては、地理院地図、Google Map、GMT などの各プログラムを利用させて頂きました。

政府機関、地方公共団体、関係団体等による各種公表資料及び調査データの他、国立研究開発法人防災科学技術研究所が運用している K-NET、KiK-net 及び気象庁、鉄道総合技術研究所による強震観測データ、気象庁により公表された自治体の震度計データ、並びに自治体よりご提供頂いた震度計データを活用させて頂きました。